ISSN 0289-4130

研究紀要

第16号

2001

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

研　究　紀　要

第 16 号

2001

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目　　次

序

［論文］

手焙形土器……高橋　一夫（　1）
　―その宗教性と政治性―

埼玉県坂戸市中耕第21号方形周溝墓の墳丘復元試論……杉崎　茂樹（　9）

古代神社遺構の再検討……井上　尚明（21）

信仰資料としての紡錘車……鈴木　孝之・若松　良一（37）

須恵器のロクロ技術を考える……岩田　明広（81）

関東地方の施釉陶器の流通と古代の社会（2）……田中　広明（97）

末野窯成立期の系譜と陶邑窯……坂野　和信（141）
　―系列の比較と土器組成―

収蔵資料の学校における活用……石井　伸明・川島　健（183）
　―埼玉県埋蔵文化財調査事業団の取り組み―　野中　仁

関東地方の施釉陶器の流通と古代の社会（2）

田中広明

要約　中国の青磁や白磁を目指した施釉陶器は、平安時代には、東海地方西部で爆発的に生産され、東日本一帯に流通した。地域的交易圏内で生産から消費の完結した土師器や須恵器と異なり、施釉陶器は、消費の広域性が強く、古代の遠距離交易を考古学資料から解明する絶好の資料といえる。

前稿では、埼玉・栃木・千葉・茨城県の資料集成を行い、各県ごとの消費量の違いから流通の特色を導いた（『研究紀要』11号）。そこで東山道と東海道の交差する武蔵国、とくに埼玉県の資料をさらに検討し、灰釉陶器の消費動向を半世紀ごとに遺跡・郡・国の単位で把握することに努めた。

この流通の実態は、どのような交通に基づき生み出されたのか。ここでは、平安時代前期の交通施策や、武蔵国の所管変更と国内交通の推移、あるいは輸送手段の供給源でもある牧、そして上野国との関係にも注意を払い、古代の開発と灰釉陶器の武蔵国北半への流通について検討をした。

はじめに

草深い東国の竪穴式住居に住む人々は、僅かばかりの食器と煮炊きの道具だけは備えていた。食器と煮沸具は、主に在地内で生産され、地域的交易圏内で交換され、竪穴式住居で消費された。7世紀に登場した施釉陶器も平安時代に入ると、東国の村々へも遍く行き渡る。しかし土師器・須恵器のように施釉陶器は、生産→消費が関東地方の内部で完結することはなく、愛知・静岡・岐阜県などで生産された製品を搬入し、消費したに留まった。

この現象は、この東海三県の生産量が、在地（生産地）の地域的交易圏の消費量を過剰に越え、地域的交易圏外の需要を支えていたこと、生産地と消費地を結ぶ流通経路・機構が、安定していたためとまとめられる。

ところで古代の輸送の中心は、穀物や織物・塩・鉄などであり、これらは古代国家の税品目にも数えられ運京された。また対価製品であるこれらは、商取引後、直接消費される以外に、貯蓄や投資・商取引の材料として準備された。一方、窯業製品は、単品では軽物だが、売買の対象としてまとまると、相当の重量物となる。そのため輸送コストは大変高く、須恵器の大量生産が可能となった8世紀中葉以降も、須恵器の流通が、土師器の流通圏を大きく越えることはなかった（田中1997）。

ところが尾張・三河・遠江・美濃に生産が限定される施釉陶器は、地域的交易圏を越え、遠距離交易によって、関東地方へもたらされたのである。とくに尾張の製品は、国家レベルで品質保持に力が注がれたため、商品価値が高く、その生産は、第一に都城の需要を満たし、第二に各窯跡群の地域的交易圏の需要を満たし、そして第三に駿河・信濃以東の東山・東海・北陸道諸国の需要に応えていた。

施釉陶器の東国への担い手は、平安時代という時代背景や輸送に耐えうる経済的基盤を考えれば、やはり国司・郡司、調庸・交易雑物等の運京にかかる綱丁・綱領（註1）、あるいは初期荘園や勅

旨田などの王臣佃使等であろうか。多くの施釉陶器は、彼らが運京後、再び尾張・三河・遠江・美濃を経由した際、あるいは赴任に当たって市で入手（買得）し、東国へ持ち帰ったと理解したい。さらに国府の市や民間の市で売りさばかれたり、何よりも運搬者自身が、灰釉陶器を欲していたのであろう。ことに9世紀前半に出された交通施策は、運京の便を助け、9世紀後半には、輸送専業集団を生み、東海三県の施釉陶器を関東地方へもたらす契機となった。

本稿では、この東海から関東への交通事情と施釉陶器の流通について、東山道と東海道の錯綜する武蔵国の発掘調査資料から、その実態を解明していくこととする。

そこで古代東国の流通の特質を探るには、本来、まず遺物の主体となる土師器・須恵器の分析から始め、どこの生産地の製品が、どの程度消費されていたか、時期別・遺跡別に分析し、各生産地の抱える消費圏（販売圏・シェア）、基本となる物資の流れ、経済的な地域圏（在地のネットワーク）を導き出すべきであるが、その準備が整っていない今、本末転倒となるが、広域流通品の分析を行うこととする。

1　古代的流通の特質と施釉陶器

経済的な地域圏（地域的交易圏）は、社会的な権力や地理的条件・歴史的経緯、あるいは扱う物品によって様々だったはずである。消費遺跡が等質な経済条件を備えていたならば、生産地（東海三県）から東へ進むに従って消費量（出土数）は、同心円状に減少するはずだが、現実には、交通条件や地域内の階層性、社会的条件など地域内の経済的不均衡によって消費量に増減があった（田中 1994）。

しかし全体的傾向として消費量は、同心円状に四つのゾーンを形成しつつ少なくなる。これは、輸送コストが、距離を置けば置くほどかかること、遠隔地の運搬者も至近の運搬者も同じルート、例えば官道である東海道を通ることで、生産地に至近なほど交換の場（市）で売買の機会が増したため、つまり至近ほど商品の流通量が増加し、価格は低く抑えられ、消費がさらに伸びたためである。ただしそれぞれの地域的交易圏内は、ほぼ等量の消費となる。これは、地域圏内の隣接集落間で、消費量の協調（地域バランス）が図られたためであろう。

その流通経路は、美濃・尾張→信濃→上野・甲斐→下野・武蔵→陸奥へと続く東山道ルートでは、駄馬輸送を主体とし、尾張・三河・遠江→駿河→伊豆・甲斐→相模→武蔵→下総・上総→常陸→陸奥へと続く東海道ルートでは、舟運を駆使した。

各国の施釉陶器の消費量は、このように『延喜式』にみる令制国名の記載順序（註2）に従って減少していく。なかでも武蔵国は、宝亀2（771）年に東山道から東海道へ所管が、変更されたように、東海・東山道ルートの交錯する希有な国である。ここに武蔵国は、施釉陶器の消費実態から、古代東国の流通の特質を捉えられる格好の国といえよう。

ところで流通とは、生産者によって作られた生産物が、消費者に提供されるまでの「生産物の社会的経済的移転」を指す（斎藤忠志他 1989）とされる。つまり生産物の動く過程に社会性のあること、その動きによって付加価値が増すこと、この両者を欠く場合は、単なる物の移動にしか過ぎない（註3）。

また流通にかかる生産者・輸送者・消費者が、生産物の移転を目的として互いに集まり協力している場合、これを流通機構（流通システム）と呼び、「生産物の移転の通路」が流通経路と呼ばれる。この流通経路は、生産物の売買で所有権を移転させる「商取引」と、生産物を輸送し保管する「物的流通（物流）」とからなる。つまり物流と物の流通とは、元来、異なった概念なのである。

流通には、商取引・輸送・保管という三機能があるが、流通機能を直接示す考古学資料はほとんどない。遺跡は、製品の集積地や「市」を除くと、生産地と消費地であり、直接、古代の流通を解明することは難しい。しかし土器の胎土や細かな手法（調整）に組み込まれた生産地の遺伝子が、生産地→消費地間を復元することを可能としてくれる。

ところでこれまで古代日本の「流通史」研究は、地方から最大の消費地である宮都へ貢納物を移動させることを中心に整理されてきた。それは古代国家の財政機構に基づく物資の移動が、分析の主体であったためである（平野 1969）。

平野邦雄氏によれば、全国人口560万人（沢田吾一説）の内、年間10万人にのぼる運脚夫が、宮都へ物資を運んでいたといわれる。この膨大な物資は、調庸・年料交易雑物・年料春米などで、国家の財政を支える重要な財源であった。大蔵省や民部省・内蔵寮などの中央官司へ納入され、諸官司の各事業に基づき分配し、必要物資の購入や官人給与・宮廷の用途等に消費されたのである。

この税を集積させる流通機構は、国内に毛細血管のように張り巡らされた徴税組織によって維持されていた。それぞれの郷から所管の郡へ、各郡から所管の国へ毛根が栄養を吸い上げ、七つの官道という動脈が、流通経路となり、宮都へ集積されたのである。

一方で、現物実送主義による運京が、大変な重圧として人民を覆っていたことも確かだが、10万人にのぼる人々が、都鄙往還をしたことは、物資の流通、情報の伝達を考えると、この制度の果たした役割は、計り知れない。

とくに宮都へ上京した運脚や郡司・綱丁あるいは、初期庄園の庄官などは、物資を京へ集積させた一方、宮都から文物を地方へ発信させる役割を担ったと考えられる。ことに7世紀後半から8世紀にかけて宮都の雑器である暗文土師器の椀・皿・高坏などの食器が、地方の一集落から単独で出土するのは、「調庸の家」の運脚が、宮都で入手した食器を所管の村へ持ち運んだためであろう。

ところで門脇禎二氏は、地方の交易について商品が、「諸共同体の伝統的な統一圏、すなわち郡あるいは2・3のそれにわたる程度の範囲」で売買されたとして、これを「地域的交易圏」とした（門脇 1960）。そして8世紀から9世紀にかけて、余剰生産の量的増加から地域間の不均衡は認めつつ、①「共同体相互間の交易」②「地域的交易圏の形成」③「地域的交易圏相互間に拡大された交易」へ、殷富・富豪之輩が介在することで発展していったとされた。なお門脇氏が規定した地域的交易圏は、国衙や郡が、調庸の手工業製品を交易によって収取したことから導いた概念だが、行政単位の国郡と異なる在地社会の基礎的な交通の範囲としても有効であろう。

つまり地域的交易圏は、考古学資料では、地域を特徴付ける生産→消費が在地内で完結する土師器や須恵器が導く経済的な範囲と置き換えることができるとするならば、本来、土師器や須恵器から地域的交易圏の枠組みをつまびらかにしたうえで、広域流通品（遠距離交易品）である施釉陶器の分析を行うべきだが、ここでは基礎的準備が整っていないため、数郡をまとめた「領域」を地域

的交易圏（註4）として扱う。

次章では、どこの生産地の施釉陶器が、各郡・各領域によってどのように消費されたかを検討したい。なお土師器にみる地域交易圏は、『中堀遺跡』（田中 1997）で分析を行った。併わせて参照していただきたい。

2　武蔵国北部の地域的交易圏と灰釉陶器の流通

関東地方で消費された施釉陶器は、以下の産地の製品が予測される。まず灰釉陶器を生産した主な窯跡群は、現在、愛知県の猿投窯跡群を始め、愛知県尾北地方の小牧市篠岡窯跡群、東三河地方の豊橋市二川窯跡群、岐阜県東濃地方の多治見市周辺の窯跡群・各務原市周辺の美濃須衛窯跡群、静岡県の浜北市宮口窯跡群、東遠江地方の大須賀町清ヶ谷窯跡群・島田市旗指窯跡群などがあげられる。生産規模や操業地は、時期によって大きく推移するが、近年、三河から遠江にかけて調査・研究が進み、これまで以上に高く評価され始めてきた（註5）。

また緑釉陶器は、京都府の篠窯跡群や石作窯跡群、滋賀県の水口窯跡群、愛知県の猿投窯跡群を始め、愛知県尾北地方の小牧市篠岡窯跡群、東三河地方の豊橋市二川窯跡群、岐阜県東濃地方の多治見市周辺の窯跡群などの製品が、関東地方で確認されている。

本章では、①地域的交易圏を背景とした流通と、②消費形態によって異なる流通経路を念頭に、消費地の資料として、埼玉県内の資料収集を行った。まず発掘調査歴のある遺跡（報告資料）について、施釉の種類・器種・底部の調整・施釉方法・産地・型式等を実見によって、特定する悉皆調査を行った。産地の特定は、なかなか困難ではあるが、中堀遺跡の調査報告書（田中 1997）で試みた手法を用い、肉眼観察で行った。

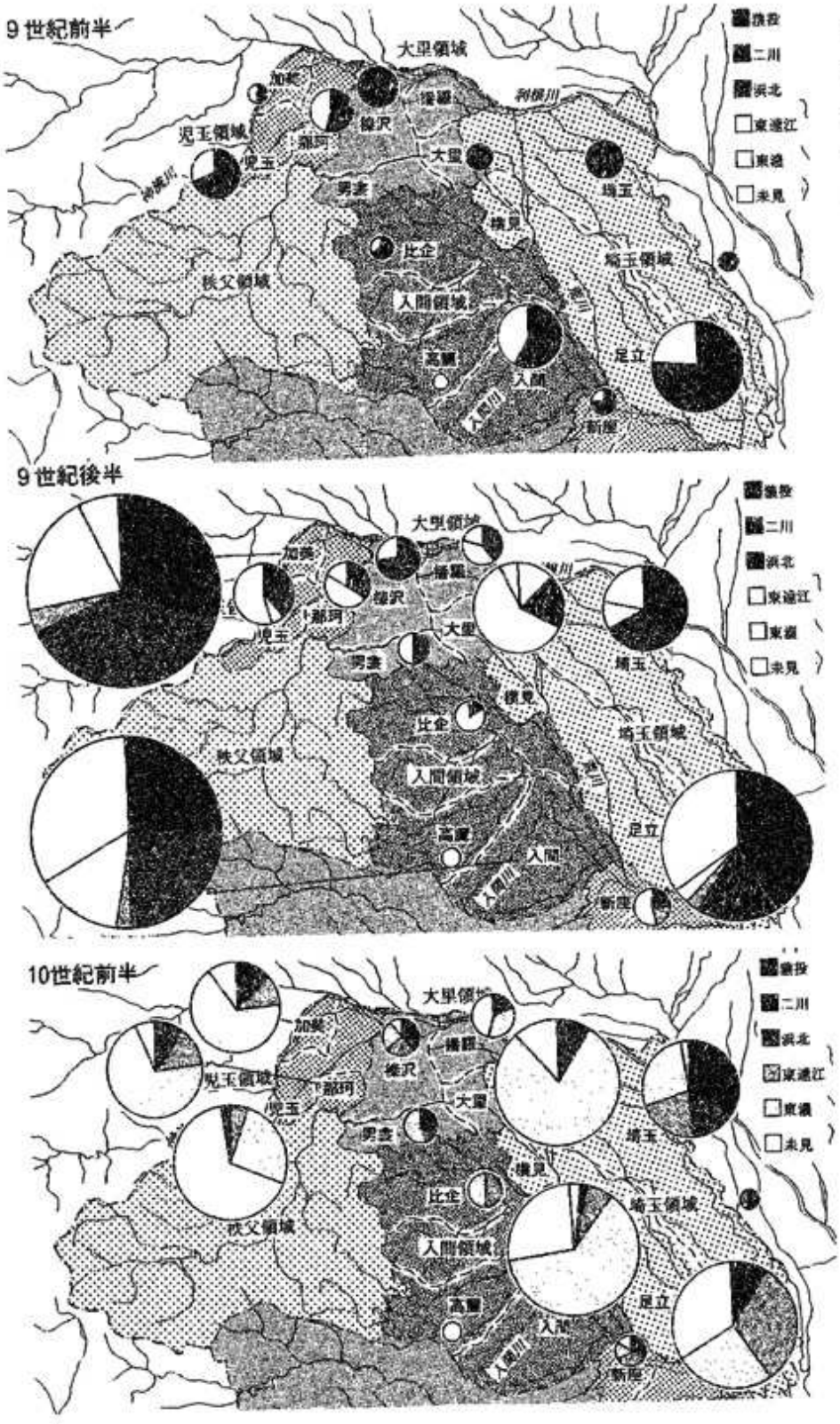
実見の結果は、半世紀ごとに一覧表（表1～12）にまとめた。また各遺跡の施釉陶器全点を第3～7図で器種・個体数・産地を表現し、さらに第1・2図に郡別の産地率・出土総量を表した。以下、窯式ごとにその概要を記すこととする。

(1)　9世紀前半　黒笹14号窯式の灰釉陶器を一括した。

これまで黒笹14号窯式の灰釉陶器は、159点出土している。このうち3分の1の52点が、上里町中堀遺跡の出土である。また29点の足立郡を除くと、各郡10点前後である。出土点数が少なく、一般的傾向の追及は困難である。各郡とも純粋な猿投産製品は、主体とならない。東三河の二川産製品がやや多く、僅かに浜北産製品が加わる（註6）。武蔵国府（東京都府中市）に近い入間郡（19点）や足立郡（29点）は、やや量的に豊富である。これは国府から同心円状に拡散する消費傾向として理解できよう。

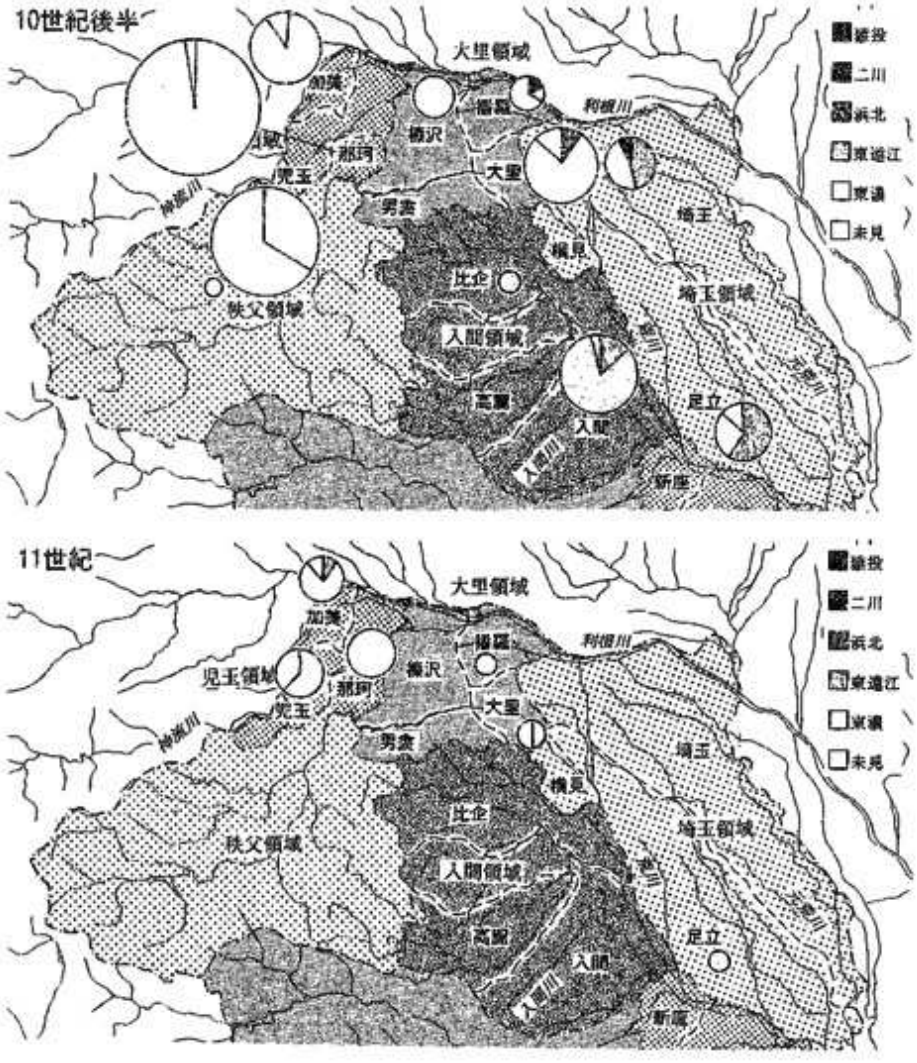
次に複数の灰釉陶器を出土した遺跡の特徴について述べておきたい。

浄瓶や三足盤など仏教系遺物の出土した大宮市氷川神社東遺跡は、武蔵国一宮である氷川神社の社叢に営まれた遺跡で、足立郡家や宗教施設にかかる遺跡である。浄瓶や三足盤の他に耳皿や椀・皿が出土している。浄瓶と皿の2点が猿投産であり、他6点は二川産であろう。とくに浄瓶は、注口が丁寧に面取りされており秀麗な作品である。



第1図　武蔵北半の郡別産地率・出土総量(1)

日高市高岡廃寺や坂戸市勝呂廃寺など、8世紀代に堂宇を整えた寺院跡からは、灰釉陶器の出土は少ない。その一方で、9世紀以降の小規模な仏教的施設からの出土は、豊富である。瓦を出土して窯跡か小堂宇が推定される美里町宮ヶ谷戸遺跡は、猿投産の椀・長頸瓶と二川産の椀が見られる。瓦塔や仏堂施設の見られる同町如来堂A遺跡では、二川産の椀・皿・段皿・三足盤・長頸瓶などがみら



第2図　武蔵北半の郡別産地率・出土総量(2)

れ、セットで使用された可能性がある（田中 1994）。

水辺の祭祀にかかる遺構が見られた熊谷市諏訪の木遺跡では、猿投産の椀と坏が出土している。地方豪族の居宅にかかる遺跡として鳩ヶ谷市前田字六反畑遺跡では、3×5間の大形建物がみられ、京都産の緑釉陶器三足盤を初めとして、二川産の椀（4）・皿（3）や手付き瓶が出土している。児玉町古井戸将監塚遺跡でも、大形の掘立柱建物跡群から構成される9世紀前半の地方豪族にかかる居宅が確認され、京都産の緑釉陶器椀や猿投産の小椀、発見例の大変少ない猿投産の平瓶などが出土した。また美里町北坂遺跡は、烙印「中」や区画溝を伴う掘立柱建物跡群から牧や地方豪族の居宅が推定され遺跡で、猿投産の椀がみられた。隣接する沼下遺跡でも猿投産の椀や手付き瓶が出土している。

官衙にかかる遺跡としては、入間郡家とかかる河越氏館跡、埼玉郡内の徴税機能を備えた倉庫群をかかえる池守池上遺跡などがあげられる。池上遺跡では、二川産の椀、京都産の緑釉陶器椀、猿投産の長頸瓶が出土している。

また製鉄遺跡である花園町台耕地遺跡では、猿投産の浄瓶や猿投・二川産の長頸瓶（6）がみられ、製鉄遺跡と灰釉陶器の関係を如実に示している（浅野 1980）。

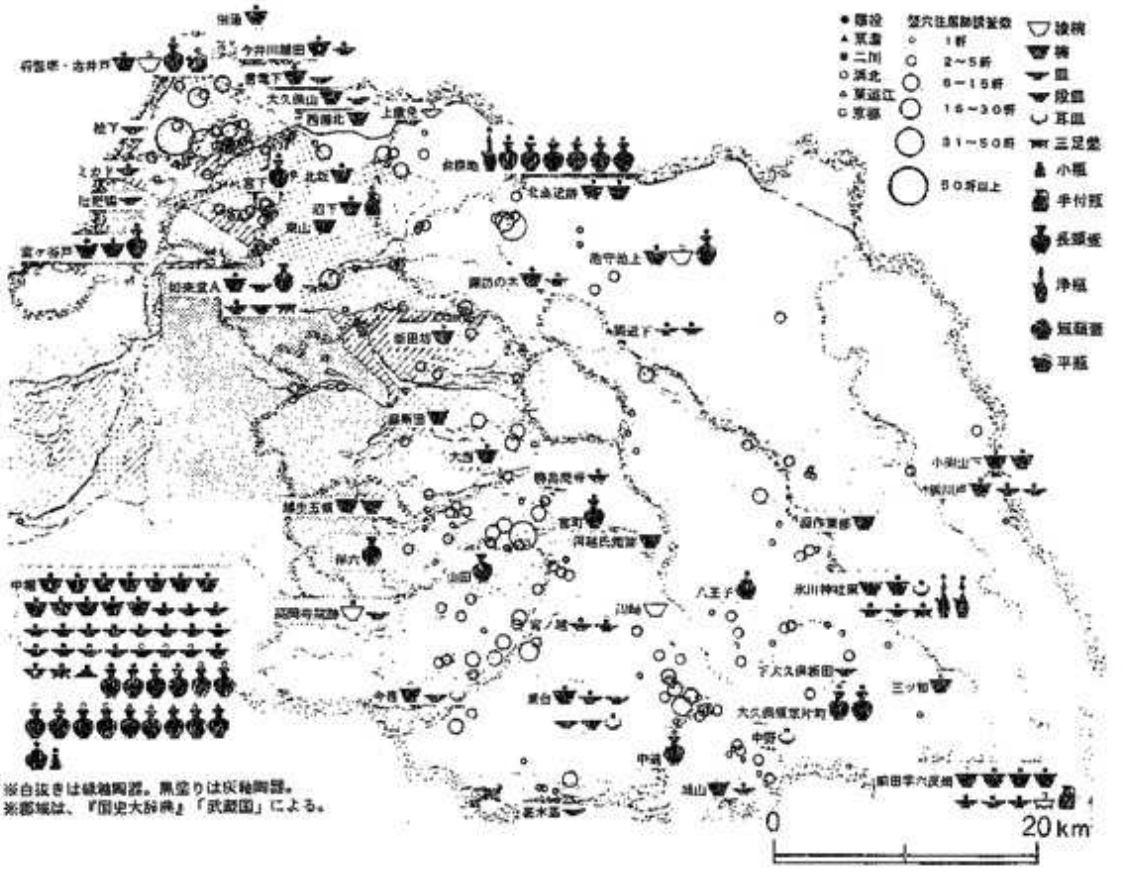
このほか河川交通の拠点的な遺跡として、下総・武蔵国境の古利根川に臨む春日部市小渕山下遺

跡では、猿投産の椀（2）、同市浜川戸遺跡では、二川産の椀・皿（2）がそれぞれ出土した。また入間郡の河川交通（入間川・荒川）の拠点である富士見市東台遺跡では、二川産の椀や皿（5）・耳皿が出土した。

宝亀2年に廃された東山道武蔵路の経路に近い所沢市茶木峯遺跡や坂戸市山田遺跡・宮町遺跡、東松山市大西遺跡・嵐山町新田遺跡などからも灰釉陶器の出土がみられる。廃駅路の後も武蔵路が、主要な交通路として機能していたためであろうか。

このように9世紀前半、生産地では一般消費財として定量の消費の見られた（註7）灰釉陶器ではあるが、武蔵国北部では、未だ希少性は高く、寺社や地方豪族の居宅、官衙、交通の拠点など、地域内で経済的特権を掌握した遺跡に集中する。また消費量もきわめて低く、遺跡から出土した地点もまとまっていて固定的である。さらに三足盤や浄瓶などの仏教系遺物も寺院や宗教的遺跡が消費主体となって、限定的な消費行動をとっていたといえよう。

ところで集落は、8世紀中葉以降、沖積地から台地へ進出したが、9世紀前半の灰釉陶器を出土する遺跡はきわめて少ない。該期の竪穴住居跡100軒を調査し、僅かに1・2点がみられる程度である。入間郡や高麗郡・新羅・比企・児玉・那珂・加美・榛沢郡では、集落の密度（竪穴住居跡の調査数）が、奈良・平安時代を通じてピークとなるのにもかかわらずである。8世紀中葉以降、台地



第3図　施釉陶器の器種・個体数・産地別分布図（9世紀前半）

表1　埼玉県出土の灰釉陶器（黒笹14号窯式段階）(1)

遺跡名	郡	遺構名	図番号	形態	産地	トチン痕
田通し遺跡	加美	R24住居跡	57図17	椀	二川	
惣下遺跡北部地区	加美	240号住居跡	98図29	皿	未見	
ミカド遺跡	児玉	5号溝跡	141図1	皿	二川	トチン
今井川越田遺跡III	児玉	16号溝跡	247図29	皿	猿投	
今井川越田遺跡III	児玉	河川跡	282図161	椀	猿投	
将監塚・古井戸遺跡	児玉	148号住居跡	225図14	椀	二川	
将監塚・古井戸遺跡	児玉	148号住居跡	225図15	長頸瓶	二川	トチン
将監塚・古井戸遺跡	児玉	45号住居跡	226図11	平瓶	猿投	
将監塚・古井戸遺跡	児玉	大溝跡	416図83	平瓶	猿投	
将監塚・古井戸遺跡	児玉	グリッド	420図2	椀	猿投	トチン
大久保山遺跡II	児玉	45号住居跡	116図20	椀	未見	
大久保山遺跡II	児玉	45号住居跡	116図21	皿	未見	
枇杷橋遺跡	児玉	28号住居跡	22図15	皿	未見	
雷電下遺跡	児玉	62号住居跡	113図18	椀	猿投	トチン
雷電下遺跡	児玉	グリッド	132図55	皿	—	
甘粕山(東山)遺跡	那珂	3号住居跡	54図20	椀	未見	
甘粕山(如来堂A)遺跡	那珂	グリッド	91図35	椀	二川	トチンなし
甘粕山(如来堂A)遺跡	那珂	グリッド	91図36	段皿	二川	トチン
甘粕山(如来堂A)遺跡	那珂	グリッド	91図37	皿	未見	
甘粕山(如来堂A)遺跡	那珂	グリッド	91図38	段皿	未見	
甘粕山(如来堂A)遺跡	那珂	グリッド	91図39	三足皿	未見	
甘粕山(如来堂A)遺跡	那珂	グリッド	91図40	長頸瓶	未見	
宮ヶ谷戸遺跡	那珂	2トレンチ[illegible]	未報告	長頸瓶	猿投	
宮ヶ谷戸遺跡	那珂	2トレンチ	未報告	椀	猿投	
宮ヶ谷戸遺跡	那珂	3トレンチ	未報告	椀	二川	
宮下遺跡	那珂	2トレンチ	未報告	長頸瓶	猿投	
沼下遺跡	榛沢	13号住居跡	34図4	椀	猿投	トチン
沼下遺跡	榛沢	1号住居跡	7図40	平瓶	猿投	
諏訪の木遺跡	大里	5区1号溝	未報告	皿	猿投	
諏訪の木遺跡	大里	4区大溝II	未報告	椀	猿投	
西浦北遺跡	榛沢	D－12	未報告	椀	二川	トチン
台耕地遺跡	榛沢	75号住居跡	116図7	長頸瓶	二川	
台耕地遺跡	榛沢	77号住居跡	125図29	長頸瓶	猿投	
台耕地遺跡	榛沢	77号住居跡	125図30	長頸瓶	二川	
台耕地遺跡	榛沢	83号住居跡	138図10	長頸瓶	二川	
台耕地遺跡	榛沢	44号住居跡	64図17	浄瓶	猿投	
台耕地遺跡	榛沢	61号住居跡	89図6	長頸瓶	猿投	
北坂遺跡	榛沢	2号住居跡	129図7	椀	猿投	
北島遺跡第14地点	埼玉	1号溝跡	232図121	椀	猿投	トチンなし
北島遺跡第15地点	埼玉	16号溝跡	340図37	椀	二川	トチン
池守池上遺跡	埼玉	4号溝跡	202図26	長頸瓶	猿投	
池守池上遺跡	埼玉	グリッド	未報告	椀	二川	トチン不明
築道下遺跡II	埼玉	38号溝	555図121	皿	二川	トチン
築道下遺跡II	埼玉	グリッド	602図8	皿	猿投	トチン
柿山遺跡3・4次調査	埼玉	23号住居跡	211図16	長頸瓶	猿投	
柿山遺跡3・4次調査	埼玉	23号住居跡	211図18	長頸瓶	二川	
浜川戸遺跡1次	埼玉	4号住居跡		皿	二川	トチン
浜川戸遺跡2次	埼玉	グリッド	未報告	椀	二川	
浜川戸遺跡7次	埼玉	2遺構		皿	二川	トチン
新田坊遺跡	比企	4号住居跡	117図7	椀	猿投	トチン

遺跡名	郡	遺構名	図番号	形態	産地	トチン痕
大西遺跡	比企	30号住居跡	432図20	椀	二川	トチン
鎌新田遺跡B地点	比企	2号住居跡	22図109	椀	未見	
高岡寺院跡	高麗	グリッド	49図6	皿	未見	
越生五領遺跡2次	入間	1号住居跡	31図103	平瓶	猿投	
越生五領遺跡2次	入間	1号住居跡	31図97	椀	二川	
越生五領遺跡2次	入間	1号住居跡	31図98	椀	二川	トチン
越生五領遺跡3次	入間	グリッド	38図9	椀	猿投	トチン
宮ノ越遺跡	入間	4号住居跡	185図60	皿	二川	トチン
宮ノ越遺跡	入間	7号住居跡	29図19	皿	猿投	トチン
宮町遺跡(II)	入間	21号住居跡	52図1	長頸瓶	二川	
今宿遺跡	入間	31号住居跡	95図85	耳皿	未見	
今宿遺跡	入間	31号住居跡	95図86	小椀	浜北	重ね焼き
今宿遺跡	入間	31号住居跡	95図87	皿	未見	
勝呂廃寺	入間	4号住居跡	24図16	皿	猿投	トチン
勝呂廃寺13次	入間	5号住居跡	未報告	段皿	二川	トチン
甚木峯遺跡	入間	包含層	35図1	皿	未見	
川越館跡遺跡3次	入間	1号住居跡	図版15	椀	猿投	
東台遺跡10地点	入間	1号竪立性建物跡	48図3	皿	未見	墨書「京」
東台遺跡10地点	入間		非掲載	皿	二川	
東台遺跡2地点	入間	1号住居跡	10図14	段皿	未見	
東台遺跡2地点	入間	2号住居跡	14図12	耳皿	二川	
東台遺跡2地点	入間	4号住居跡	20図9	椀	二川	
東台遺跡2地点	入間	溝	33図2	皿	未見	
東台遺跡2地点	入間	31号住居跡	34図16	椀	猿投	
城山遺跡4地点	新羅	51号土壙	15図1	椀	未見	
城山遺跡7地点	新羅	68号住居跡	11図	皿	二川	トチン
中道遺跡12地点	新羅	9号住居跡	15図7	長頸瓶	猿投	
中野遺跡40地点	新羅	57号住居跡	未報告	耳皿	二川	
阿弥陀堂遺跡	足立	4号堀跡	46図5	皿	二川	
下大久保新田(第2次)	足立	12号溝	26図11	皿	未見	
宮ノ脇遺跡	足立	II区14号住居跡	86図56	椀	二川	
宮ノ脇遺跡	足立	II区17号住居跡	88図101	椀	猿投	トチン
宮ノ脇遺跡	足立	II区17号住居跡	88図102・103	椀	猿投	トチン
三ツ和遺跡(八幡木1-2-1)	足立	1号溝	32図5	椀	未見	
上台遺跡群	足立	グリッド	57図6	椀	未見	
梅作東部遺跡群	足立	C1号住居跡	177図1	椀	未見	
前谷遺跡	足立	3号溝	8図2	皿	浜北	
前谷遺跡	足立	3号溝	8図5	椀	二川	トチン
前田字六反畑第1遺跡	足立	SX3	未報告	皿	二川	トチン
前田字六反畑第1遺跡	足立	SX3	未報告	皿	二川	
前田字六反畑第1遺跡	足立	SE3	未報告	椀	二川	
前田字六反畑第1遺跡	足立	SX3	未報告	椀	二川	
前田字六反畑第1遺跡	足立	SX3	未報告	椀	浜北	
大久保新田(第2次)第1地点	足立	4号住居跡	29図5	長頸瓶	猿投	
大久保新田(第2次)第1地点	足立	4号住居跡	29図6	長頸瓶	猿投	
南原遺跡(4次)	足立	溝	非掲載	皿	猿投	
南原遺跡(4次)	足立	ミ3EP18	非掲載	椀	二川	
二軒在家遺跡	足立	グリッド	未報告	皿	二川	トチン
二軒在家遺跡	足立	グリッド	未報告	平瓶	二川	
二軒在家遺跡	足立	2A－244	未報告	段皿	猿投	

表2　埼玉県出土の灰釉陶器（黒笹14号窯式段階）(2)

遺跡名	郡	遺構名	図番号	形態	産地	トチン他
二軒在家遺跡	足立	2A－244	未報告	椀	二川	鳴鹿口
八王子遺跡	足立	蔵骨器	2図	壺頸壺	未見	
氷川神社東遺跡	足立	表採	168図1	椀	猿投	トチン
氷川神社東遺跡	足立	5号住居跡	168図10	浄瓶	二川	
氷川神社東遺跡	足立	D－18号住居跡	168図12	耳皿	猿投	
氷川神社東遺跡	足立	埋納ピット1	168図15	浄瓶	猿投	
氷川神社東遺跡	足立	埋納ピット3	168図18	二足皿	猿投	
氷川神社東遺跡	足立	E－S13	168図6	皿	二川	
氷川神社東遺跡	足立	D－P300	168図7	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	25号住居跡	168図8	皿	猿投	
臥原遺跡	足立	11号火葬墓	31図1	短頸壺	未見	
小瀬山下遺跡	葛飾	10号土壙		椀	猿投	
小瀬山下遺跡	葛飾	2号土壙		椀	猿投	

へ進出した集落は、その後9世紀中葉以降、構造的破綻を来たし、求心的な集落へ吸収されるか、山間部や低地へ分散するなどの新展開を迫られるのである。

(2)　**9世紀後半**　黒笹90号窯式・光ヶ丘1号窯式の施釉陶器を一括した。

黒笹90号窯式期の灰釉陶器は、973点の出土がみられる。黒笹14号窯式期からは、格段の差（6倍）であり、広範な地域へ浸透したといえよう（註8）。しかし出土点数は大変少なく、出土土器の僅か1％に過ぎない。このうち3分の2の617点が、中堀遺跡から出土した。郡別にみると、加美郡80点（中堀遺跡を除く）、入間郡78点、足立郡68点などが多く、他郡は30点以下と不均衡は激しい。猿投産の灰釉陶器が、相対的に減少し、二川産・浜北産の製品が、急速に増加する傾向にある。また加美郡・大里郡・入間郡では、すでに東濃産の製品が20％以上みられる。

また遺跡内の施設や区画によって、消費量の格差も生じていた。しかも各遺跡の消費量は、20点以上みられる遺跡と、数点の遺跡と不均衡である。

足立郡では大宮市氷川神社東遺跡・川口市二軒在家遺跡・鴻巣市新屋敷遺跡、埼玉郡では熊谷市諏訪ノ木遺跡・行田市池上池守遺跡、大里郡では熊谷市北島遺跡、入間郡では狭山市揚櫨木遺跡・富士見市東台遺跡・坂戸市稲荷前遺跡などで20点以上が報告されている（註9）。

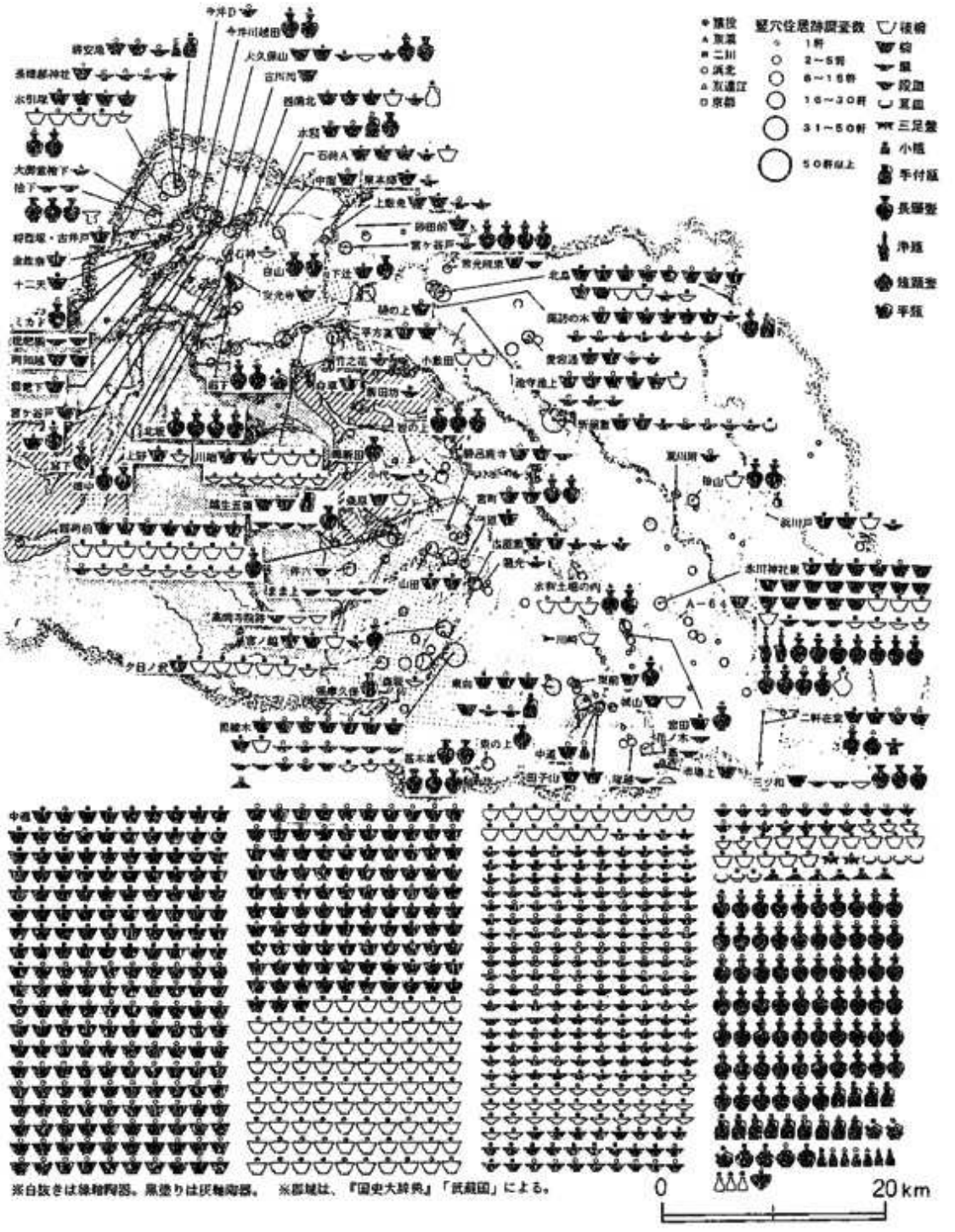
中堀遺跡に隣接する上里町長幡部神社遺跡では、椀・皿（4）がまとまって出土したが、中堀遺跡同様、浜北産の灰釉陶器であった。上里町耕安地遺跡も中堀遺跡に近接する遺跡で、浜北産の椀（2）・皿・小瓶が見られた。ところが中堀遺跡の西に隣接する水引塚遺跡では、二川産の椀・東濃産の椀（3）・長頸壺（2）の灰釉陶器に加え、猿投産の椀（3）・東濃産の椀・段皿などの緑釉陶器が見られる。水引塚遺跡では、東濃産の製品が主体となり、児玉・大里地域の遺跡と共通する傾向である。

神川町大御堂檜下遺跡の皿、児玉町金佐奈遺跡の椀、美里町宮ヶ谷戸遺跡の椀（2）・長頸壺、同町北坂遺跡の長頸壺（4）、同町安光寺遺跡の椀、岡部町西浦北遺跡の椀（3）・段皿、同町石蒔A遺跡の椀（3）・段皿、本庄市大久保山の椀・皿・段皿・長頸壺など児玉地域の遺跡では、東濃産の光ヶ丘2号窯式の灰釉陶器が確認できる。

一方、児玉町ミカド遺跡・同町宮下遺跡・美里町沼下遺跡などの長頸壺や児玉町将監塚・古井戸遺跡・岡部町水窪遺跡（2）・同町中宿遺跡などの椀、本庄市今井D遺跡の段皿などは、浜北産の灰釉陶器である。ほかに宮ヶ谷戸・沼下遺跡で二川産の長頸壺、児玉町十二天遺跡の椀、本庄市今井川越田の長頸壺（2）などの猿投産の製品を少数みられる。この傾向は、利根川を挟んだ群馬県

の西毛地域と近似している（註10）。

埼玉郡北部を含む大里地域では、東濃産の灰釉陶器の消費率は高く、浜北産や二川産の消費も定量みられる。熊谷市北島遺跡や同市諏訪の木遺跡・行田市池守池上遺跡などでは、遺跡ごとに異な



※白抜きは緑釉陶器。黒塗りは灰釉陶器。　※郡域は、『国史大辞典』「武蔵国」による。

第4図　施釉陶器の器種・個体数・産地別分布図（9世紀後半）

る消費傾向が指摘できる。北島遺跡では、二川産の椀（4）、浜北産の椀（3）、東濃産の椀（3）・皿で構成されている（註11）。

だが諏訪の木遺跡では、浜北産の椀・皿（2）、東濃産の椀（5）・皿（6）・手付き瓶・長頸壺で構成され、圧倒的に東濃産が多い。また池上池守遺跡では、浜北産の椀（3）、二川産の椀、東濃産の椀で構成され、浜北産が多い。東濃産の灰釉陶器は、大里地域も多いが、浜北産も遺跡によってはみることができる。

大里地域では、出土量の少ない遺跡でも東濃産と浜北産が、消費の主体であった。例えば深谷市東本郷遺跡では東濃産の椀と二川産の皿、同市上敷免遺跡では浜北産の椀・皿と東濃産の椀・皿、同市砂田前遺跡では東濃産の椀、同市宮ヶ谷戸遺跡では、東濃産の長頸壺（3）と浜北産の皿・猿投産の長頸壺、川本町平方裏遺跡では浜北産の椀（2）、同町白草遺跡では東濃産の椀、同町川端遺跡では東濃産の椀（2）、熊谷市樋の上遺跡では浜北産の椀、行田市愛宕通遺跡では二川産の椀・東濃産の椀・段皿・浜北産の段皿などである。

比企・入間地域では、その傾向が逆転する。すなわち東濃産製品が少なく、二川・浜北産など東海道系製品の消費が目立つ。この地域で東濃産の製品は、坂戸市稲荷前遺跡で椀（4）、同市勝呂廃寺で椀、同市宮町遺跡で長頸壺、川越市古屋敷遺跡で皿、狭山市宮ノ越遺跡で椀（2）、同市揚櫨木遺跡で椀などが、確認できたに過ぎず、坂戸市から川越市の入間地域北部に集中する。

稲荷前遺跡・揚櫨木遺跡・古屋敷遺跡・富士見市東台遺跡などは、比較的豊富に施釉陶器がみられる。それぞれ入間川や支流の越辺川縁辺の拠点的な遺跡である。これらの遺跡で東濃産以外の製品が、以下のようにみられる。稲荷前遺跡では浜北産の椀（3）・皿・長頸壺、揚櫨木遺跡では浜北産の椀（4）・皿（3）・段皿（2）蓋、二川産の椀（4）、古屋敷遺跡では猿投産の椀（2）・皿・段皿、東台遺跡では二川産の椀・皿、浜北産の椀・皿、猿投産の手付き瓶である。

稲荷前遺跡・揚櫨木遺跡・東台遺跡では、浜北産を中心として、二川産がこれに続く傾向にある。しかし古屋敷遺跡では、一括性の高い大小の椀と托となる段皿や皿が、猿投産の製品で構成されており、廃棄→使用⇄保管→購入→販売→輸送→選別→生産の過程が、遡及できる希有な資料である。

出土数の少ない比企・入間地域の遺跡でも、浜北産や二川産は優位である。嵐山町新田坊遺跡では猿投産の皿、坂戸市勝呂廃寺では浜北産の椀、同市宮町遺跡では浜北産の椀（2）・長頸壺、同市原遺跡で二川産の椀、同市山田遺跡で二川産の椀と猿投産の椀、川越市龍光遺跡で二川産の皿、狭山市宮ノ越遺跡で二川産の段皿と浜北産の長頸壺、飯能市夕日ノ沢遺跡で二川産の椀、志木市中道遺跡で浜北産の椀と手付き小瓶などである。

足立・埼玉南部地域では、鴻巣市新屋敷遺跡や大宮市氷川神社東遺跡・鳩ヶ谷市三ツ和遺跡・川口市二軒在家遺跡などにやや豊富な出土をみる。足立郡最北部の新屋敷遺跡は、大里地域に隣接していながら東濃産の製品は、僅か皿一点である。ほかの灰釉陶器は、二川産の椀（2）・皿・耳皿、浜北産の皿（3）がみられる。

氷川神社東遺跡は、二川産の椀（3）・皿・長頸壺（6）・浄瓶、浜北産の椀（2）・長頸壺（2）・東濃産の浄瓶・猿投産の長頸壺（3）がみられた。長頸壺の豊富な消費が目立つ。二軒在家遺跡では、二川産の椀（2）・唾壺、浜北産の椀（2）・長頸壺・短頸壺が確認できた。このよう

3表　埼玉県出土の灰釉陶器（黒笹90号窯式段階）(1)

遺跡名	郡	遺構名	図番号	形態	産地	トチン他	遺跡名	郡	遺構名	図番号	形態	産地	トチン他
耕安地遺跡	加美	1号住居跡	未報告	皿	浜北		中堀遺跡	加美	グリッド	32図75	椀	東濃	
耕安地遺跡	加美	1号住居跡	未報告	段皿	二川		中堀遺跡	加美	グリッド	32図76	椀	浜北	糸切り痕跡
耕安地遺跡	加美	1号住居跡	未報告	小瓶	浜北		中堀遺跡	加美	グリッド	32図77	椀	浜北	
耕安地遺跡	加美	1号住居跡	未報告	椀	浜北		中堀遺跡	加美	グリッド	32図78	椀	浜北	
耕安地遺跡	加美	1号住居跡	未報告	椀	浜北		中堀遺跡	加美	グリッド	32図79	椀	二川	
水引塚遺跡	加美	No.301	未報告	長頸瓶	東濃		中堀遺跡	加美	グリッド	32図80	椀	浜北	
水引塚遺跡	加美	Y19No.521	未報告	長頸瓶	東濃		中堀遺跡	加美	グリッド	32図81	椀	浜北	
水引塚遺跡	加美	Q22区No.1859	未報告	椀	東濃		中堀遺跡	加美	グリッド	32図82	椀	浜北	
水引塚遺跡	加美	U19住居跡	未報告	椀	東濃		中堀遺跡	加美	グリッド	32図83	椀	浜北	
水引塚遺跡	加美	Y21・22住居跡	未報告	椀	東濃		中堀遺跡	加美	グリッド	32図84	椀	二川	
水引塚遺跡	加美	番号なし	未報告	長頸瓶	二川		中堀遺跡	加美	グリッド	32図85	椀	二川	
水引塚遺跡	加美	No.304	未報告	椀	東濃		中堀遺跡	加美	グリッド	32図87	椀	二川	
大御堂檜下遺跡	加美	覆土内	25図9	皿	東濃		中堀遺跡	加美	グリッド	32図88	椀	浜北	
中堀遺跡	加美	1号住居跡	14図75	椀	二川		中堀遺跡	加美	グリッド	32図89	椀	東濃	
中堀遺跡	加美	1号住居跡	14図76	椀	浜北		中堀遺跡	加美	グリッド	33図92	長頸瓶	猿投	
中堀遺跡	加美	1号住居跡	14図77	椀	東濃		中堀遺跡	加美	グリッド	33図96	小瓶	猿投	
中堀遺跡	加美	1号住居跡	14図78	椀	二川		長幡部神社遺跡	加美	No.11	未報告	皿	浜北	
中堀遺跡	加美	1号住居跡	14図79	椀	二川		長幡部神社遺跡	加美	No.9	未報告	皿	浜北	
中堀遺跡	加美	1号住居跡	14図80	長頸瓶	二川		長幡部神社遺跡	加美	住記なし	未報告	皿	浜北	
中堀遺跡	加美	3号住居跡	20図66	皿	浜北		長幡部神社遺跡	加美	No.10	未報告	段皿	浜北	
中堀遺跡	加美	3号住居跡	20図67	椀	浜北		長幡部神社遺跡	加美	No.12	未報告	椀	浜北	
中堀遺跡	加美	3号住居跡	20図68	皿	東濃		檜下遺跡北部地区	加美	255号住居跡	180図13	長頸瓶	未見	
中堀遺跡	加美	3号住居跡	20図69	皿	浜北		檜下遺跡北部地区	加美	215号住居跡	38図8	皿	未見	
中堀遺跡	加美	3号住居跡	20図70	椀	東濃		檜下遺跡北部地区	加美	228号住居跡	70図15	皿	未見	
中堀遺跡	加美	3号住居跡	20図71	椀	二川		檜下遺跡北部地区	加美	31号住居跡	82図29	長頸瓶	未見	
中堀遺跡	加美	3号住居跡	20図72	大椀	猿投		檜下遺跡北部地区	加美	31号住居跡	82図30	皿	未見	
中堀遺跡	加美	5号住居跡	24図49	椀	東濃		檜下遺跡北部地区	加美	31号住居跡	82図32	広口瓶	未見	
中堀遺跡	加美	5号住居跡	24図50	椀	東濃		ミカド遺跡	児玉	5号溝跡	141図2	長頸瓶	浜北	
中堀遺跡	加美	5号住居跡	24図51	椀	二川	雲母[※]	阿知越遺跡A地点	児玉	1号住居跡	2図1	椀	未見	
中堀遺跡	加美	5号住居跡	24図52	椀	二川		阿知越遺跡A地点	児玉	1号住居跡	2図2	椀	未見	
中堀遺跡	加美	5号住居跡	24図53	椀	東濃		金佐奈遺跡B地点	児玉	不明	未報告	椀	東濃	
中堀遺跡	加美	5号住居跡	24図54	椀	二川		古川端遺跡	児玉	30号住居跡	114図7	椀	未見	
中堀遺跡	加美	5号住居跡	24図55	椀	浜北		今井D遺跡	児玉		126図7	段皿	浜北	
中堀遺跡	加美	5号住居跡	24図56	椀	二川		今井川越田遺跡III	児玉	16号溝跡	247図30	長頸瓶	猿投	
中堀遺跡	加美	5号住居跡	24図57	椀	浜北		今井川越田遺跡III	児玉	16号溝跡	247図31	長頸瓶	猿投	
中堀遺跡	加美	5号住居跡	24図58	椀	東濃		十二天遺跡	児玉	グリッド	非掲載	椀	猿投	
中堀遺跡	加美	6号住居跡	26図36	椀	二川		将監塚・古井戸	児玉	176号住居跡	366図3	椀	浜北	
中堀遺跡	加美	6号住居跡	26図37	椀	浜北		大久保山遺跡I	児玉	12号住居跡	83図31	長頸瓶	未見	
中堀遺跡	加美	6号住居跡	26図38	椀	浜北		大久保山遺跡II	児玉	38号住居跡	102図20	長頸瓶	未見	
中堀遺跡	加美	6号住居跡	26図39	椀	猿投		大久保山遺跡II	児玉	41号住居跡	111図73	皿	未見	
中堀遺跡	加美	6号住居跡	26図40	椀	浜北		大久保山遺跡II	児玉	6号土壙	156図D6 2	椀	未見	
中堀遺跡	加美	6号住居跡	26図41	椀	東濃		大久保山遺跡II	児玉	36号住居跡	96図75	皿	未見	
中堀遺跡	加美	7号住居跡	28図17	椀	東濃		秋肥橋遺跡	児玉	10号住居跡	25図16	皿	未見	
中堀遺跡	加美	7号住居跡	28図18	椀	二川		秋肥橋遺跡	児玉	13号住居跡	32図17	段皿	未見	
中堀遺跡	加美	グリッド	32図64	椀	浜北		雷電下遺跡	児玉	52号住居跡	97図4	椀	浜北	
中堀遺跡	加美	グリッド	32図65	輪花皿	浜北		宮ヶ谷戸遺跡	那珂	37号住居跡	63図3	長頸瓶	二川	
中堀遺跡	加美	グリッド	32図66	皿	二川	黒雲母[※]	宮ヶ谷戸遺跡	那珂	38号住居跡	64図1	皿	浜北	
中堀遺跡	加美	グリッド	32図67	皿	二川		宮ヶ谷戸遺跡	那珂	44号住居跡	72図15	長頸瓶	東濃	
中堀遺跡	加美	グリッド	32図68	皿	東濃		宮ヶ谷戸遺跡	那珂	44号住居跡	72図16	長頸瓶	東濃	
中堀遺跡	加美	グリッド	32図69	皿	輪花		宮ヶ谷戸遺跡	那珂	44号住居跡	72図17	長頸瓶	東濃	
中堀遺跡	加美	グリッド	32図70	皿	浜北		宮ヶ谷戸遺跡	那珂	2トレンチ	未報告	段皿	二川	
中堀遺跡	加美	グリッド	32図71	皿	二川		宮ヶ谷戸遺跡	那珂	12号住居跡No.13	未報告	椀	東濃	
中堀遺跡	加美	グリッド	32図72	椀	二川		宮ヶ谷戸遺跡	那珂	2トレンチ	未報告	椀	東濃	
中堀遺跡	加美	グリッド	32図74	椀	浜北		宮下遺跡	那珂	JDグリッド	未報告	長頸瓶	浜北	

4表　埼玉県出土の灰釉陶器（黒笹90号窯式段階）(2)

遺跡名	郡	遺構名	図番号	形態	産地	トチン他	遺跡名	郡	遺構名	図番号	形態	産地	トチン他
上野B遺跡	那珂	18号住居跡	未報告	椀	東濃		諏訪の木遺跡	大里	4図区域	未報告	段皿	東濃	
畑中遺跡	那珂	6号溝	36図1	長頸瓶	未見		諏訪の木遺跡	大里	5区SX1	未報告	長頸	東濃	
畑中遺跡	那珂	11号溝	40図20	長頸瓶	未見		諏訪の木遺跡	大里	4図区域	未報告	椀	東濃	
安光寺遺跡	榛沢	1号住居跡	68図5	椀	東濃		諏訪の木遺跡	大里	[illegible]号[illegible]	未報告	椀	東濃	
沼下遺跡	榛沢	4号住居跡	14図20	長頸瓶	浜北		諏訪の木遺跡	大里	9区大溝	未報告	椀	東濃	
沼下遺跡	榛沢	7号住居跡	22図39	平瓶	猿投		諏訪の木遺跡	大里	Q－18	未報告	椀	東濃	
沼下遺跡	榛沢	17号住居跡	41図10	長頸瓶	二川		諏訪の木遺跡	大里	Q－18	未報告	椀	東濃	
水窪遺跡	榛沢	R1住居跡	未報告	長頸瓶	－		北島遺跡第10地点	埼玉	3号溝	67図37	椀	浜北	
水窪遺跡	榛沢	R1覆土	未報告	平瓶	浜北		北島遺跡第10地点	埼玉	3号溝	67図38	椀	二川	
水窪遺跡	榛沢	R1住居跡	未報告	椀	浜北		北島遺跡第10地点	埼玉	3号溝	67図41	長頸瓶	東濃	
水窪遺跡	榛沢	R7号住居跡	未報告	椀	浜北		北島遺跡第10地点	埼玉	3号溝	67図41	椀	東濃	別個体
西浦北遺跡	榛沢	調査区域東縁	未報告	段皿	東濃		北島遺跡第10地点	埼玉	22号溝	90図37	皿	東濃	
西浦北遺跡	榛沢	3号井戸	未報告	椀	東濃		北島遺跡第1地点	埼玉	6号住居跡	14図5	椀	二川	
西浦北遺跡	榛沢	40覆土	未報告	椀	東濃		北島遺跡第4地点	埼玉	10号土壙	338図1	椀	東濃	
西浦北遺跡	榛沢	D－12	未報告	椀	東濃		北島遺跡第14地点	埼玉	1号溝跡	239図25	椀	東濃	
石蒔A遺跡	榛沢	グリッド	未報告	椀	猿投		北島遺跡第14地点	埼玉	1号溝跡	239図26	椀	浜北	
石蒔A遺跡	榛沢	表採	未報告	段皿	東濃		北島遺跡第14地点	埼玉	1号溝跡	239図28	椀	浜北	
石蒔A遺跡	榛沢	62号住居跡	未報告	椀	東濃		北島遺跡第15地点	埼玉	28号住居跡	297図4	椀	未見	
石蒔A遺跡	榛沢	62号住居跡	未報告	椀	東濃		北島遺跡第15地点	埼玉	16号溝跡	340図36	椀	二川	
石蒔A遺跡	榛沢	67号住居跡	未報告	椀	東濃		愛宕通遺跡	埼玉	10号住居跡	33図16	椀	東濃	
中宿遺跡4次	榛沢	鍛冶炉	未報告	椀	浜北		愛宕通遺跡	埼玉	15号住居跡	45図1	長頸瓶	東濃	陶線
白山遺跡	榛沢	7号住居跡	14図8	長頸瓶	未見		愛宕通遺跡	埼玉	土壙	77図5	椀	二川	
白山遺跡	榛沢	7号住居跡	14図9	長頸瓶	未見		愛宕通遺跡	埼玉	トレンチ	86図10	段皿	浜北	
北坂遺跡	榛沢	13号住居跡	144図18	長頸瓶	東濃		荒川附遺跡8地点	埼玉	23号住居跡	15図1	段皿	浜北	
北坂遺跡	榛沢	13号住居跡	144図19	長頸瓶	東濃		常光院東遺跡	埼玉	3号竪穴	39図11	段皿	未見	
北坂遺跡	榛沢	13号住居跡	144図20	長頸瓶	東濃		常光院東遺跡	埼玉	1号溝	44図3	椀	未見	
北坂遺跡	榛沢	13号住居跡	144図21	長頸瓶	東濃		池守池上遺跡	埼玉	11号住居跡	141図19	長頸瓶	浜北	
下辻遺跡	幡羅	13号住居跡	30図13	椀	東濃		池守池上遺跡	埼玉	11号住居跡	141図21	椀	浜北	
下辻遺跡	幡羅	3T-1号住居跡	巻頭図版	長頸瓶	未見		池守池上遺跡	埼玉	11号住居跡	141図22	皿	浜北	
砂田前遺跡	幡羅	11号住居跡	55図4	椀	東濃		池守池上遺跡	埼玉	11号住居跡	141図23	皿	二川	墨書「山」
上敷免遺跡	幡羅	239号住居跡	771図18	椀	東濃		池守池上遺跡	埼玉	12号住居跡	144図17	皿	浜北	
上敷免遺跡	幡羅	242号住居跡	778図34	椀	浜北		池守池上遺跡	埼玉	12号住居跡	144図18	椀	浜北	
上敷免遺跡	幡羅	265号住居跡	814図4	皿	東濃		池守池上遺跡	埼玉	12号住居跡	144図19	椀	浜北	
上敷免遺跡	幡羅	3号住居跡	未報告	皿	浜北		池守池上遺跡	埼玉	グリッド	208図15	椀	二川	
上敷免北遺跡	幡羅	A区	36図9	椀	未見		池守池上遺跡	埼玉	グリッド	208図16	皿	二川	
東本郷遺跡	幡羅	3号住居跡	23図1	皿	浜北		池守池上遺跡	埼玉	グリッド	未報告	椀	東濃	
樋の上遺跡	幡羅	3号溝	9図SD3-1	椀	浜北		鶴山遺跡3・4次調査	埼玉	45号住居跡	226図21	長頸瓶	猿投	
川端遺跡	男衾	20住	未報告	椀	東濃		鶴山遺跡3・4次調査	埼玉	45号住居跡	226図22	長頸瓶	猿投	
川端遺跡3次	男衾	14号住居跡	10図14	椀	東濃	墨書「大」	鶴山遺跡3・4次調査	埼玉	グリッド	非掲載	椀	猿投	
竹之花遺跡	男衾	グリッド	113図3	段皿	二川		浜川戸遺跡1次	埼玉	2号住居跡	未報告	皿	二川	
白草遺跡	男衾	27号住居跡	143図1	椀	東濃		浜川戸遺跡1次	埼玉	南3層	未報告	椀	二川	
平方裏遺跡	男衾	26号住居跡	未報告	椀	浜北		浜川戸遺跡2次	埼玉	グリッド	未報告	長頸瓶	浜北	
平方裏遺跡	男衾	表土層	未報告	椀	浜北		浜川戸遺跡2次	埼玉	3号井戸跡	未報告	椀	不明	
諏訪の木遺跡	大里	4区3号溝	未報告	皿	二川		浜川戸遺跡2次	埼玉	グリッド	未報告	椀	不明	
諏訪の木遺跡	大里	4図区域	未報告	皿	浜北		浜川戸遺跡4次	埼玉	B1住居跡	未報告	椀	不明	
諏訪の木遺跡	大里	9区大溝	未報告	皿	浜北		浜川戸遺跡4次	埼玉	グリッド	未報告	椀	不明	
諏訪の木遺跡	大里	4号住居跡	未報告	椀	京都		浜川戸遺跡4次	埼玉	B1住居跡	未報告	椀	二川	
諏訪の木遺跡	大里	M－23	未報告	椀	浜北		岩の上遺跡	比企	7号住居跡	87図3	長頸瓶	未見	
諏訪の木遺跡	大里	4区3号溝	未報告	皿	東濃		岩の上遺跡	比企	7号住居跡	87図4	長頸瓶	未見	
諏訪の木遺跡	大里	4号住居跡	未報告	皿	東濃		岩の上遺跡	比企	8号住居跡	92図3	長頸瓶	未見	
諏訪の木遺跡	大里	4図区域	未報告	皿	東濃		小代遺跡	比企	2号溝	P198-35	皿	未見	
諏訪の木遺跡	大里	4図区域	未報告	皿	東濃		新田坊遺跡	比企	2号住居跡	113図1	椀	猿投	
諏訪の木遺跡	大里	9区大溝	未報告	皿	東濃		南新田遺跡B地点	比企	2号住居跡	22図110	長頸瓶	未見	
諏訪の木遺跡	大里	記載なし	未報告	皿	東濃	墨書「二」	高岡寺院跡	高麗	グリッド	49図7	段皿	未見	

5表　埼玉県出土の灰釉陶器（黒笹90号窯式段階）(3)

遺跡名	郡	遺構名	図番号	形態	産地	トチン他
張摩久保遺跡20次	高麗	2号住居跡	18図5	鉢類	未見	
まま上遺跡	入間	2号住居跡	34図14	皿	未見	
まま上遺跡	入間	2号住居跡	34図15	皿	未見	
まま上遺跡1次	入間			皿	未見	
まま上遺跡1次	入間			皿	未見	
稲荷前遺跡A区	入間	47号住居跡	101図16	椀	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	66号住居跡	135図22	椀	浜北	
稲荷前遺跡A区	入間	66号住居跡	135図23	椀	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	1号住居跡	16図25	椀	浜北	
稲荷前遺跡A区	入間	2号井戸	176図5	皿	浜北	
稲荷前遺跡A区	入間	35号井戸跡	361図3	椀	東濃	
稲荷前遺跡B区	入間	B区45号住居跡	121図16	椀	東濃	
稲荷前遺跡B区	入間	B区34号住居跡	140図11	椀	浜北	
稲荷前遺跡C区	入間	C区11号竪穴遺構	334図12	鉢類	猿投	
越生五領遺跡2次	入間	1号住居跡	31図100	皿	未見	
越生五領遺跡2次	入間	1号住居跡	31図101	皿	未見	
越生五領遺跡2次	入間	1号住居跡	31図102	長頸瓶	二川	
越生五領遺跡2次	入間	1号住居跡	31図96	椀	未見	
越生五領遺跡2次	入間	1号住居跡	31図99	皿	未見	
宮ノ越遺跡	入間	55号住居跡	164図22	椀	東濃	
宮ノ越遺跡	入間	55号住居跡	164図23	長頸瓶	浜北	
宮ノ越遺跡	入間	55号住居跡	183図9	段皿	二川	
宮ノ越遺跡	入間	9号住居跡	34図13	椀	東濃	
宮町遺跡（I）	入間	19号住居跡	50図6	椀	浜北	
宮町遺跡（I）	入間	20号住居跡	52図5	椀	浜北	
宮町遺跡（I）	入間	20号住居跡	52図6	椀	浜北	
宮町遺跡（I）	入間	20号住居跡	52図7	長頸瓶	二川	
宮町遺跡（I）	入間	21号土壙	81図13	長頸瓶	東濃	
桑原遺跡	入間	7号住居跡	37図8	椀	東濃	
原遺跡	入間	1号住居跡	80図7	椀	二川	
古屋敷遺跡	入間	未確認	未報告	皿	猿投	
古屋敷遺跡	入間	未確認	未報告	段皿	猿投	
古屋敷遺跡	入間	未確認	未報告	椀	猿投	
古屋敷遺跡	入間	未確認	未報告	椀	猿投	
古屋敷遺跡	入間	C2グリッド	未報告	皿	東濃	
向山遺跡第3地点	入間	15号住居跡	未報告	椀	浜北	
向山遺跡第3地点	入間	12号住居跡	未報告	椀	浜北	
向山遺跡第3地点	入間	8号住居跡	未報告	皿	東濃	
向山遺跡第3地点	入間	1B号住居跡	未報告	皿	猿投	
山田遺跡	入間	26号住居跡	61図1	椀	二川	
山田遺跡	入間	26号住居跡	61図2	椀	猿投	
勝呂廃寺	入間	C区	30図2	皿	未見	
勝呂廃寺13次	入間	5号住居跡	未報告	椀	浜北	
勝呂廃寺13次	入間	5号住居跡	未報告	椀	東濃	
笹木平遺跡	入間	包含層	35図3	長頸瓶	未見	
東の上遺跡	入間	7号住居跡	49図13	長頸瓶	未見	
東前遺跡2地点	入間	住居跡	34図11	椀	未見	
東前遺跡2地点	入間	住居跡	34図12	長頸瓶	猿投	
東台遺跡10地点	入間	2号住居跡	41図3	椀	未見	
東台遺跡10地点	入間		非掲載	椀	二川	
東台遺跡13地点	入間	25号住居跡	56図19	平瓶	猿投	
東台遺跡13地点	入間	25号住居跡	56図20	椀	東濃	
東台遺跡13地点	入間	25号住居跡	56図21	皿	浜北	
東台遺跡13地点	入間	25号住居跡	56図22	椀	浜北	

遺跡名	郡	遺構名	図番号	形態	産地	トチン他
東台遺跡2地点	入間	1号住居跡	10図13	皿	二川	トチン
伴六遺跡	入間	1号住居跡	12図15	段皿	未見	
揚幡木遺跡	入間	27号住居跡	112図5	段皿	浜北	
揚幡木遺跡	入間	28号住居跡	113図7	段皿	浜北	
揚幡木遺跡	入間	28号住居跡	113図8	椀	東濃	
揚幡木遺跡	入間	51号住居跡	128図14	蓋	浜北	
揚幡木遺跡	入間	52号住居跡	129図12	皿	浜北	
揚幡木遺跡	入間	55号住居跡	132図20	椀	浜北	
揚幡木遺跡	入間	57号住居跡	137図43	椀	浜北	
揚幡木遺跡	入間	57号住居跡	137図44	椀	浜北	
揚幡木遺跡	入間	57号住居跡	137図45	椀	浜北	
揚幡木遺跡	入間	59号住居跡	143図32	椀	二川	
揚幡木遺跡	入間	59号住居跡	143図33	皿	二川	
揚幡木遺跡	入間	59号住居跡	143図34	皿	浜北	
揚幡木遺跡	入間	74号住居跡	154図56	皿	未見	
揚幡木遺跡	入間	土壙	166図1	皿	未見	
揚幡木遺跡	入間	グリッド	172図44	皿	未見	
揚幡木遺跡	入間	グリッド	172図45	皿	未見	
揚幡木遺跡	入間	7号住居跡	95図25	皿	未見	
揚幡木遺跡	入間	52号住居跡	非掲載	椀	二川	
揚幡木遺跡	入間	54号住居跡	非掲載	椀	二川	
龍光遺跡4地点	入間	2号住居跡	15図47	皿	二川	
龍光遺跡40地点	入間	1号住居跡	40図5	長頸瓶	東濃	
花ノ木遺跡2次	新羽	2号住居跡	13図10	皿	未見	
城山遺跡4地点	新羽	51号土壙	15図2	椀	未見	
中道遺跡41地点	新羽	23号住居跡	未報告	小瓶	浜北	
中道遺跡41地点	新羽	23号住居跡	未報告	椀	浜北	
塚越遺跡	新羽	1号掘立柱建物跡	V-14図11	皿	東濃	
田子山遺跡31地点	新羽	49号住居跡	未報告	椀	東濃	
田子山遺跡31地点	新羽	49号住居跡	未報告	椀	東濃	
篠遺跡	新羽	調査区	23図12	椀	未見	
篠遺跡	新羽	調査区	23図13	皿	東濃	墨書「守」
A－64号遺跡	足立	3号住居跡	17図10	椀	未見	
阿弥陀堂遺跡	足立	4号堀跡	46図4	椀	浜北	
阿弥陀堂遺跡	足立	5号堀跡	47図2	長頸瓶	浜北	
宮岡遺跡2次	足立	3号住居跡	37図6	椀	浜北	
宮岡遺跡4次	足立	表採	未報告	長頸瓶	二川	
宮田遺跡	足立	グリッド	173集	長頸瓶	二川	
宮田遺跡	足立	グリッド	173集	椀	二川	
根切遺跡	足立	表採	243図4	鉢形	未見	
三ツ和遺跡	足立	井戸跡	21図10	長頸瓶	未見	
三ツ和遺跡八幡木12B	足立	第2号溝	29図7	長頸瓶	未見	
三ツ和遺跡八幡木1-2-B	足立	3号溝	34図10	長頸瓶	未見	
三ツ和遺跡八幡木12B	足立	3号溝	34図9	椀	未見	
三ツ和遺跡八幡木1-2-B	足立	包含層	52図5	皿	未見	
三ツ和遺跡八幡木12B	足立	包含層	52図6	皿	未見	
新屋敷遺跡D区	足立	64号住居跡	234図16	皿	東濃	
新屋敷遺跡D区	足立	80号住居跡	282図3	耳皿	二川	
新屋敷遺跡D区	足立	92号住居跡	320図6	皿	浜北	
新屋敷遺跡D区	足立	113号住居跡	364図4	椀	二川	
新屋敷遺跡D区	足立	120号住居跡	377図1	椀	二川	
新屋敷遺跡D区	足立	グリッド	484図54	皿	浜北	
新屋敷遺跡D区	足立	グリッド	484図55	皿	浜北	
新屋敷遺跡D区	足立	グリッド	484図56	皿	二川	

6表　埼玉県出土の灰釉陶器（黒笹90号窯式段階）(4)

遺跡名	郡	遺構名	図番号	形態	産地	トチン痕
水判土堀の内遺跡	足立	南調査区包含層	151図171	小形長頸壺	猿投	「へら記号「×」」
水判土堀の内遺跡	足立	南調査区包含層	151図172	小形長頸壺	猿投	「へら記号「F」」
前谷遺跡	足立	3号溝	8図1	長頸壺	浜北	
前谷遺跡	足立	3号溝	8図3	段皿	二川	
前谷遺跡	足立	3号溝	8図4	皿	二川	
前谷遺跡	足立	3号溝	8図6	椀	東濃	
前谷遺跡	足立	表採	非掲載	平瓶	猿投	
前谷遺跡	足立	溝覆土	非掲載	椀	二川	
南原遺跡4次	足立	2T3T南	非掲載	平瓶	東濃	
二軒在家遺跡	足立	グリッド	未報告	蓋椀	二川	
二軒在家遺跡	足立	N94・115	未報告	短頸壺	浜北	
二軒在家遺跡	足立	135－1	未報告	長頸壺	浜北	
二軒在家遺跡	足立	2A・769	未報告	椀	二川	
二軒在家遺跡	足立	グリッド	未報告	椀	二川	「へら記号－」
二軒在家遺跡	足立	グリッド	未報告	椀	浜北	
二軒在家遺跡	足立	掘立柱建物跡（N38・13）	未報告	椀	浜北	
氷川神社東遺跡	足立	E－P970	168図11	平瓶	二川	
氷川神社東遺跡	足立	表採	168図13	長頸壺	猿投	
氷川神社東遺跡	足立	15号住居跡	168図16	長頸壺	二川	
氷川神社東遺跡	足立	A－S15	168図17	長頸壺	浜北	
氷川神社東遺跡	足立	F－U6	168図3	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	E－P997	168図4	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	E－P999	168図5	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	15号住居跡	168図9	浄瓶	東濃	
氷川神社東遺跡	足立	14号住居跡	169図19	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	24号住居跡	169図20	皿	未見	
氷川神社東遺跡	足立	F－R6	169図21	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	3号住居跡	169図22	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	24号住居跡	169図23	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	19・20号住居跡	169図24	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	43号住居跡	169図26	椀	二川	
氷川神社東遺跡	足立	3号住居跡	169図28	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	F－T6	169図29	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	A－S14	169図30	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	D－P595	169図31	皿	未見	
氷川神社東遺跡	足立	24号住居跡	169図32	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	D－P208	169図33	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	17～21号住居跡	169図34	椀	二川	
氷川神社東遺跡	足立	A－T15	169図35	皿	二川	
氷川神社東遺跡	足立	14・15号住居跡	169図36	椀	浜北	
氷川神社東遺跡	足立	6号住居跡	170図43	長頸壺	猿投	
氷川神社東遺跡	足立	6号住居跡	170図44	長頸壺	二川	
氷川神社東遺跡	足立	F－T7	170図47	長頸壺	二川	
氷川神社東遺跡	足立	4号住居跡	170図49	長頸壺	二川	
氷川神社東遺跡	足立	25号住居跡	170図53	長頸壺	猿投	
氷川神社東遺跡	足立	E－P19	170図59	長頸壺	二川	
氷川神社東遺跡	足立	19・20号住居跡	170図67	椀	二川	
氷川神社東遺跡	足立	D－P239	170図76	椀	浜北	
氷川神社東遺跡	足立	D－P244	171図77	椀	未見	

に足立・埼玉南部地域では、比企・入間地域よりも東濃産製品は少なく、補完的に二川産か浜北産の製品がみられた。足立・埼玉南部地域の他の少数出土事例についても、二川・浜北産の製品が主体となる。

荒川沿いの浦和市宮田遺跡では二川産の椀・長頸壺、大宮市水判土堀の内遺跡では猿投産の長頸壺が見られ、元荒川沿いの蓮田市荒川附遺跡では浜北産の段皿、同市椿山遺跡では猿投産の長頸壺、古利根川沿いの春日部市浜川戸遺跡では二川産の椀（2）・皿などがみられる。入間川東部の荒川沿いの遺跡は、足立郡南部の状況と共通していたといえる。

以上から、①灰釉陶器を20点以上消費する遺跡では、遺跡ごとに入手経路が異なる可能性があること、②秩父地域や埼玉郡北部地域を除き、9世紀後半の竪穴住居跡を6～15軒調査した遺跡では、1～4点程度の出土がみられ、量的な格差はみられないこと、③東濃産の製品は、a児玉・大里地域と埼玉郡北西部、b比企・入間地域北部、c入間地域南部・足立・埼玉郡南部地域へと段階的に減少すること、④二川産・浜北産製品は、猿投産と交替し、県下全域に広がることなどが明らかとなった。

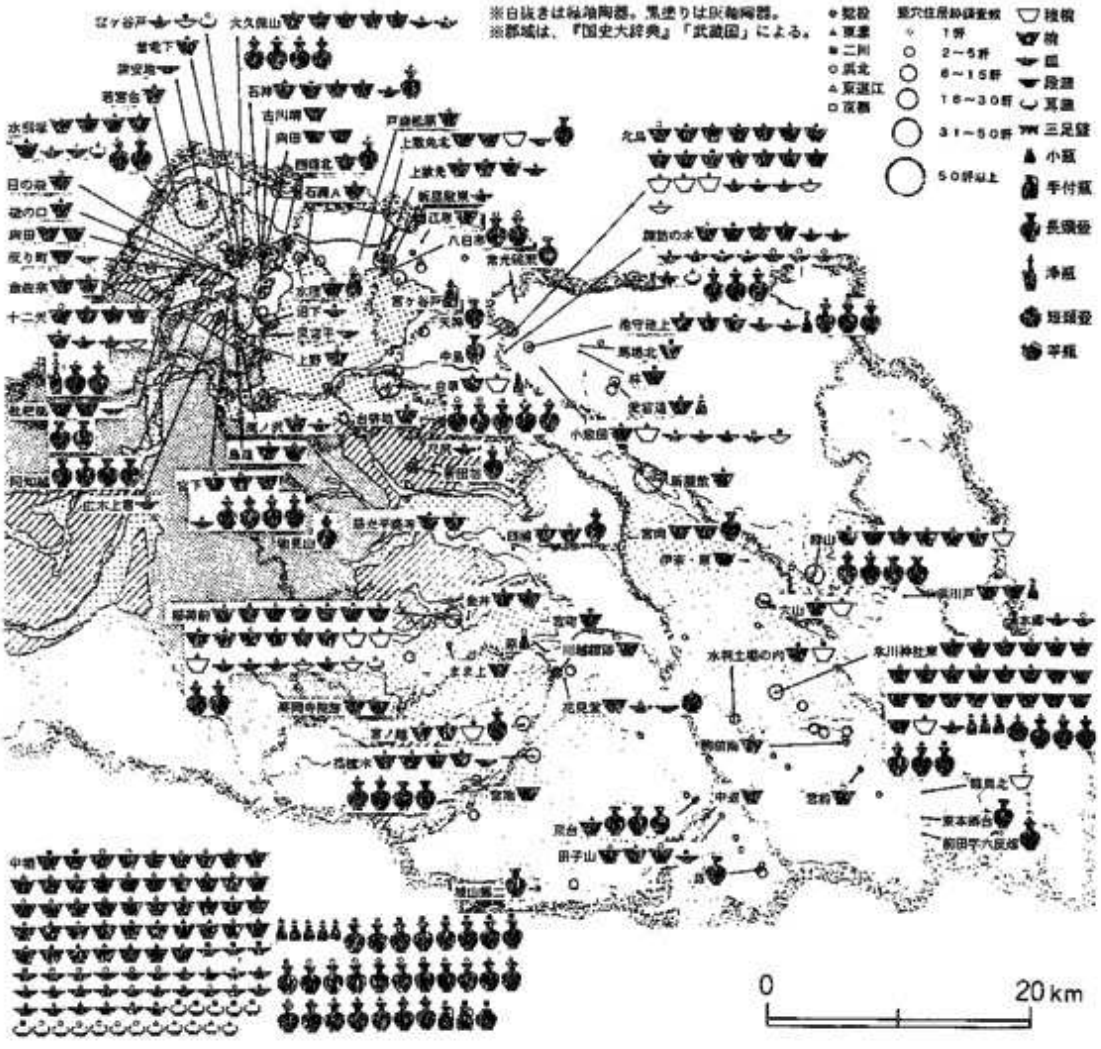
(3)　**10世紀前半**　折戸53号窯式・大原2号窯式の施釉陶器を一括した。

折戸53号窯式期の灰釉陶器は、440点の出土がみられる。このうち3割弱の126点は、上里町の中堀遺跡からの出土である。9世紀後半の973点から440点への推移は、一見、消費量の急速な冷え込みを示すようだが、中堀遺跡を除くと、356点から314点であり、大きな変動とはいえない。むしろ

概期の竪穴住居跡数が、各遺跡で9世紀後半をピークに低下しており、須恵器を主体とした窯業製品全体に占める施釉陶器の割合は、1割弱に上昇したといえよう。つまり10世紀前半は、施釉陶器の実質的な消費拡大期であった。

しかも郡別不均衡は、比較的穏やかとなり、出土事例の少ない椋沢・幡羅・男衾・比企・横見・高麗・新羅郡は、10点以下と低迷するが、他は平均して30～50点の出土が見られた。産地別には、圧倒的な東濃産製品の商圏拡大と、浜北・二川産製品の著しい後退、そして東遠江産製品の上昇である（註12）。郡別には、加美・那珂・児玉・大里・入間郡などでは、3分の2以上が東濃産で占められ、埼玉・足立郡でも4分の1ほどが、東濃産の製品で占められていた。一方、東遠江産の製品は、足立郡で3割、埼玉郡で2割が確認できた。

中堀遺跡の凋落ぶりは激しく、9世紀後半の2割に落ち込んでしまうが、それでも埼玉県下一の



第5図　施釉陶器の器種・個体数・産地別分布図（10世紀前半）

消費を誇る。この背景には、9世紀末に起こった大規模な火災、そして復興という経緯がある。耕安地遺跡（皿1点）や長幡部神社遺跡（灰釉陶器なし）などは、中堀遺跡の成長とともに成長し、その凋落とともに低迷していった。これとは別に9世紀後半から積極的に東濃産の灰釉陶器を消費した水引塚遺跡では、中堀遺跡の至近だが、消費量は延びた。水引塚遺跡では、椀（5）・皿（2）・耳皿・長頸壺（2）の全てが、東濃産で占められていた。

この傾向は、児玉地域の各遺跡で共通し、大久保山遺跡では椀（5）・皿（2）・長頸壺（4）が、東濃産でやはり伸びがみられる。児玉町十二天遺跡・同町枇杷橋遺跡・美里町宮下遺跡・同町石神遺跡でも、急速な伸びが確認できる。十二天遺跡では浜北産の椀、東遠江産の椀・皿、東濃産の椀（3）・皿・浄瓶・長頸壺（2）、宮下遺跡では東遠江産の椀、東濃産の椀・皿、長頸壺（4）、石神遺跡では東遠江産の長頸壺、東濃産の椀（4）・皿など、東濃産を主体とし浜北産や東遠江産が、僅かながらみられる。

消費量の少ない美里町宮ヶ谷戸遺跡・同町日の森遺跡・同町樋の口遺跡・同町上野遺跡・同町滝の沢遺跡・同町沼下遺跡・同町広木上宿遺跡・同町烏森遺跡・児玉町雷電下遺跡・同町金佐奈遺跡・岡部町西浦北遺跡・同町石蒔A遺跡・同町水窪遺跡・上里町若宮台遺跡などでも東濃産の製品を主体として、東海道系の製品が客体的に見られる。東海道系の製品は、浜北産の製品が、口の森遺跡で椀、広木上宿遺跡で椀、水窪遺跡で椀・小瓶、宮ヶ谷戸遺跡で耳皿がみられ、東遠江産の製品が、烏森遺跡で椀、上野遺跡で椀、石蒔A遺跡で椀が確認できた。施釉陶器の浸透度は、確実に上昇したといえよう。

大里・埼玉郡北部地域でも主体は、東濃産の製品である。北島遺跡・諏訪の木遺跡・小敷田遺跡・上敷免遺跡・白草遺跡では、9世紀後半よりさらに消費量を拡大している。産地別構成は、北島遺跡では浜北産の椀、東濃産の椀（13）・皿（3）、諏訪の木遺跡では浜北産の皿（3）、東濃産の椀（4）、東濃産の皿（6）・段皿・耳皿・長頸壺（3）、小敷田遺跡では東遠江産の皿、東濃産の椀・皿（3）、白草遺跡では東濃産の椀・小瓶・長頸壺（2）、浜北産の長頸壺（2）、二川産の長頸壺、上敷免遺跡では、東濃産の椀（3）・皿である。

池守池上遺跡は、二川産の椀（2）・皿・長頸壺、猿投産の小瓶、東濃産の椀・皿、浜北産の長頸壺など東海道系の製品を豊富に消費し、足立・埼玉郡南部と共通した傾向である。

馬場北遺跡の椀や、林遺跡の椀が二川産であることや、台耕地遺跡の椀が二川産であること、八日市遺跡の長頸壺（2）が浜北産であることなど、消費量の少ない遺跡では、東海道系製品が目立つことは、多量消費遺跡との間には、獲得方法に差があったからかもしれない。

比企・入間地域も東濃産製品が目立つ。10世紀に入ると、比企・入間地域では、竪穴住居跡の構築数は激減し、集落としてのまとまりが、つかみにくくなる。施釉陶器も減少するが、やはり施釉陶器の窯業製品全体に占める割合は、やや上昇する。

稲荷前遺跡では、消費量は増加し、東遠江産の椀・皿、東濃産の椀（12）・皿（2）・段皿・長頸壺（2）、揚櫨木遺跡では、逆に減少し東濃産の椀（4）・長頸壺（2）などの東濃産製品が主体となる。

一方、東松山市西浦遺跡では東遠江産の椀（2）・長頸壺が、小川町慈光平遺跡では、東遠江産

7表　埼玉県出土の灰釉陶器（折戸53号窯式段階）(1)

遺跡名	郡	遺構名	図番号	形態	産地	トチン他
朝安地遺跡	加美	第3遺構	37図15	皿	未見	
若宮台遺跡	加美	グリッド	150図54	椀	東濃	
水引塚遺跡	加美	S14住居跡No.953	未報告	皿	東濃	
水引塚遺跡	加美	V20区No.2298	未報告	耳皿	東濃	
水引塚遺跡	加美	T24区No.2128	未報告	段皿	東濃	
水引塚遺跡	加美	O21区	未報告	長頸瓶	東濃	
水引塚遺跡	加美	W16住居跡	未報告	長頸瓶	東濃	
水引塚遺跡	加美	Q18住居跡No.1182	未報告	椀	東濃	
水引塚遺跡	加美	R14区No.2505	未報告	椀	東濃	
水引塚遺跡	加美	S10住居跡No.1502	未報告	椀	東濃	
水引塚遺跡	加美	T21住居跡No.1617	未報告	椀	東濃	
水引塚遺跡	加美	T22住居跡No.1652	未報告	椀	東濃	
水引塚遺跡	加美	T24住居跡No.2120	未報告	椀	東濃	
水引塚遺跡	加美	U10住居跡No.2412	未報告	椀	東濃	
水引塚遺跡	加美	X16住居跡No.388	未報告	椀	東濃	
水引塚遺跡	加美	X23区	未報告	椀	東濃	
中堀遺跡	加美	1号住居跡	14図74	椀	二川	墨書「反」（墨みあり）
中堀遺跡	加美	3号住居跡	20図73	小瓶	東濃	
中堀遺跡	加美	グリッド	32図63	椀	東濃	
中堀遺跡	加美	グリッド	32図73	椀	東濃	
中堀遺跡	加美	グリッド	32図86	椀	浜北	
中堀遺跡	加美	グリッド	33図90	耳皿	東濃	
中堀遺跡	加美	グリッド	33図91	椀	東濃	
中堀遺跡	加美	グリッド	33図93	耳皿	二川	
中堀遺跡	加美	グリッド	33図94	長頸瓶	東濃	
中堀遺跡	加美	グリッド	33図95	長頸瓶	東濃	
反り町遺跡	加美	22号土壙	72図3	椀	未見	墨書「丹」
反り町遺跡	加美	23号土壙	72図4	皿	未見	
阿知越遺跡A地点	児玉	2号住居跡	3図1	長頸瓶	未見	
阿知越遺跡A地点	児玉	2号住居跡	4図2	長頸瓶	未見	
阿知越遺跡A地点	児玉	6号住居跡	5図1	長頸瓶	未見	
阿知越遺跡A地点	児玉	6号住居跡	5図2	長頸瓶	未見	
金佐奈遺跡B地点	児玉	66号住居跡	未報告	椀	東濃	
金佐奈遺跡B地点	児玉	1. 10	未報告	椀	東濃	
古川端遺跡	児玉	9号住居跡	83図4	椀	未見	
向田A遺跡	児玉	1号溝	22図1	椀	未見	
向田B遺跡	児玉	溝跡	22図2	椀	未見	
向田遺跡	児玉	1号土壙墓	24図2	椀	未見	
安田遺跡	児玉	1号住居跡	9図1	椀	未見	
高岡寺院跡	高麗	グリッド	49図8	椀	未見	
高岡寺院跡	高麗	グリッド	49図9	椀	未見	
十二天遺跡	児玉	1a号住居跡	345図1	椀	東濃	
十二天遺跡	児玉	1a号住居跡	345図2	椀	東濃	
十二天遺跡	児玉	5b号住居跡	345図3	椀	浜北	
十二天遺跡	児玉	7a号住居跡	345図4	皿	東濃	
十二天遺跡	児玉	7a号住居跡	345図5	椀	東濃	
十二天遺跡	児玉	16d号住居跡	345図6	皿	東濃	
十二天遺跡	児玉	10号溝	345図7	椀	東濃	
十二天遺跡	児玉	グリッド	345図9	長頸瓶	東濃	
十二天遺跡	児玉	3号溝	346図	長頸瓶	東濃	
十二天遺跡	児玉	16d号住居跡	非掲載	皿	東濃	
十二天遺跡	児玉	グリッド	非掲載	不明	東濃	
大久保山遺跡I	児玉	31号住居跡	104図6	長頸瓶	未見	
大久保山遺跡I	児玉	31号住居跡	104図7	広口長頸瓶	未見	
大久保山遺跡I	児玉	3号住居跡	73図3	皿	未見	
大久保山遺跡II	児玉	2号土壙	154図 D2－1	広口長頸瓶	未見	
大久保山遺跡II	児玉	E地区4号住居跡	48図12	皿	未見	
大久保山遺跡II	児玉	36号住居跡	95図62	長頸瓶	未見	
大久保山遺跡III	児玉	VB地区1号住居跡	136図6	椀	未見	
大久保山遺跡IV	児玉	22号住居跡	28図3	椀	未見	
大久保山遺跡IV	児玉	4号住居跡	8図13	椀	未見	
大久保山遺跡IV	児玉	4号住居跡	8図16	椀	未見	
大久保山遺跡IV	児玉	4号住居跡	8図17	椀	未見	
枇杷橋遺跡	児玉	15号住居跡	37図7	椀	未見	
枇杷橋遺跡	児玉	16号住居跡	38図8	長頸瓶	未見	
枇杷橋遺跡	児玉	グリッド	41図5	皿	未見	
枇杷橋遺跡	児玉	グリッド	41図6	椀	未見	
枇杷橋遺跡	児玉	1号住居跡	6図17	長頸瓶	未見	
雷電下遺跡	児玉	グリッド	132図54	椀	—	
鳥森遺跡	那珂	42号溝	未報告	椀	東濃	
鳥森遺跡	那珂	2号住居跡B区	未報告	椀	東濃	
宮ヶ谷戸遺跡	那珂	35・36号住居跡	61図24	三付皿	東濃	
宮ヶ谷戸遺跡	那珂	1トレンチ	未報告	耳皿	浜北	
宮ヶ谷戸遺跡	那珂	2トレンチ	未報告	皿	東濃	
宮下遺跡	那珂	第1カマド	4図2	椀	未見	
宮下遺跡	那珂	JDグリッドNo.7グリッド	未報告	椀	東濃	
宮下遺跡	那珂	野鍛冶	未報告	皿	東濃	
宮下遺跡	那珂	5号住居跡No.1	未報告	長頸瓶	東濃	
宮下遺跡	那珂	7号住居跡	未報告	長頸瓶	東濃	
宮下遺跡	那珂	JD11グリッドNo.55	未報告	長頸瓶	東濃	
宮下遺跡	那珂	1号住居跡	未報告	長頸瓶	東濃	
宮下遺跡	那珂	5号住居跡	未報告	椀	東濃	
広木上宿遺跡	那珂	グリッド	176図23	皿	浜北	
上野B遺跡	那珂	18号住居跡	未報告	椀	東濃	
上野B遺跡	那珂	グリッド	未報告	小瓶	東濃	
石神遺跡	那珂	39D号住居跡	未報告	耳皿	東濃	
石神遺跡	那珂	3号住居跡No.1	未報告	小瓶	東濃	
石神遺跡	那珂	10号住居跡No.76	未報告	椀	東濃	
石神遺跡	那珂	22号竪穴カマドNo.1	未報告	椀	東濃	
石神古墳	那珂	21住居跡	未報告	長頸瓶	東濃	
石神古墳	那珂	6号住居跡	未報告	皿	東濃	
石神古墳	那珂	1溝4b区	未報告	椀	東濃	朱墨硯
石神古墳	那珂	20号住居跡	未報告	椀	東濃	
滝ノ沢遺跡	那珂	4号住居跡	217図10	椀	東濃	
滝ノ沢遺跡	那珂	4号住居跡	217図11	皿	東濃	
東宮平遺跡	那珂	グリッド	40図2	皿	未見	
日の森遺跡	那珂	BG3グリッド	未報告	椀	浜北	
猫の口遺跡	那珂	1号住居跡+周内	未報告	椀	東濃	
猫の口遺跡	那珂	4号住居跡	8図7	椀	東濃	
猫の口遺跡	那珂	4号住居跡	非掲載	段皿	東濃	
戸森松原遺跡	榛沢	4号溝跡	139図1	椀	東濃	
浦下遺跡	榛沢	3号住居跡	11図22	皿	二川	
水窪遺跡2次	榛沢	7号住居跡	16図11	椀	未見	
水窪遺跡2次	榛沢	1号住居跡	図版24	手付長頸瓶	浜北	
西浦北遺跡	榛沢	4号住居跡	17図2	長頸瓶	東濃	
西浦北遺跡	榛沢	48腹土	未報告	椀	東濃	
石蒔A遺跡	榛沢	表採	未報告	椀	東濃	
台耕地遺跡	榛沢	グリッド	196図3	椀	二川	
江原遺跡	橋羅	1号住居跡	6図1	皿	未見	
上敷免遺跡	橋羅	248号住居跡	795図15	椀	東濃	
上敷免遺跡	橋羅	258号住居跡	811図3	椀	東濃	
上敷免遺跡	橋羅	第6発掘区	893図2	無釉皿	東濃	
上敷免遺跡3次	橋羅	1号住居跡	86図1	椀	未見	
上敷免北遺跡	橋羅	A区	36図22	皿	未見	
上敷免北遺跡3次	橋羅	2号住居跡	89図2	皿	未見	
上敷免北遺跡3次	橋羅	2号住居跡	89図5	広口長頸瓶	未見	
新屋敷東遺跡	橋羅	158号住居跡	559図14	皿	東濃	
八日市遺跡	橋羅	7号溝	178図1	長頸瓶	浜北	
八日市遺跡	橋羅	9号溝	178図3	長頸瓶	浜北	
諏訪の木遺跡	大里	4区5号溝	未報告	皿	浜北	
諏訪の木遺跡	大里	4区5号溝	未報告	皿	浜北	
諏訪の木遺跡	大里	9区大溝	未報告	皿	浜北	
諏訪の木遺跡	大里	4区大溝II	未報告	皿	東濃	

8表　埼玉県出土の灰釉陶器（折戸53号窯式段階）(2)

遺跡名	郡	遺構名	図番号	形態	産地	トチン他
諏訪の木遺跡	大里	4区大溝II	未報告	皿	東濃	墨書「丈」
諏訪の木遺跡	大里	4区大溝II	未報告	皿	東濃	
諏訪の木遺跡	大里	4区区域	未報告	皿	東濃	
諏訪の木遺跡	大里	9区大溝	未報告	皿	東濃	
諏訪の木遺跡	大里	記載なし	未報告	皿	東濃	
諏訪の木遺跡	大里	9区大溝	未報告	耳皿	東濃	
諏訪の木遺跡	大里	4区大溝	未報告	段皿	東濃	
諏訪の木遺跡	大里	4区大溝	未報告	長頸	東濃	
諏訪の木遺跡	大里	8区K 24P 1	未報告	長頸	東濃	
諏訪の木遺跡	大里	9区大溝	未報告	長頸	東濃	
諏訪の木遺跡	大里	1号溝	未報告	椀	東濃	
諏訪の木遺跡	大里	1号溝	未報告	椀	東濃	
諏訪の木遺跡	大里	5区SX1	未報告	椀	東濃	
諏訪の木遺跡	大里	8・9号竪穴住居跡	未報告	椀	東濃	
諏訪の木遺跡	大里	8・9号竪穴住居跡	未報告	椀	東濃	
中島遺跡	大里	住居跡	16図6	長頸	未見	
天神遺跡	大里	グリッド	59図90	長頸	未見	
北島遺跡第10地点	埼玉	3号溝	67図35	長頸	東濃	
北島遺跡第10地点	埼玉	3号溝	67図40	鉢	東濃	
北島遺跡第10地点	埼玉	17号溝	88図22	椀	東濃	
北島遺跡第10地点	埼玉	17号溝	88図23	鉢	東濃	
北島遺跡第10地点	埼玉	22号溝	90図38	椀	東濃	
北島遺跡第13地点	埼玉	27号溝	79図11	椀	浜北	
北島遺跡第13地点	埼玉	19号土壙	81図7	椀	東濃	
北島遺跡第4地点	埼玉	11号土壙	339図2	椀	東濃	
北島遺跡第4地点	埼玉	11号土壙	339図4	椀	東濃	
北島遺跡第4地点	埼玉	グリッド	343図18	皿	東濃	
北島遺跡第4地点	埼玉	グリッド	343図19	椀	東濃	
北島遺跡第14地点	埼玉	17号土壙	191図SK7-1	椀	東濃	
北島遺跡第14地点	埼玉	1号溝跡	230図82	椀	東濃	
北島遺跡第14地点	埼玉	1号溝跡	232図123	椀	東濃	
北島遺跡第14地点	埼玉	1号溝跡	232図124	椀	東濃	
北島遺跡第14地点	埼玉	1号溝跡	232図125	椀	東濃	
北島遺跡第14地点	埼玉	5号溝跡	235図15	椀	東濃	
北島遺跡第14地点	埼玉	19号溝跡	239図24	椀	東濃	
北島遺跡第15地点	埼玉	5号井戸跡	326図SK5-1	皿	未見	
北島遺跡第15地点	埼玉	5号溝跡	335図1	椀	東濃	
北島遺跡第15地点	埼玉	グリッド	344図6	椀	東濃	
北島遺跡第16地点	埼玉	3号井戸跡	383図4	皿	未見	
北島遺跡第16地点	埼玉	13号溝跡	416図1	椀	未見	
愛宕通遺跡	埼玉	10号住居跡	33図17	小瓶	東濃	
愛宕通遺跡	埼玉	15号住居跡	45図2	椀	東濃	
小敷田遺跡	埼玉	Iトレンチ1区	16図12	皿	東濃	
小敷田遺跡	埼玉	J区	16図19	皿	東濃	
小敷田遺跡	埼玉	J区	16図21	椀	東濃	
小敷田遺跡	埼玉	2区	未報告	皿	東濃	
小敷田遺跡	埼玉	グリッド	未報告	皿	東濃	墨書「二」
常光院東遺跡	埼玉	2号住居跡	25図2	長頸	未見	
池守池上遺跡	埼玉	11号住居跡	141図20	皿	二川	
池守池上遺跡	埼玉	13号住居跡	146図10	椀	二川	
池守池上遺跡	埼玉	13号住居跡	146図11	椀	二川	墨書「巣」
池守池上遺跡	埼玉	79号土壙	193図9	長頸	二川	
池守池上遺跡	埼玉	グリッド	208図17	皿	東濃	
池守池上遺跡	埼玉	グリッド	208図18	椀	東濃	
池守池上遺跡	埼玉	グリッド	208図19	小瓶	猿投	漆壺か
池守池上遺跡	埼玉	13号住居跡	未報告	長頸	浜北	
池守池上遺跡	埼玉	13号住居跡	未報告	長頸	浜北	
椿山遺跡1次調査	埼玉	グリッド	県史	椀	猿投	
椿山遺跡3・4次調査	埼玉	19号住居跡	205図18	長頸	東濃	
椿山遺跡3・4次調査	埼玉	25号住居跡	213図30	長頸	浜北	
椿山遺跡3・4次調査	埼玉	34号住居跡	219図19	椀	東濃	
椿山遺跡3・4次調査	埼玉	35号住居跡	221図40	椀	東濃	
椿山遺跡3・4次調査	埼玉	44号住居跡	225図3	椀	二川	

遺跡名	郡	遺構名	図番号	形態	産地	トチン他
椿山遺跡3・4次調査	埼玉	48号住居跡	228図14	椀	東濃	
椿山遺跡3・4次調査	埼玉	48号住居跡	228図15	長頸	猿投	
椿山遺跡3・4次調査	埼玉	53号住居跡	231図1	皿	東濃	
椿山遺跡3・4次調査	埼玉	60号住居跡	235図10	長頸	東濃	
椿山遺跡3・4次調査	埼玉	4号生産跡	239図21	椀	浜北	
馬場北遺跡	埼玉	―	未報告	椀	二川	
白草遺跡	男衾	74号住居跡	102図24	長頸	東濃	
白草遺跡	男衾	74号住居跡	102図25	長頸	東濃	
白草遺跡	男衾	13号住居跡	122図5	椀	東濃	
白草遺跡	男衾	71号住居跡	175図8	小瓶	東濃	
白草遺跡	男衾	42号住居跡	193図7	長頸	浜北	
白草遺跡	男衾	32号住居跡	212図15	長頸	浜北	
白草遺跡	男衾	47号住居跡	228図9	長頸	二川	
浜川戸遺跡1次	埼玉	2号住居跡		鉢	浜北	
浜川戸遺跡2次	埼玉	2・3住居跡 カマド付近		椀	東濃	
浜川戸遺跡3次	埼玉	27グリッド		小瓶	二川	
林遺跡16次	埼玉	――	未報告	椀	二川	
慈光平廃寺	比企	乙慈光平3号 平場3トレンチ	未報告	椀	東濃	
慈光平廃寺	比企	乙慈光平5号 平場5トレンチ	未報告	椀	東濃	
尺尻遺跡	比企	3号住居跡	147図5	皿	東濃	
新田坊遺跡	比企	2号住居跡	113図25	長頸	東濃	
西浦遺跡	比企	22号住居跡	141図13	椀	東濃	
西浦遺跡	比企	49号溝	242図SD49-4	長頸	東濃	
西浦遺跡	比企	54号溝	243図SD54-3	椀	東濃	
物見山遺跡	比企	試掘	未報告	長頸	東濃	
まま上遺跡1次	入間	グリッド	87図27	椀	未見	
稲荷前遺跡A区	入間	47号住居跡	101図15	椀	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	50号住居跡	107図5	椀	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	60号住居跡	126図11	皿	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	第1ピット群	209図8	椀	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	第1グリッド	210図12	椀	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	第1グリッド	210図9	椀	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	4号住居跡	23図3	皿	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	36号掘立柱建物跡	273図16	椀	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	第2土壙	292図29	皿	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	33号住居跡	75図4	椀	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	38号住居跡	84図3	椀	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	42号住居跡	92図9	椀	東濃	
稲荷前遺跡B区	入間	B区39号住居跡	108図15	長頸	東濃	
稲荷前遺跡B区	入間	B区39号住居跡	108図17	長皿	東濃	
稲荷前遺跡B区	入間	B区40号住居跡	110図37	長頸	東濃	
稲荷前遺跡B区	入間	B区5号井戸跡	231図1	椀	東濃	
稲荷前遺跡B区	入間	B区33号土壙	236図SK33-2	椀	東濃	
稲荷前遺跡B区	入間	B区33号土壙	236図SK33-3	椀	東濃	
稲荷前遺跡B区	入間	B区35号土壙	236図SK35-3	皿	東濃	
稲荷前遺跡B区	入間	B区10号住居跡	59図7	椀	東濃	
越生五領遺跡2次	入間	C区撹乱層	19図43	椀	東濃	
越生五領遺跡3次	入間	グリッド	17図4	長頸	東濃	
河越氏館跡	入間	F区2号廊	18図4	椀	未見	
花見堂遺跡	入間	4号住居跡	19図85	皿	東濃	
花見堂遺跡	入間	3号溝	57図8	椀	未見	
花見堂遺跡	入間	遺構確認	65図8	皿	未見	
花見堂遺跡	入間	遺構確認	66図13	長頸	未見	
宮ノ越遺跡	入間	47号住居跡	148図12	椀	東濃	
宮ノ越遺跡	入間	55号住居跡	163図18	長頸	東濃	
宮ノ越遺跡	入間	9号住居跡	34図9	椀	東濃	
宮地遺跡	入間	77号住居跡	P243	椀	未見	
宮町遺跡II	入間	ピット1	9図4	椀	二川	
金井遺跡B区	入間	10号住居跡	41図6	椀	東濃	
金井遺跡B区	入間	10号住居跡	41図7	椀	東濃	
原遺跡	入間	1号住居跡	82図55	小瓶	浜北	

9表　埼玉県出土の灰釉陶器（折戸53号窯式段階）(3)

遺跡名	郡	遺構名	図番号	形態	産地	トチン他
甚木峯遺跡	入間	包含層	35図2	長頸瓶	東濃	
甚木峯遺跡	入間	包含層	35図4	長頸瓶	東濃	
甚木峯遺跡	入間	包含層	35図5	長頸瓶	二川	
椿峯遺跡椿山第二遺跡	入間	2B住居跡	94図5	長頸瓶	未見	
東新井（確認調査）	入間	不明跡か	未報告	皿	東遠江	
東台遺跡2地点	入間	4号住居跡	20図10	長頸瓶	未見	
東台遺跡2地点	入間	4号住居跡	20図11	長頸瓶	未見	
東台遺跡2地点	入間	4号住居跡	20図12	長頸瓶	未見	
東台遺跡第14・15地点	入間	26号住居跡	27図15	椀	東濃	
揚櫨木遺跡	入間	56号住居跡	134図24	椀	東濃	
揚櫨木遺跡	入間	56号住居跡	134図44	椀	東濃	
揚櫨木遺跡	入間	56号住居跡	134図50	長頸瓶	東濃	
揚櫨木遺跡	入間	67号住居跡	145図12	長頸瓶	東濃	
揚櫨木遺跡	入間	68号住居跡	146図10	椀	東濃	
揚櫨木遺跡	入間	グリッド	172図47	皿	未見	
揚櫨木遺跡	入間	グリッド	172図50	長頸瓶	未見	
揚櫨木遺跡	入間	グリッド	172図51	長頸瓶	未見	
揚櫨木遺跡	入間	74号住居跡	非掲載	椀	東濃	
中道遺跡41地点	新羅	23号住居跡	未報告	椀	東遠江	
田子山遺跡31地点	新羅	49号住居跡	未報告	椀	東濃	
田子山遺跡41・42地点	新羅	202号土壙	図8	皿	二川	
田子山遺跡4地点	新羅	5号住居跡	40図13	椀	浜北	
田子山遺跡5地点	新羅	10号住居跡	51図2	椀	東遠江	
峯遺跡	新羅	5号住居跡	21図27	椀	未見	
峯遺跡	新羅	5号住居跡	21図28	長頸瓶	未見	
伊奈・原遺跡	足立	1号住居跡	87図4	椀	未見	
宮岡遺跡2次	足立	2号住居跡	34図6	椀	東濃	
宮前遺跡3次	足立	10号住居跡	116図1	椀	浜北	
駒前南遺跡	足立	1号住居跡	29図1	椀	東遠江	
新屋敷遺跡C区	足立	15号住居跡	237図11	椀	東濃	
水判土堀の内遺跡	足立	南調査区包含層	151図168	椀	二川	
前田字六反畑第1遺跡	足立	SE3	未報告	長頸瓶	東濃	
大山遺跡	足立	グリッド	221図36	椀	東遠江	
天神山遺跡	足立	住居跡	7図17	椀	東濃	
東本郷台遺跡	足立	1号住居跡	28図22	長頸瓶	未見	
氷川神社東遺跡	足立	E－P19	168図2	広口長頸瓶	二川	
氷川神社東遺跡	足立	40号住居跡	169図25	皿	東遠江	
氷川神社東遺跡	足立	6号住居跡	169図27	椀	東遠江	
氷川神社東遺跡	足立	19・20号住居跡	169図37	椀	東遠江	
氷川神社東遺跡	足立	E－表土	169図38	椀	東遠江	
氷川神社東遺跡	足立	F－V6	169図39	椀	東遠江	
氷川神社東遺跡	足立	F　R5	169図40	椀	東遠江	
氷川神社東遺跡	足立	A－R15	169図41	椀	東遠江	
氷川神社東遺跡	足立	17号住居跡	169図42	椀	東遠江	
氷川神社東遺跡	足立	A－UV16	170図45	長頸瓶	東遠江	
氷川神社東遺跡	足立	A－R15	170図46	長頸瓶	東遠江	
氷川神社東遺跡	足立	F－S6	170図48	椀	浜北	
氷川神社東遺跡	足立	F－M1	170図50	長頸瓶	二川	
氷川神社東遺跡	足立	6号住居跡	170図51	長頸瓶	東濃	
氷川神社東遺跡	足立	39号住居跡	170図52	長頸瓶	東濃	
氷川神社東遺跡	足立	10号住居跡	170図54	短頸壺	東濃	
氷川神社東遺跡	足立	15号住居跡	170図55	小瓶	東濃	
氷川神社東遺跡	足立	F－N5	170図56	長頸瓶	東濃	
氷川神社東遺跡	足立	A－UV16	170図57	小瓶	東濃	
氷川神社東遺跡	足立	A－UV10	170図58	小瓶	東濃	
氷川神社東遺跡	足立	F－W7	170図60	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	D－P368	170図61	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	10号住居跡	170図62	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	24号住居跡	170図63	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	21号住居跡	170図64	椀	東遠江	
氷川神社東遺跡	足立	43号住居跡	170図65	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	43号住居跡	170図66	椀	東濃	
氷川神社東遺跡	足立	6号住居跡	170図68	椀	東濃	
氷川神社東遺跡	足立	8号住居跡	170図69	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	A－S14	170図70	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	D－U8	170図71	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	15号住居跡	170図72	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	19・20号住居跡	170図73	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	X－N11	170図74	椀	東遠江	
氷川神社東遺跡	足立	A－V16・17	170図75	椀	東遠江	
氷川神社東遺跡	足立	24号住居跡	171図79	椀	未見	
氷川神社東遺跡	足立	E－D12	171図87	椀	二川	
本郷遺跡	高麗			皿	東遠江	
本郷遺跡	高麗		16図47	皿	浜北	

椀と東濃産の椀、志木市田子山遺跡では東遠江産の椀・東濃産の椀・浜北産の椀・二川産の皿、同市中道遺跡では東遠江の椀、狭山市宮ノ越遺跡では東遠江の椀・東濃の椀・長頸壺、坂戸市原遺跡では浜北産の小瓶、同市宮町遺跡では二川産の椀がそれぞれ消費されていた。やはり出土数が4点以下の場合、東海道系の製品もみられた。なかでも宮町遺跡や富士見市東台遺跡は、消費量は減少するが、東濃産の製品の積極的な消費はみられなかったのである。

足立・埼玉郡南部地域で施釉陶器の出土数が少ない遺跡では、やはり多様な産地の製品となる。新屋敷遺跡では東濃産の椀、伊奈町大山遺跡では東遠江の椀、大宮市水判土堀の内遺跡では二川産の椀、浦和市駒前遺跡では東遠江産の椀、同市宮前遺跡では浜北産の椀、春日部市浜川戸遺跡では東遠江産の椀、浜北産の椀、二川産の小瓶など、遺跡ごとに複雑な産地の製品が消費されている。9世紀後半に豊富な出土のみられた新屋敷遺跡や前田六反畑遺跡などは、急速に減少した。

その一方、大宮市氷川神社東遺跡・椿山遺跡では、比較的豊富に確認できる。氷川神社東遺跡では、東遠江産の椀（10）・皿・長頸壺（2）、東濃産の椀（2）・小瓶（3）・短頸壺・長頸壺（3）・二川産の長頸壺などで構成される。また椿山遺跡では、二川産の椀、浜北産の椀、東遠江

産の椀（4）・長頸壺、東濃産の長頸壺が出土している。

足立・埼玉郡南部では、豊富な出土量のある遺跡でも少数でも、東海道系、とくに東遠江産の製品が、主体的であった。下総国葛飾郡内に含まれる松伏町本郷遺跡でも、東遠江産の皿、浜北産の皿などが確認できる。

以上から10世紀前半は、①9世紀後半同様、灰釉陶器の大量消費遺跡では、児玉・大里・比企・入間・埼玉郡北部地域では、東濃産の製品を積極的に消費する遺跡が見られ、足立・埼玉郡南部では、東遠江産の製品が積極的に消費されていたこと、②出土遺跡の変動は、9世紀後半からみられるが、灰釉陶器の需要は相対的に上昇したこと、③少量出土遺跡では、東濃産の製品が、a児玉・大里地域と埼玉郡北西部、b比企・入間地域北部、c入間地域南部・足立・埼玉郡南部地域へと段階的に減少するが、④東遠江産の製品は、二川産・浜北産と交替しつつ、a足立・埼玉郡南部、b比企・入間へと段階的に減少し、多様な産地の製品が見られた。

(4) 10世紀後半 東山72号窯式・虎渓山1号窯式の施釉陶器を一括した。

東山72号窯式期の灰釉陶器は、253点の出土がみられる。このうち3割弱の73点は、上里町中堀遺跡から出土した。440点から253点への推移は、中堀遺跡を除くと、314点から180点と10世紀前半の6割であり、大きく低迷した。ただし比企・入間地域では、10世紀前半になると遺跡の形成が不鮮明になるので、窯業製品全体に占める施釉陶器の組成率は、逆に高まったといえよう。

上野国に隣接する児玉地域が、全体の半数以上を占める。東濃産製品は、全体の85%を占め、成長が著しい。入間・足立・埼玉・大里郡では、東遠江産製品が減少しつつもみられる。

中堀遺跡は、大形の掘立柱建物跡群から竪穴住居跡主体の遺跡へ転換し、東濃産製品を積極的に受容し、消費量の減少が緩やかとなった。中堀遺跡周辺では、上里町水引塚遺跡・同町日月遺跡・同町田中西遺跡などで東濃産製品が、豊富に消費された。水引塚遺跡では、椀（7）・皿（5）、日月遺跡では、椀（3）が見られる。

10世紀後半の児玉地域では、小山川・志度川の低地（自然堤防上）や丘陵部に小規模な集落が、積極的に展開し、東濃産の灰釉陶器を消費する。児玉町金佐奈遺跡・美里町宮下遺跡・同町宮ヶ谷戸遺跡・本庄市大久保山遺跡などで豊富な東濃製品がみられる。

児玉町東鹿沼遺跡・同町十二天遺跡・同町枇杷橋遺跡・同町阿知越遺跡・同町雷電下遺跡・美里町樋の口遺跡・同町滝ノ沢遺跡・同町原遺跡・同町清水谷遺跡・同町甘粕山遺跡・同町新倉館跡・同町向田遺跡・岡部町古川端遺跡・同町石蒔A遺跡などは、竪穴式住居を2～5軒ほど調査しただけだが、1～4点の出土を確認できる。小規模集落へ普遍的に東濃産製品が持ち込まれているのである。

大里・埼玉北部地域でも東濃産製品は、需要度が高い。北島遺跡（第14～16地点）では、僅かに2点、浜北産の椀があるが、他は東濃産の椀（12）・皿（7）である。また北島遺跡からは、椀（6）・皿・段皿（2）など東濃産の緑釉陶器が出土した。同様な立地条件の行田市小敷田遺跡では、東濃産の椀（4）・皿・長頸壺、東遠江産の皿がみられる。

深谷市上敷免遺跡・同市上敷免北遺跡・同市宮ヶ谷戸遺跡・同市戸森松原遺跡・岡部町菅原遺

跡・川本町白草遺跡・熊谷市橘の上遺跡・行田市馬場北遺跡・同市愛宕通遺跡では、灰釉陶器の出土は、4点以下だが、馬場北遺跡で東遠江産の椀が出土した他は、全て東濃産である。

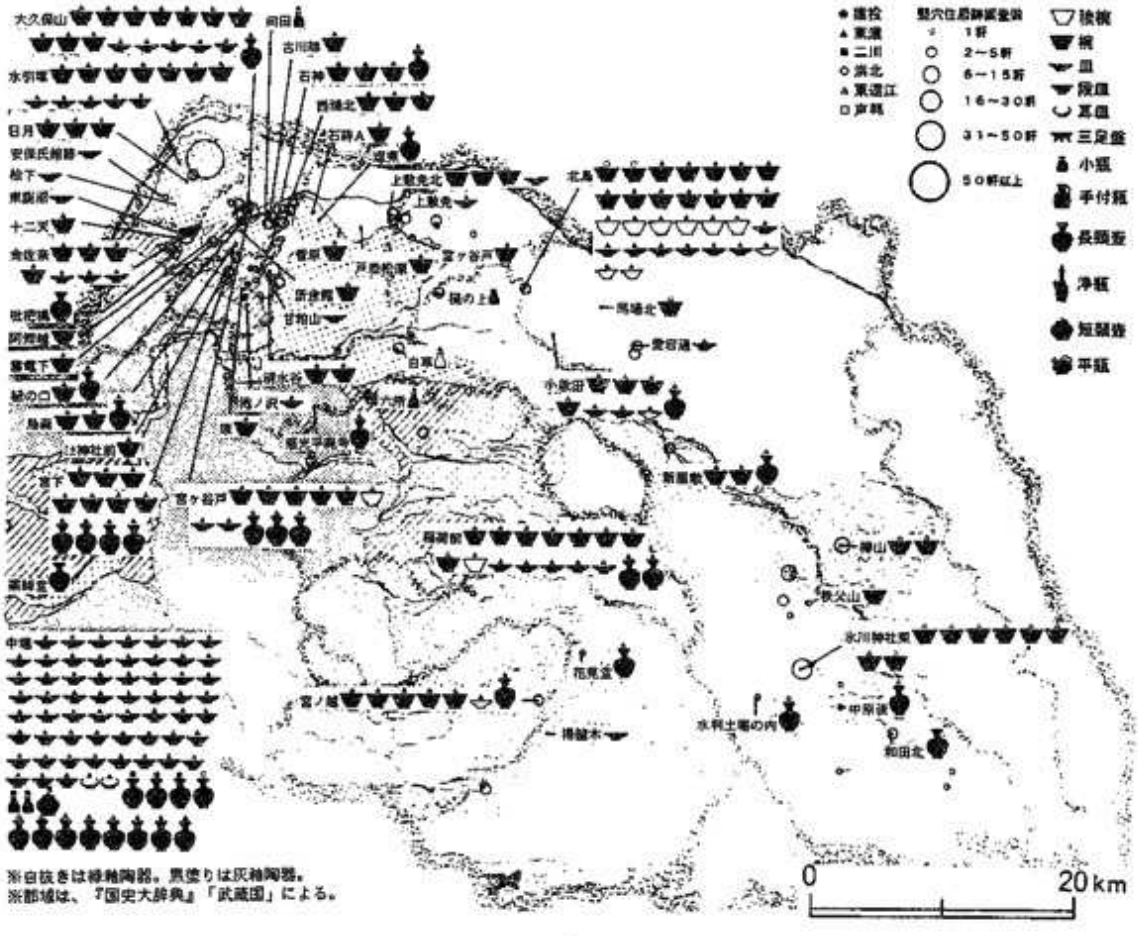
比企・入間地域では、坂戸市稲荷前遺跡や狭山市宮ノ越遺跡で、引き続き東濃産製品がみられた。稲荷山遺跡では、東濃産の椀（6）・皿（4）・長頸壺（2）、東遠江産の椀（2）・皿、宮ノ越遺跡では、東濃産の椀（5）・長頸壺がみられる。圧倒的に東濃産製品が目立つ。

小川町慈光平遺跡・同町六所遺跡・川越市花見堂遺跡・狭山市揚櫨木遺跡などでは、一点のみだが、全て東濃産製品である。。

足立・埼玉南部では、東遠江産製品が、東濃産製品を上回る。とくに氷川神社東遺跡は、8点の椀全てが、東遠江産の製品である。また浦和市中原後遺跡では長頸壺、蓮田市椿山遺跡では椀（2）が東遠江産製品である。

しかし大宮市水判土堀の内遺跡では、東濃産の長頸壺、鴻巣市新屋敷遺跡では、東濃産の椀（2）・長頸壺が確認でき、埼玉県東部でも東濃産製品が出土している。

なお秩父地域の両神村薬師堂遺跡でも、東濃産の長頸壺が出土している。



第6図　施釉陶器の器種・個体数・産地別分布図（10世紀後半）

10表　埼玉県出土の灰釉陶器（東山72号窯式段階）(1)

遺跡名	郡	遺構名	図番号	形態	産地	トチン痕
安保氏館跡	加美	1号住居跡	6図8	皿	未見	
水引塚遺跡	加美	W19住居跡No.570	未報告	皿	東濃	
水引塚遺跡	加美	X22区No.732	未報告	皿	東濃	
水引塚遺跡	加美	U20区No.2298	未報告	段皿	東濃	
水引塚遺跡	加美	X19住居跡No.434	未報告	段皿	東濃	朱墨硯
水引塚遺跡	加美	X23住居跡No.2357	未報告	器台II	東濃	
水引塚遺跡	加美	K18区No.2583	未報告	椀	東濃	
水引塚遺跡	加美	P16住居跡No.1078	未報告	椀	東濃	
水引塚遺跡	加美	S14区No.985	未報告	椀	東濃	
水引塚遺跡	加美	T20住居跡No.2186	未報告	椀	東濃	
水引塚遺跡	加美	T26住居跡	未報告	椀	東濃	
水引塚遺跡	加美	U24区No.2449	未報告	椀	東濃	
水引塚遺跡	加美	X12住居跡No.172	未報告	椀	東濃	
水引塚遺跡	加美	X20住居跡No.619	未報告	椀	東濃	
中耕遺跡	加美	溝跡	未報告	椀	東濃	
日月遺跡	加美	N3住居跡	未報告	椀	東濃	
日月遺跡	加美	N3住居跡No.336	未報告	椀	東濃	
日月遺跡	加美	O3住居跡No.607	未報告	椀	東濃	
檜下遺跡北部地区	加美	3号鍛冶工房跡	160図11	皿	未見	
阿知越遺跡B地点	児玉	7号住居跡	6図	椀	東濃	
金佐奈遺跡B地点	児玉	155・156号住居跡	未報告	皿	東濃	
金佐奈遺跡B地点	児玉	172号住居跡	未報告	皿	東濃	
金佐奈遺跡B地点	児玉	78号住居跡	未報告	皿	東濃	
金佐奈遺跡B地点	児玉	74号住居跡	未報告	椀	東濃	
金佐奈遺跡B地点	児玉	79号住居跡	未報告	椀	東濃	
金佐奈遺跡B地点	児玉	L－10	未報告	椀	東濃	
金佐奈遺跡B地点	児玉	S－15	未報告	椀	東濃	
古川端遺跡	児玉	33号住居跡	118図8	椀	未見	
向田遺跡	児玉	7号住居跡	20図5	小瓶	東濃	
十二天遺跡	児玉	グリッド	345図8	椀	東濃	
大久保山遺跡I	児玉	31号住居跡	104図5	皿	未見	
大久保山遺跡I	児玉	7号住居跡	78図10	皿	未見	
大久保山遺跡II	児玉	調査区	160図4	椀	未見	
大久保山遺跡II	児玉	調査区	161図31	皿	未見	
大久保山遺跡II	児玉	E道路14B号住居跡	60図14	椀	未見	
大久保山遺跡II	児玉	E道路14B号住居跡	60図15	椀	未見	
大久保山遺跡III	児玉	調査区	132図14	手付き瓶類	未見	
大久保山遺跡III	児玉	IVB地区2号住居跡	138図10	椀	未見	
大久保山遺跡III	児玉	A2道路区	7図4	椀	未見	
大久保山遺跡III	児玉	23グリッド4号土壙	81図3	椀	未見	
大久保山遺跡III	児玉	23グリッド4号土壙	81図4	椀	未見	
大久保山遺跡IV	児玉	87号住居跡	105図12	椀	未見	
大久保山遺跡IV	児玉	87号住居跡	105図16	椀	未見	
大久保山遺跡IV	児玉	10号住居跡	17図5	器台付き皿II	未見	
大久保山遺跡IV	児玉	65号住居跡	71図10	皿	未見	
大久保山遺跡IV	児玉	67号住居跡	76図6	椀	未見	
東鹿沼遺跡	児玉	2号住居跡	14図3	皿	未見	
枇杷橋遺跡	児玉	5号住居跡	14図15	長頸瓶	未見	
雷電下遺跡	児玉	27号住居跡	54図4	椀	－	
ミカ神社前遺跡	那珂	33号住居跡	79図2	椀	東濃	
烏森遺跡	那珂	42号溝	未報告	長頸瓶	東濃	
烏森遺跡	那珂	2号住居跡	未報告	椀	東濃	
烏森遺跡	那珂	4号住居跡No.1	未報告	椀	東濃	
甘粕山（東山）遺跡	那珂	グリッド	69図13	皿	未見	
宮ヶ谷戸遺跡	那珂	17号住居跡	30図2	椀	東濃	
宮ヶ谷戸遺跡	那珂	3号住居跡	未報告	皿	東濃	
宮ヶ谷戸遺跡	那珂	3トレンチ	未報告	皿	東濃	
宮ヶ谷戸遺跡	那珂	3トレンチ	未報告	長頸瓶	東濃	
宮ヶ谷戸遺跡	那珂	3トレンチ	未報告	長頸瓶	東濃	
宮ヶ谷戸遺跡	那珂	5号住居跡No.9	未報告	長頸瓶	東濃	
宮ヶ谷戸遺跡	那珂	1号住居跡	未報告	椀	東濃	
宮ヶ谷戸遺跡	那珂	5号住居跡	未報告	椀	東濃	
宮ヶ谷戸遺跡	那珂	SK1付近	未報告	椀	東濃	
宮ヶ谷戸遺跡	那珂	11号住居跡	未報告	椀	東濃	
宮下遺跡	那珂	第1カマド	4図2	椀	東濃	
宮下遺跡	那珂	7号住居跡	未報告	長頸瓶	東濃	
宮下遺跡	那珂	D11グリッドNo.7	未報告	長頸瓶	東濃	
宮下遺跡	那珂	井戸跡周辺一括	未報告	長頸瓶	東濃	
宮下遺跡	那珂	第1スポ	未報告	長頸瓶	東濃	
宮下遺跡	那珂	7号住居跡No.165	未報告	椀	東濃	
宮下遺跡	那珂	7号住居跡No.66	未報告	椀	東濃	
宮下遺跡	那珂	5号住居跡	未報告	椀	東濃	
宮下遺跡	那珂	Iイロ	未報告	椀	東濃	
宮下遺跡	那珂	J1地区第1集合	未報告	椀	東濃	
宮下遺跡	那珂	No.5T	未報告	椀	東濃	
原遺跡	那珂	3号住居跡	未報告	椀	東濃	
新倉館	那珂	2号住居跡	未報告	椀	東濃	
石神遺跡	那珂	ブロック12	未報告	椀	東濃	
石神古墳	那珂	1号溝4b区	未報告	広口長頸瓶	東濃	
石神古墳	那珂	第1土壙	未報告	長頸瓶	東濃	
石神古墳	那珂	11号住居跡	未報告	椀	東濃	
石神古墳	那珂	周溝No.50	未報告	椀	東濃	
石神古墳	那珂	1号溝1a区	未報告	椀	東濃	
石神古墳	那珂	1号溝4b区	未報告	椀	東濃	
石神古墳	那珂	B8号住居跡	未報告	椀	東濃	
石神古墳	那珂	周溝No.50	未報告	椀	東濃	
滝ノ沢遺跡	那珂	1号溝	219図4	皿	東濃	
日の森遺跡	那珂	BL1－42cm	未報告	椀	東濃	
樋の口遺跡	那珂	7号住居跡第1ピット	未報告	長頸瓶	東濃	
樋の口遺跡	那珂	7号住居跡	未報告	椀	東濃	
戸森松原遺跡	榛沢	III区グリッド	164図6	椀	東濃	
菅原遺跡	榛沢	グリッド	104図11	椀	東濃	
清水谷遺跡	榛沢	6号住居跡	19図7	椀	東濃	
清水谷遺跡	榛沢	2号溝	55図7	椀	東濃	
西浦北遺跡	榛沢	グリッド	未報告	椀	東濃	
西浦北遺跡	榛沢	48覆土	未報告	椀	東濃	
西浦北遺跡	榛沢	調査区域東端	未報告	椀	東濃	
石蔵A遺跡	榛沢	83号住居跡	未報告	椀	東濃	
塚東遺跡	榛沢	8号住居跡No.15	未報告	広口長頸瓶	東濃	
上敷免遺跡	幡羅	第6発掘区	893図1	皿	東濃	
上敷免北遺跡	幡羅	A区	36図6	椀	未見	
上敷免北遺跡	幡羅	A区	36図8	椀	未見	
上敷免北遺跡3次	幡羅	2号住居跡	89図3	皿	未見	
上敷免北遺跡3次	幡羅	2号住居跡	89図4	椀	未見	
樋の上遺跡	幡羅	62号住居跡	36図 62号住居跡－4	手付瓶	猿投	
白草遺跡	男衾	32号住居跡	212図1	小瓶	東濃	
北島遺跡第10地点	埼玉	3号溝	67図36	皿	東濃	
北島遺跡第10地点	埼玉	22号溝	90図39	椀	東濃	
北島遺跡第10地点	埼玉	22号溝	90図40	椀	東濃	
北島遺跡第13地点	埼玉	27号溝	79図12	皿	東濃	
北島遺跡第13地点	埼玉	27号溝	79図13	皿	東濃	
北島遺跡第14地点	埼玉	1号溝跡	232図118	椀	東濃	
北島遺跡第14地点	埼玉	1号溝跡	232図119	椀	東濃	
北島遺跡第14地点	埼玉	1号溝跡	232図120	椀	東濃	
北島遺跡第14地点	埼玉	1号溝跡	232図122	椀	東濃	
北島遺跡第14地点	埼玉	1号溝跡	232図126	椀	東濃	
北島遺跡第14地点	埼玉	1号溝跡	232図127	椀	浜北	
北島遺跡第14地点	埼玉	1号溝跡	232図128	椀	東濃	
北島遺跡第14地点	埼玉	1号溝跡	232図129	皿	東濃	朱墨硯
北島遺跡第14地点	埼玉	1号溝跡	232図130	椀	東濃	
北島遺跡第14地点	埼玉	1号溝跡	232図131	皿	東濃	
北島遺跡第14地点	埼玉	17号溝跡	238図28	椀	東濃	

11表　埼玉県出土の灰釉陶器（東山72号窯式段階）(2)

遺跡名	郡	遺構名	図番号	形態	産地	トチン他
北島遺跡第14地点	埼玉	1号溝跡	239図27	椀	浜北	
北島遺跡第15地点	埼玉	21号溝跡	36図50[illegible]	椀	東濃	
北島遺跡第16地点	埼玉	104号溝	421図10	椀	未見	
北島遺跡第16地点	埼玉	113号溝	423図5	皿	未見	
北島遺跡第16地点	埼玉	グリッド	425図3	皿	未見	
愛宕遺跡	埼玉	土壙	77図7	皿	東濃	
小敷田遺跡	埼玉	Ⅰトレンチ1区	16図4	椀	東濃	
小敷田遺跡	埼玉	Ⅰトレンチ1区	16図6	広口長頸瓶	二川	
小敷田遺跡	埼玉	Ⅰトレンチ2区	16図9	皿	東濃	
小敷田遺跡	埼玉	4区4－1	未報告	皿	東遠江	
小敷田遺跡	埼玉	1区2－1	未報告	椀	東濃	
小敷田遺跡	埼玉	2区	未報告	椀	東濃	
小敷田遺跡	埼玉	グリッド	未報告	椀	東濃	
椿山遺跡3・4次調査	埼玉	30号住居跡	216図7	皿	東遠江	
椿山遺跡3・4次調査	埼玉	33号住居跡	218図20	椀	東遠江	
椿山遺跡3・4次調査	埼玉	36号住居跡	223図4	椀	東遠江	
椿山遺跡3・4次調査	埼玉	3号生産跡	238図14	椀	東遠江	
馬場北遺跡	埼玉	——	未報告	椀	東遠江	
慈光平廃寺	比企	乙慈光平10号平場	未報告	広口長頸瓶	東濃	
六所遺跡	比企	5号住居跡	16図14	小瓶	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	62号住居跡	130図11	皿	東遠江	
稲荷前遺跡A区	入間	62号住居跡	130図12	椀	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	62号住居跡	130図13	皿	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	62号住居跡	130図14	椀	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	62号住居跡	130図17	皿	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	1号小鍛冶跡	208図5	皿	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	1号小鍛冶跡	208図6	皿	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	35号井戸跡	361図1	椀	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	35号井戸跡	361図2	椀	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	35号井戸跡	361図4	椀	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	35号井戸跡	361図6	長頸瓶	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	45号井戸跡	401図1	椀	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	24号住居跡	57図2	椀	東遠江	
稲荷前遺跡A区	入間	24号住居跡	57図3	長頸瓶	東濃	
稲荷前遺跡A区	入間	38号住居跡	84図4	椀	東遠江	
花見堂遺跡	入間	2号溝	57図16	広口長頸瓶	東濃	
宮ノ越遺跡	入間	土壙	215図10	長頸瓶	東濃	
宮ノ越遺跡	入間	7号住居跡	29図20	椀	東濃	
宮ノ越遺跡	入間	9号住居跡	34図10	椀	東濃	
宮ノ越遺跡	入間	9号住居跡	34図11	椀	東濃	
宮ノ越遺跡	入間	9号住居跡	34図12	椀	東濃	
宮ノ越遺跡	入間	9号住居跡	34図8	椀	東濃	
塩槌木遺跡	入間	グリッド	172図48	皿	未見	
新屋敷遺跡D区	足立	82号住居跡	290図5	長頸瓶	東濃	
新屋敷遺跡D区	足立	94号住居跡	327図10	椀	東濃	
新屋敷遺跡D区	足立	97号住居跡	333図4	椀	東濃	
水判土曙の内遺跡	足立	南浜表区包含層	150図126	広口長頸瓶	東濃	
秩父山遺跡3次	足立	3号住居跡	22図1	椀	未見	
中原後遺跡	足立	6号土壙	30図7	広口長頸瓶	東遠江	
氷川神社東遺跡	足立	E近代	171図78	椀	東遠江	
氷川神社東遺跡	足立	D－P244	171図80	椀	東遠江	
氷川神社東遺跡	足立	43号住居跡	171図81	椀	東遠江	
氷川神社東遺跡	足立	F－S3	171図82	椀	東遠江	
氷川神社東遺跡	足立	D－X14	171図83	椀	東遠江	
氷川神社東遺跡	足立	F－T4	171図84	椀	東遠江	
氷川神社東遺跡	足立	D－X13	171図85	椀	東遠江	
氷川神社東遺跡	足立	18号住居跡	171図88	椀	東遠江	
和田北遺跡	足立	包含層	102図60	長頸瓶	未見	
薬師堂遺跡	秩父	B区1号住居跡	26図10	広口長頸瓶	東濃	

以上から10世紀後半は、①灰釉陶器の豊富な遺跡は、中堀遺跡・大久保山遺跡・水引塚遺跡・北島遺跡・稲荷前遺跡など東濃産製品を消費する遺跡と、氷川神社東遺跡のように東遠江産の製品を消費する遺跡とに分かれること、②遺跡の総数は、相対的に減少するが、灰釉陶器の需要はさらに上昇したこと、③灰釉陶器の出土が数点に止まる遺跡では、a児玉・大里地域と埼玉郡北西部、b比企・入間・足立・埼玉郡南部地域へと段階的に減少すること、④東遠江産の製品は、足立郡に見られる程度となることが、特徴としてあげられる。

(5)　**11世紀後半**　百代寺窯式・丸石2号窯式の施釉陶器を一括した。

百代寺窯式期の灰釉陶器は、40点みられる。253点から40点への推移は、10世紀後半の15%という激減である。しかし11世紀の竪穴式住居が、県内全域でも50軒にも満たない現在、須恵器・土師器生産の衰退を踏まえると、施釉陶器の普及率は、さらに高まったといえよう。

引き続き灰釉陶器の半数以上が、児玉地域からの出土であり、僅かに幡羅・大里・埼玉郡にみられる。その9割は、東濃産の灰釉陶器である。

巨大な消費地の上里町中堀遺跡は姿を消し、その周囲に同町水引塚遺跡・同町日月遺跡・同町田中西遺跡などが成長し、東濃産の椀・皿を消費した。また小山川・志度川の流域や松久丘陵などの山野に新展開した集落で東濃産製品が、引き続きみられた。

大里地域では、熊谷市北島遺跡に東濃産の皿（4）、同市樋の上遺跡に東濃産の椀・皿がみられ

る。また埼玉郡では、蓮田市椿山遺跡で東遠江産の椀（2）、同市ささら遺跡で東濃産の椀（2）がみられる。

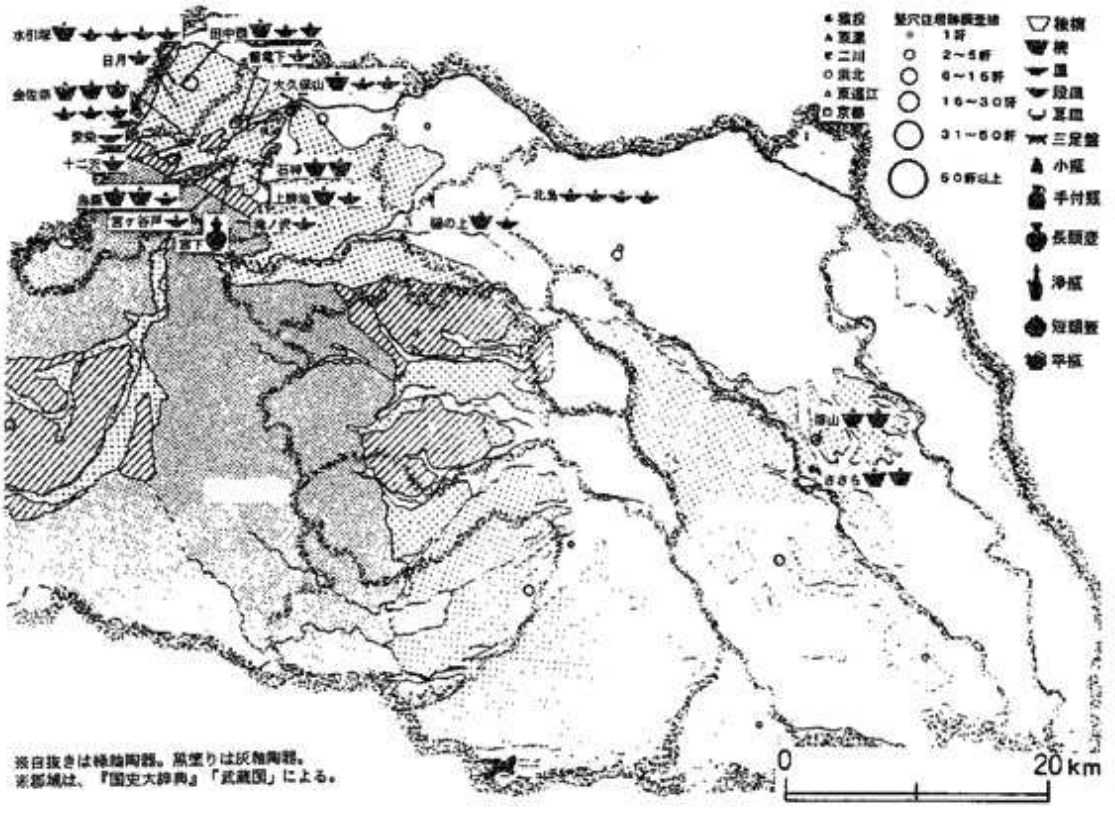
11世紀の特徴をまとめると、①東濃産製品が主体、東遠江産がごく僅かみられること、②10世紀後半から継承された遺跡で消費が見られること、③灰釉陶器の需要率はさらに高まったこと、④東遠江産の製品は、椿山遺跡のみなどである。この後、埼玉県に限らず関東地方一般、11世紀から12世紀の遺跡や土器は、説明しにくくなる。窯業製品の木器や漆器への転換、竪穴式住居から掘立柱建物跡への移行、低地や山間地への進出などが、その理由と考えられるが、、施釉陶器もみられなくなる。

以上、埼玉県内の施釉陶器について、9世紀から11世紀にかけて半世紀ごとに、消費の事実確認を行った。この現象が、いかなる社会的条件の下で発生したか、次に交通路の変動と施釉陶器からみた流通の推移を復元してみたい。

3　古代国家の交通政策と流通の展開

(1)　武蔵国の駅路・伝路

古代の流通を知る上で、欠くことのできない条件の一つとして、国家による交通路（駅伝制）の整備を無視することはできない。斉明朝以来、古代国家の情報伝達手段である駅伝制は、朝鮮半島



第7図　施釉陶器の器種、個体数・産地別分布図（11世紀）

12表　埼玉県出土の灰釉陶器（百代寺窯式段階）

遺跡名	郡	遺構名	図番号	形態	産地	トチン痕	遺跡名	郡	遺構名	図番号	形態	産地	トチン痕
水引塚遺跡	加美	Ⅰ16区	未報告	皿	未確		島森遺跡	那珂	42号溝	未報告	皿	東濃	
水引塚遺跡	加美	X18区No427	未報告	皿	東濃		島森遺跡	那珂	42号溝炭	未報告	椀	東濃	
水引塚遺跡	加美	X20住居跡17No597	未報告	皿	東濃		島森遺跡	那珂	2トレンチ	未報告	椀	東濃	
水引塚遺跡	加美	W18住居跡No340	未報告	輪皿	東濃		宮ヶ谷戸遺跡	那珂	2トレンチ	未報告	皿	東濃	
水引塚遺跡	加美	No2163	未報告	椀	東濃		宮下遺跡	那珂	6号住居跡覆土	未報告	長頸瓶	東濃	
田中西遺跡2次	加美	表採	未報告	皿	東濃		宮下遺跡	那珂	7号住居跡	未報告	広頸瓶	東濃	
田中西遺跡2次	加美	K9住居跡No224	未報告	段皿	東濃		上耕地遺跡	那珂	2号住居跡	未報告	皿	東濃	
田中西遺跡2次	加美	K9住居跡No236	未報告	椀	東濃		上耕地遺跡	那珂	グリッド	未報告	椀	東濃	
日月遺跡	加美	Ⅰ4住居跡	未報告	段皿	東濃		石神遺跡	那珂	44号住居跡	未報告	椀	東濃	
金佐奈遺跡B地点	児玉	2・35号住居跡	未報告	皿	東濃		石神古墳	那珂	44号住居跡	未報告	椀	東濃	
金佐奈遺跡B地点	児玉	86号住居跡	未報告	皿	東濃		滝ノ沢遺跡	那珂	1号溝	219図3	皿	東濃	
金佐奈遺跡B地点	児玉	L－11	未報告	段皿	東濃		樋の上遺跡	幡羅	61号住居跡	36図　61号住居跡－2	輪花付皿	東濃	
金佐奈遺跡B地点	児玉	66号溝	未報告	椀	東濃		樋の上遺跡	幡羅	62号住居跡	36図－62号住居跡－1	椀	東濃	
金佐奈遺跡B地点	児玉	84号住居跡	未報告	椀	東濃								
金佐奈遺跡B地点	児玉	Q－15	未報告	椀	東濃		北島遺跡第14地点	大里	1号溝跡	232図132	皿	東濃	
十二天遺跡	児玉	グリッド	非掲載	段皿	東濃		北島遺跡第14地点	大里	1号溝跡	232図133	皿	東濃	
大久保山遺跡Ⅲ	児玉	A2遺構区22号溝	122図11	椀	未見		北島遺跡第16地点	大里	16号溝跡	416図1	皿	未見	
大久保山遺跡Ⅲ	児玉	A2遺構区22号溝	122図12	皿	未見		北島遺跡第16地点	大里	16号溝跡	416図2	皿	未見	
大久保山遺跡Ⅲ	児玉	A2遺構区22号溝	122図13	皿	未見		ささら遺跡	足立	竪穴状遺構	22図20	椀	東濃	
雷電下遺跡	児玉	3号土壙	120図4	皿	未見		ささら遺跡	足立	竪穴状遺構	22図21	椀	東濃	

情勢の展開や国評（郡）制の整備とともに急速に充実した。そして情報は、都城から放射状に延びた駅路と、郡と郡を結ぶ伝路で発信され、地方の末端へ到達した。

ことに東山道と東海道は、厩牧令の諸道置駅条で「中路」と規定され、駅使往来の重点的交通路であった。なかでも武蔵国にかかる駅路は、東海道と東山道の所管を巡り四遷したとされる。流通経路を探る意味でも、東海道駅路の四遷を概括しておく。まず令制東海道の原型は、相模の大住から三浦半島を経て、東京湾を横断し富津から上総、そして東京湾東岸を北上し下総、印旛沼から常陸へと貫かれていたとされる。その後、駅伝制の東海道は、東京湾西岸を相模・武蔵・下総・常陸へと向かう経路となる。

『続日本紀』神護景雲2（769）年3月条では、下総国に井上・浮島・川曲の3駅、武蔵国に乗瀦・豊島の2駅が、東海道の駅としてみられ、この駅路は、宝亀2（771）年の武蔵国の東山道から東海道への所管変更まで続く。それまで東山道は、上野国の新田郡から邑楽郡（から五箇駅）を経て、武蔵国（国府）に至り、再び同路を下野国足利郡へ向かう経路（武蔵路）であった。

東山道から東海道への所管変更は、東山道駅使の往来が、征夷事業推進のため煩雑化したためとされる。その結果、東海道は、相模国夷参駅（神奈川県座間市付近）から4駅で下総国（国府）へ至る経路となり、東山道武蔵路は廃止された。そして『延喜式』になると、相模国浜田駅－武蔵国店屋駅－小高駅－大井駅－豊島駅－下総国井上駅となる。

さて武蔵国にあまねく施釉陶器の広がる平安時代前期には、相模国夷参駅－店屋駅－武蔵国府－乗瀦駅－豊島駅－井上駅－下総国府か、相模国夷参駅－店屋駅（－武蔵国府）－小高駅－大井駅－豊島駅－井上駅－下総国府の経路が、東海道の経路として整備されていた。無論、武蔵路も全く停廃したわけではない（註13）。

また武蔵国内の交通路（伝路）を知る手がかりとして、『延喜式』（民部式上）の郷名記載順序がある。武蔵国条には、「久良－都筑－多摩（国府）－橘樹－荏原－豊島－足立－新座－入間－高麗－比企－横見－埼玉－大里－男衾－幡羅－榛沢－那珂－児玉－賀美－秩父」とある。『延喜式』の記

載順序は、必ずしも一筆書きで武蔵国内を一巡することはできず、いくつかの郡で枝道を想定することで、経路を想定できる。すなわち①久良－都筑－多摩（国府）、②橘樹－荏原－豊島－足立、③新座－入間－高麗－比企－横見－埼玉、④大里－男衾、⑤幡羅－榛沢－那珂－児玉－加美、⑥秩父に分解し、①から⑥のグループの最後から二つ目と、①から⑥の先頭を対応させると、この枝道は、都筑－橘樹、ｂ豊島－新座、ｃ横見－大里、ｄ大里－幡羅、ｅ男衾－那珂、ｆ男衾－秩父という経路（枝路）が想定できる。

さらに大里と埼玉を逆転させると幹線は、久良－都筑－橘樹－荏原－豊島－新座－入間－高麗－比企－横見－大里－埼玉－幡羅－榛沢－那珂－児玉－加美という経路が想定でき、枝路としてア都筑－多摩（国府）－橘樹、イ豊島－足立－新座、ウ比企－男衾－秩父という伝路が想定できる。

ここで『延喜式』から伝路の復元を行ったのは、行政的な情報や文物が、９世紀後半から10世紀にかけては、武蔵国の南から北へ向かって発信していたことを確認するためである。当然、施釉陶器が、伝路を経由し流通したというのではない。

一方で武蔵国の北から南に向かっては、各郡から税の運搬や雑徭などで、国府へ人民や物資が向かった。初期庄園が新たな展開を迎え、奈良時代的な税制も転換期を迎えた。しかし毎年、調庸や中男作物などは、国府を経由し、庄園からの負担も調庸同様、平安京へ運京されていた。彼らが任務終了後、京や国府から郷里へ再び戻ることで国府の情報や、国府へ集積された物資が、国府市を通じ売買され、各集落に分散したことは、充分考えられる。施釉陶器は、その一つであった。

(2) 上野国と武蔵国の灰釉陶器

このように武蔵国にみられる情報伝達の双方向性（東山・東海道経路）を踏まえ、武蔵国北部の流通に直接かかる上野国の状況について、ここで確認しておくこととする。そこで上野国と武蔵国北部の遺跡について、半世紀ごとに灰釉陶器の出土量の推移が追えるように第８～12図を作成した。同図では、９世紀から11世紀にかけて各遺跡からの出土量を円の大きさで表現し、左下に上野・武蔵国各郡の郷別出土数を『和名類聚抄』記載郡から得られた数値を棒グラフで示した。なお上野国出土の灰釉陶器については、武蔵国北部のような細かな観察を経ていないので、概括的であるが、若干まとめておきたい。

９世紀前半の灰釉陶器は、上野国でもやはり国府・郡家や寺院など地域の中核的施設で確認できるが、一般集落への浸透はみられない。上野国の報告数は、武蔵国北部（埼玉県）の163点に対して、159点と意外と少ない。

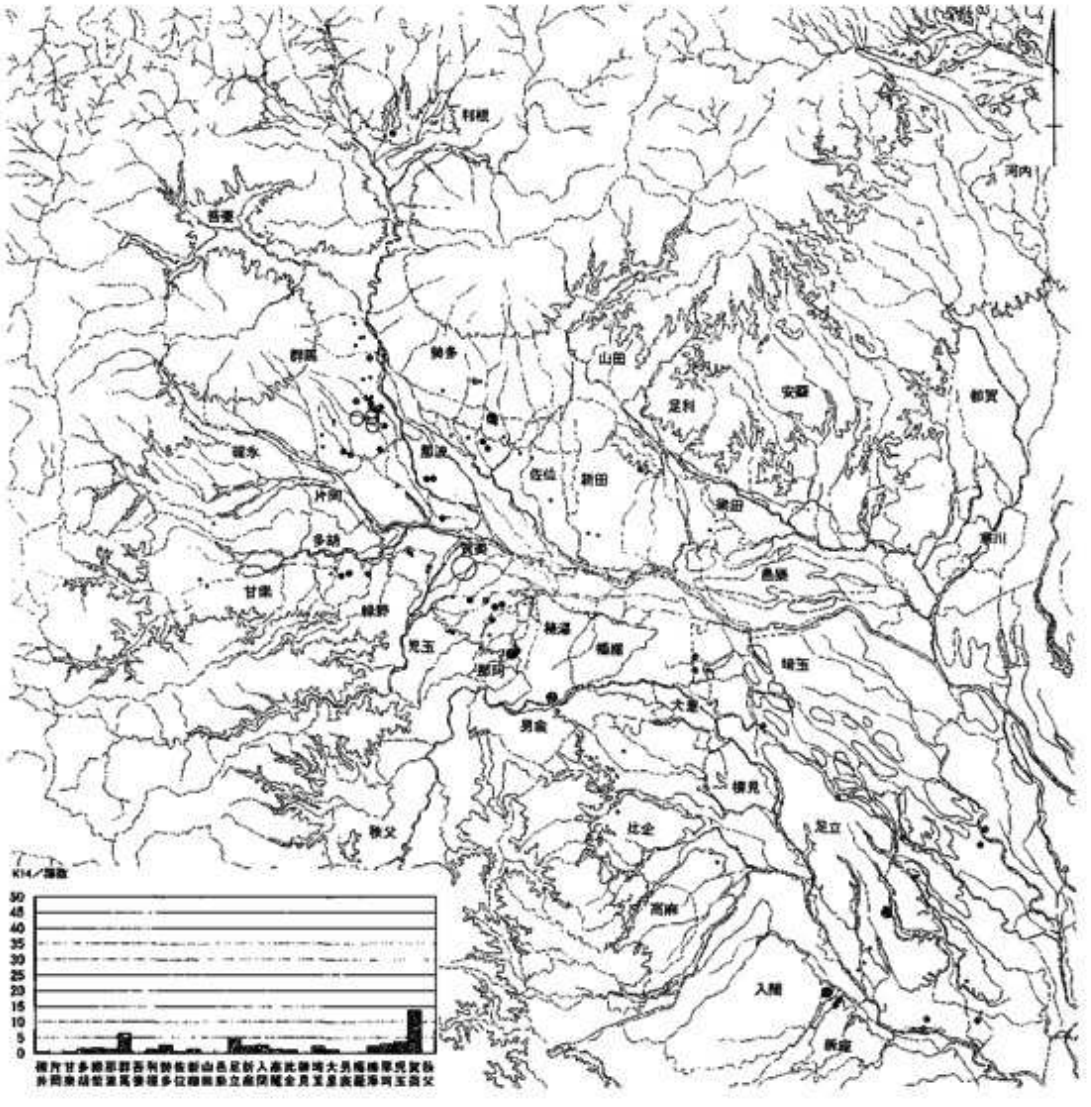
具体的には、上野国府に近い前橋市鳥羽遺跡（15点）や上野国分寺に近い群馬町西三社免遺跡（11点）・国分境遺跡（４点）、上野国分寺僧寺・尼寺中間地域（11点）などでまとまった出土が伺える。また勢多郡家の館や関連寺院とされる上西原遺跡（８点）、群馬郡八木院に近い融通寺遺跡（４点）、基壇建物の発見された藤岡市株木遺跡（３点）などの官衙や寺院関連遺跡の他、地方豪族の家と考えられる堀越中道遺跡（３点）太田市成塚工業団地（５点）で確認され、官の流通システム以外の流通経路で蓄えられ、消費された施釉陶器の存在を示していよう。

９世紀後半になると東濃諸窯の開窯によって生産量が増し、また上野国でも需要者が、広範に拡

大した。9世紀前半の実に7.6倍にあたる1174点が、報告されている。とくに上野国府や国分寺の周辺では、発掘調査の件数も多いが、灰釉陶器の大量消費がみられる。群馬郡では、上野国の約半数である650点が報告され、一郷あたり50点を数えた。

勢多・佐位・新田郡などの東毛地域の出土量は、一郷あたりの出土量（9～15点）が、碓氷・片岡・甘楽・多胡・緑埜郡の西毛地域（4点前後）より1.5倍多い。仮に灰釉陶器の需要者が、等質な経済条件であれば、消費量が同心円状に減少するはずで、生産地に近い西毛地域の消費量が、高い数値を示すはずである。しかも北毛地域の利根郡では、西毛地域の2倍強の数値を示す。

この消費傾向は、群馬郡内に大きなトランス効果を生み出す流通媒体、すなわち「国府市」の存

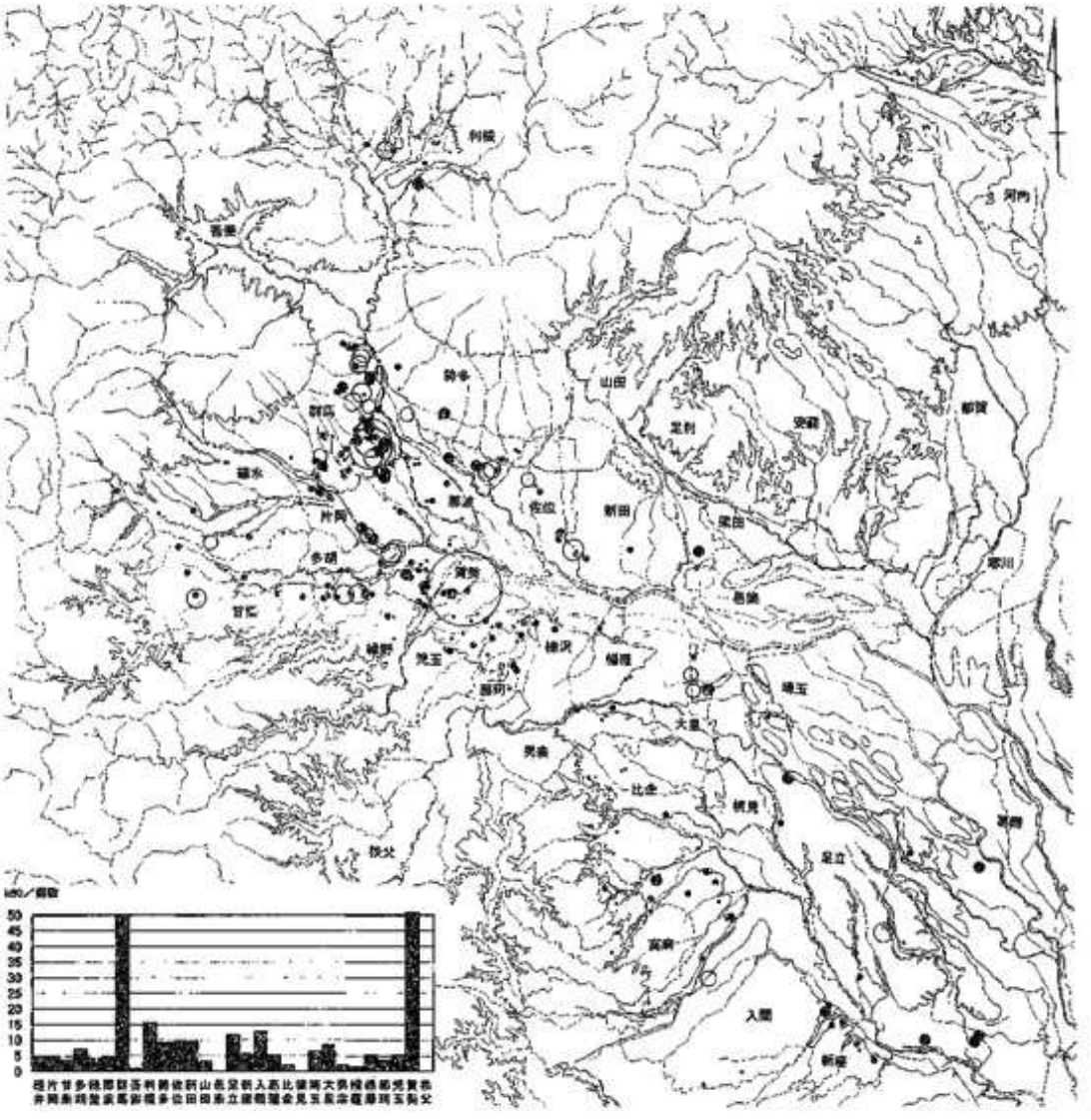


第8図　上野国・武蔵国北部の灰釉陶器出土遺跡と一郷あたりの郡別出土量（9世紀前半）

在を抜きにして、語ることはできない。つまり灰釉陶器が、上野国府・郡家や国分寺などの官衙・寺院や地方貴紳のみの需要に止まらず、「国府市」を再発信地として、集落に住む民衆の一部の需要も満たしていたのである。

武蔵国北部の児玉地域も同様である。豊富な灰釉陶器の消費は、東濃産製品の直線的搬入や、武蔵国府で獲得するよりも、これまでの在地社会の交通（地域的交易圏）を通じて、上野国府市や地方市で購入したと考えるのが、至極当然であろう。

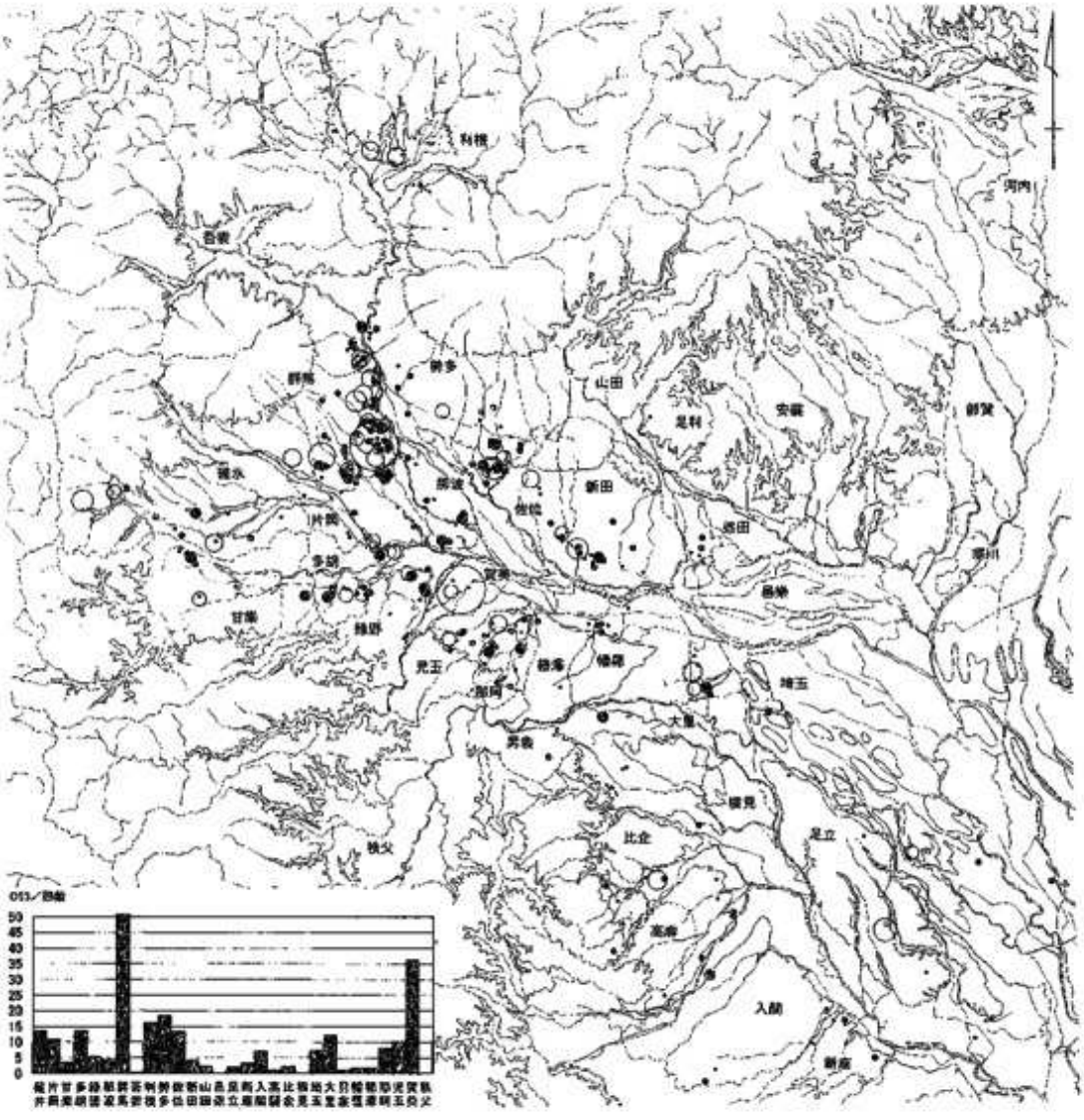
ちなみに第13図から地方市を推定すると、上野国では、片岡郡若田郷（註14）、片岡郡佐没郷（註15）、武蔵国では、幡羅郡荏原郷（註16）、大里郡市田郷（註17）などである。内陸河川交通と



第９図　上野国・武蔵国北部の灰釉陶器出土遺跡と一郷あたりの郡別出土量（９世紀後半）

陸上交通の交点となるこれらの地域は、周辺に灰釉陶器の豊富な消費地を抱え、また近隣には、寺院や郡家推定地がみられる。

さらに10世紀前半になると、上野国の灰釉陶器消費量は、ピークを迎え、報告数1907点、9世紀後半の1.6倍となる。武蔵国北部のピークが、9世紀後半であったことと比較すると、上野国が、後発的であったからではない。東濃諸窯の開窯の後発性に加え、おそらく上野国から品質の高い東濃産製品が、坂東諸国へ発信されると、こぞって坂東各地で東濃産製品を吸引し、需要を高めた結果、再発信源となった上野国の消費が上昇したのであろう。相対的に三河・遠江産の製品は、坂東の内陸部では、圧迫された。



第10図　上野国・武蔵国北部の灰釉陶器出土遺跡と一郷あたりの郡別出土量（10世紀前半）

しかし灰釉陶器の生産は、本来的には、在地の需要に支えられており、東国への供給量には限りがあった。東国の在地の土器生産を脅かすほど、無制限に消費量は、拡大しなかったのである。また上野国府市のトランス効果は、市から半径30～40kmが限界で、これを超えると、東濃産製品の消費量は、急速に減少した。この点、品質のやや落ちる三河・遠江産製品が、南関東や常陸国などの東海道諸国で広範に消費されたのである。三河・遠江産製品が、猿投産製品や東濃産製品の補完的な役割を果たし、陸奥に及ぶ広範な需要（註19）を獲得したのは、河川や海上を水上輸送し、津と津を連絡し、飛び石的に販路を拡大したためである。

いずれにせよ上野国の豊富な消費量は、まさに武蔵国児玉地域を含めた上野国の高い経済力を物語っており、ここに平将門が、上野国を目指した一端がみられよう。

上野国内では、やはり上野国府や国分寺周辺に大量の消費がみられ、国府所在郡の群馬郡は、上野国内の約6割にあたる1151点、一郷あたり実に88点が報告されている。一方、東毛地域の勢多・佐位郡では、18・13点と9世紀後半の2倍前後となるが、新田郡では、4点と半数に減少する。西毛地域の多胡・片岡・碓氷郡では、2～3倍（10～13点）になるが、甘楽・緑埜・那波郡は、4点前後と停滞する。さらに北毛地域の利根郡も東毛地域同様、16点と高い数値である。

このように個別の郡単位の変動があるが、増減幅は僅かであった。第10図と消費変動数から①上信国境である碓氷峠から上野国府市に向かうルート、②上野国府から利根郡を経て越後・出羽・陸奥へ向かうルート、③上野国府から児玉地域を経て武蔵国府へ向かうルート、④上野国府から下野国府へ向かうルートが、消費の分布から推定できる。

①は、製品を上野国最大の交換の場である国府市に向かうルート上の分布である。②は、国府所在郡である榛名山麓や勅旨牧（御牧）を抱える利根・吾妻郡で中山間地の開発にかかる集落に分布し、越後・出羽・陸奥国へ向かう。③・④は、上野国府から再び一大消費地の武蔵・下野国府を目指したルート上の分布である。

①のルート上、信濃国から碓氷峠を越えた直後の松井田町暮井遺跡と仁田遺跡は、灰釉陶器の流通を知る上で重要な遺跡である。とくに仁田遺跡は、山間に僅か3軒で営まれた小規模な集落ながら、灰釉陶器片95点が出土した遺跡である。両遺跡は、東山道の坂本駅に推定される松井田町原遺跡も近く、東山道のルート上にあり、灰釉陶器の輸送上拠点的な集落といえよう。

その後10世紀後半になると、1239点と10世紀前半の65％に消費量は落ち込む。しかし9世紀後半よりやや多い消費量である。郡別には、やはり群馬郡が圧倒的に多く、708点、一郷あたり54点と、他の追随を許さない。他郡では、やはり減少傾向にあり、とくに碓氷郡や利根郡の減少は大きく、半数以下となる。そのなかで多胡郡のみは、一郷あたり13点から16点へ上昇した。東毛地区の新田郡や山田郡では、減少傾向が甚だしい。勢多郡や佐位郡・片岡郡では、群馬郡の減少傾向とほぼ等しく、9世紀後半の6～7割に止まった。勢多・佐位・片岡・多胡郡そして武蔵国児玉地域など、群馬郡の上野国府を中心とした30～40km圏内では、やや豊富な出土がみられ、減少したとはいえ、安定的な供給がみられる。

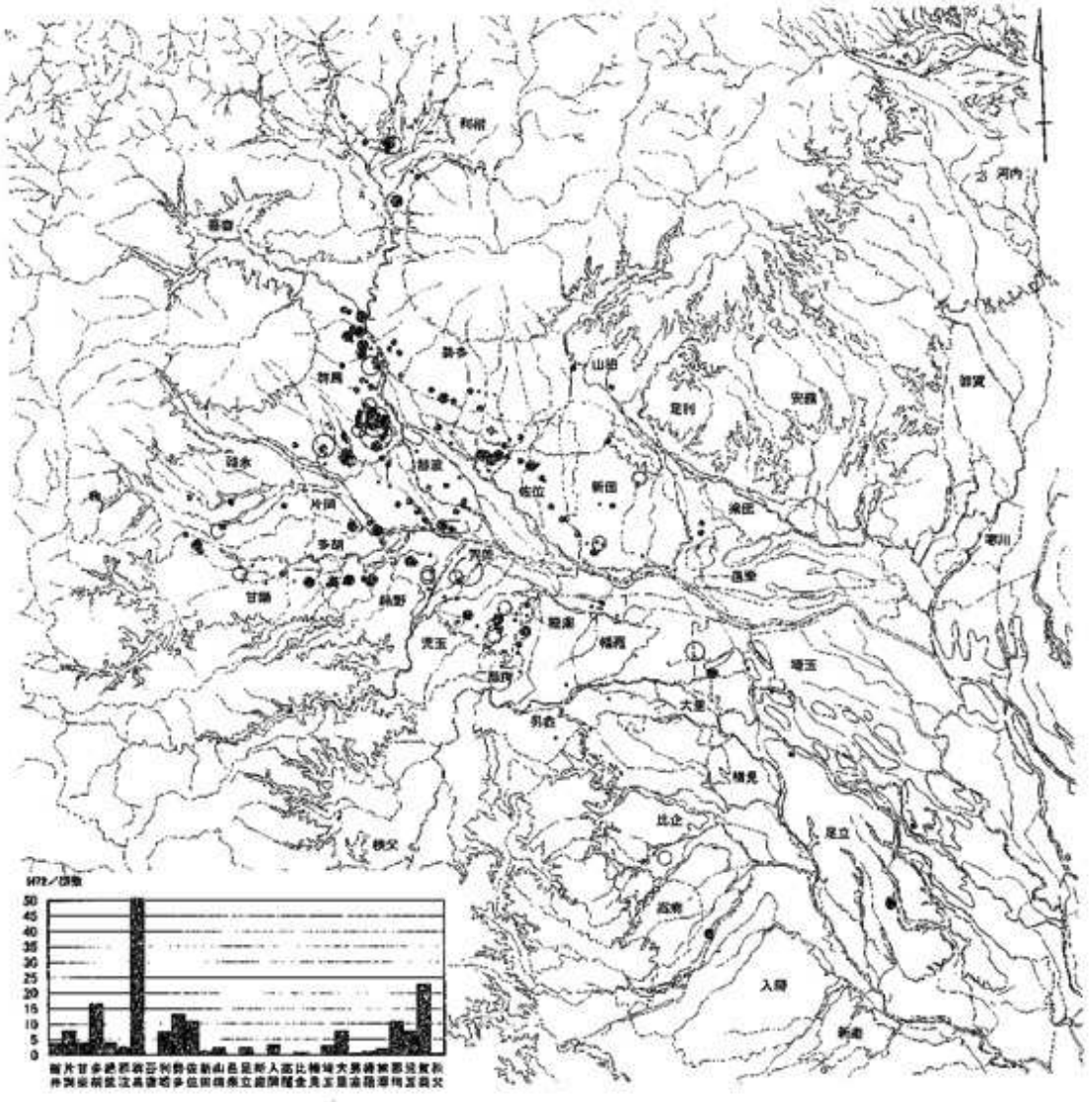
さらに11世紀には、報告数が408点と、10世紀後半の3分の1となる。群馬郡は、やはり239点と半数以上を占める。この段階、集落跡の確認数が、極端に減少するため灰釉陶器の報告数も減少し

たといえよう。しかし竪穴住居跡一軒あたりの灰釉陶器の保有率は、さらに増加したと考えられる。

群馬郡以外では、片岡郡が目立つ。これは高崎市豊岡後原Ⅰ・Ⅱ遺跡が、消費を牽引したためである。10世紀後半同様、多胡・勢多郡は、やや高い数値だが、他郡は一郷あたり1点前後と極端に少なくなる。これは武蔵国の児玉地域も共通する。

以上、上野国の消費動向を通じて、武蔵国北部への流通を考えた。まとめると、

①9世紀前半の灰釉陶器の消費は、国府や国分寺、郡家や地方寺院・地方豪族の家など限られた需要層に限定された。これらは、奈良時代に東国へもたらされた三彩陶器や金属器などと同様の獲得方法（流通経路）で入手され、その延長線上にあった。



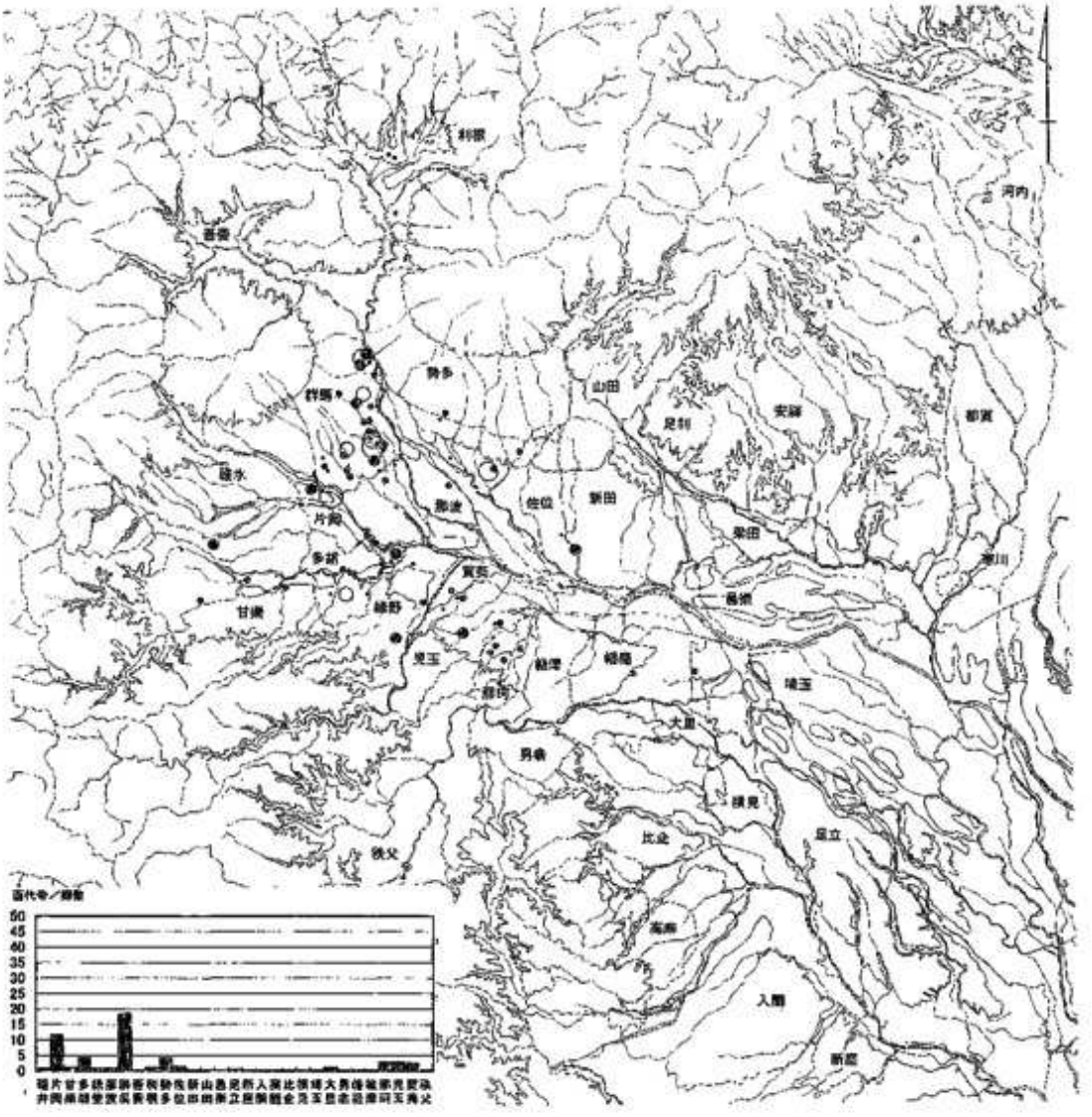
第11図　上野国・武蔵国北部の灰釉陶器出土遺跡と一郷あたりの郡別出土量（10世紀後半）

②９世紀後半以降は、上野国府・国分寺所在郡である群馬郡に消費の中心が形成された。

③経済的に豊かな集落や官衙関連施設などは、やはり主要な消費地であったが、一般集落へも浸透度が増していく。上野国府市は、４つの流通経路の拠点として、上野国はともかく、坂東諸国の流通の結節点として重要な役割を担っていた。

④灰釉陶器の消費のピークは、上野国では10世紀前半、武蔵国北部では９世紀後半であり、上野国は東濃産、武蔵国北部は三河・遠江産の灰釉陶器が、消費の主体であった。

次に関東地方の歴史的展開と施釉陶器の消費の特質について、開発史を中心に検討を加えていくこととする。



第12図　上野国・武蔵国北部の灰釉陶器出土遺跡と一郷あたりの郡別出土量（11世紀）

(3) 勅旨田・王臣家庄園と9世紀後半の流通

延暦24（805）年、桓武天皇が、藤原緒継と菅野真道に施策方針を立てさせ（徳政相論）、緒継の建議「方今天下の苦しむところは、軍事と造作なり」を受け入れ、征夷事業が収束に向かう。そして宝亀5（774）年以来、38年に及ぶ征夷事業も文室綿麻呂が、陸奥国の爾薩体・閉伊へ進み安定化が図られると、前線は、紫波城から徳丹城へ後退した。続く平城天皇は、諸道観察使や国司を発遣し、彼らが坂東諸国の弊亡を伝えると、官司の統廃合や雑戸の解放など、財政の建て直しが図られることとなる。

これらの施策は、欠乏する国庫の支出を緊縮させたが、藤原薬子の変を経て嵯峨・淳和・仁明天皇へと政権が移動すると、天皇家や親王・皇女家あるいは後院が、次第に膨張し、永年の蓄えを脅かすこととなった。そこでまず天長3（826）年、親王が、大国である上総・常陸・上野国へ太守（国守）として任命される親王任国制が始まり、続いて天長・承和を中心に親王任国以外の坂東諸国（武蔵・下野・上総・相模）へ勅旨田や後院勅旨田が設置された。

武蔵国の場合は、天長6（826）年12月に淳和院（西院）の後院勅旨田として、空閑地290町が充てられ、翌天長7（827）年2月には、空閑地220町へ正税一万束が開発料として充てられた。さらに承和元年2月には、幡羅郡の荒廃田123町が、冷然院の後院勅旨田とされ、承和8年2月8日条には、田507町が、嵯峨院に充てられた。また長和4年3月4日の上野国移によると、勅旨所の正倉である穀倉院の所領として武蔵国藤崎庄がみられる。

勅旨田は、それまで「公私共利」の地や「三年不耕」の地であった空閑地や荒廃田などへ、新たに財政の投下を行い、正税利稲で後院や親王家などの経済を再生させようとした政策である。設置国の占定には、当該国の国司や議政官の意見が、当然大きく反映された。ちなみに天長6・7年の武蔵国守は石川河主、承和元年は文室秋津（兼参議）（註20）であった。

さらに天長6年には、大同2（802）年に武蔵守であった藤原真夏が前参議として、天長7年には、やはり藤原真夏が前参議、文室秋津が参議兼武蔵守として武蔵国への勅旨田選定の審議を行ったこととなる。

そして坂東復興計画の第二弾として参議文室秋津は、承和2（835）年、東海道の主要渡河点に浮橋・渡船・布施屋を増設する太政官符「応造浮橋布施屋並置渡船事」（『類聚三代格』）を打ち出した。浮橋は、駿河国の富士河と相模国の鮎河に設置され、渡船は、尾張・美濃国の境を流れる墨俣川（長良川）に4艘（元2艘）、尾張国草津渡（矢田川）に3艘（元1艘）、三河国矢作河に4艘（元2艘）、同国飽海河（豊川）に4艘（元2艘）、遠江・駿河国の境の大井河に4艘（元2艘）、駿河国阿倍河に3艘（元1艘）、下総国太日河（江戸川か）に4艘（元2艘）、武蔵国岩瀬河（多摩川か古利根川）に3艘（元1艘）、武蔵・下総国の境の住田河（隅田川）に4艘（元2艘）が置かれ、そして墨俣河の両岸に布施屋が置かれたのである。

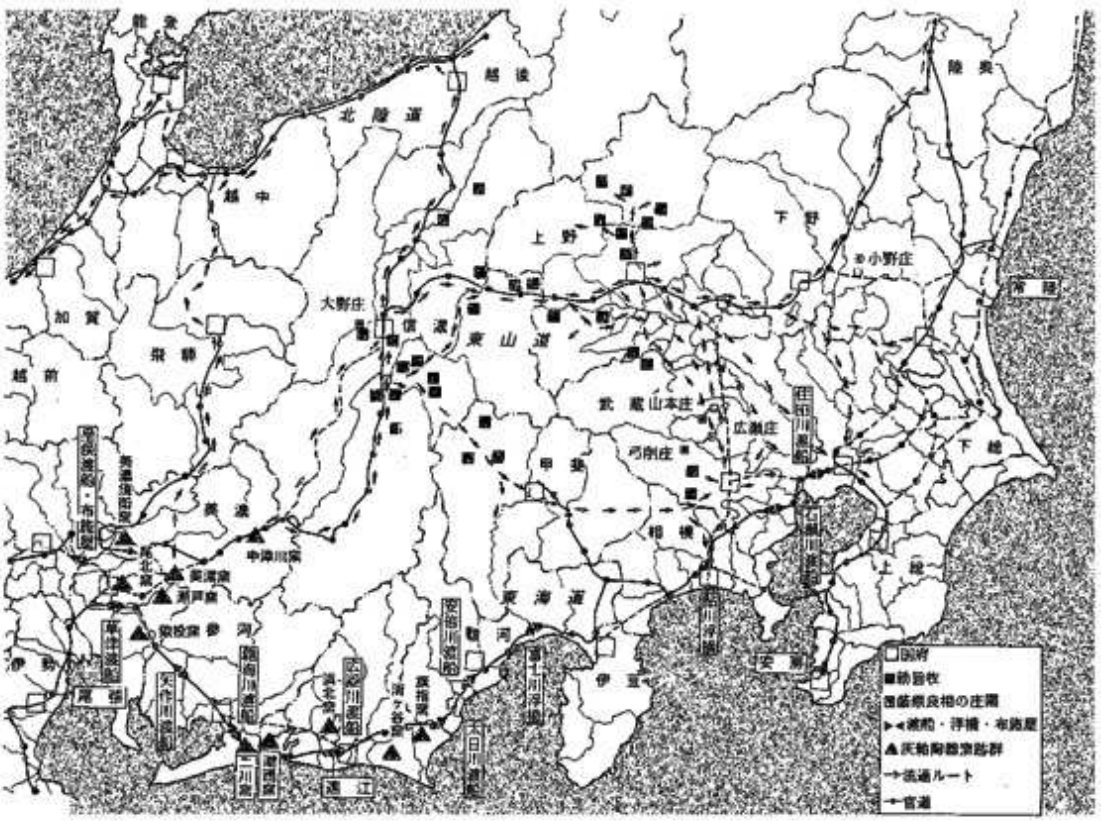
同官符は、「賃調担夫」が、天候不順で渡船を長く日待ちし、しばしば「闘乱」となり官物を流失させたことを防止することが目的であった。しかし国家や都市に集住した庄園領主にとっては、勅旨田や初期庄園からの税や年貢が、安定的に確保できることを図ったに過ぎない。ただこの施策によって、かつて征夷事業で情報伝達と軍事行動の安定性から重視された東山道に替わって、東海

道が、物資移動の重要な交通路線として、機能していく契機となったといえよう。

渡船の倍増や浮橋の設置による負担軽減は、往路で調・庸や年貢、あるいは特産物など軽物を運京し、納品終了後に余剰品は、交換され、復路で東海道の諸国府市や渡河点・津など諸国産物と交換され、本貫へ持ち帰える機会を増幅させたと考えられる。9世紀中葉から後半（黒笹90号窯式期）にかけて、三河国二川窯跡群産や遠江国宮口窯跡群産の灰釉陶器が、武蔵国の北半の小集落まで急速に普及した現象は、勅旨田設置と承和2年の交通施策の賜といえようか。

運京に携わった者は、路辺で倒れる者（『日本書紀』大化2年条）ばかりが強調されるが、在京事務所を都城に設け、一定の経済活動を行っていた綱丁がいたこと（『類聚三代格』）を考慮すると、予想以上に東海道は、流通の動脈という機能ばかりではなく、東海道の通過諸国の手工業製品を坂東・陸奥へ送り出す圧力装置の役割を備えていたのである。

さらに都城から東国へ下ったのは、調庸担夫や彼らを率いた綱領・綱丁ばかりではない。国司やその随伴者をはじめ、勅旨田や王臣家庄園の管理者（王臣佃使）が、都城や下向途中の諸国で入手した文物を東国へもたらした可能性は高い。尾張守藤原元命は、「受領は倒るる所に土をつかむ」と、任期中に蓄えた莫大な文物を京の私邸へ運んだことが強調される。しかし受領が、京から地方への赴任にあたって、国家や王臣の代弁者として、様々な物資を東国へもたらしたことも予測され



第13図　灰釉陶器の生産地と東国への流通経路

る。そのひとつに施釉陶器があったと考えたい。

これが、三河国二川窯跡群や遠江国宮口窯跡群の製品が、急速に武蔵国に普及した原動力といえよう。ただし一集落から出土する二・三点の灰釉陶器は、運京の復路で購入したことで説明できても、灰釉陶器を大量に消費した遺跡や、生産地から陸奥へ同心円状に消費量が減少していく傾向、微視的には、埼玉県の南部から北部へ消費量が減少する傾向は、説明し難い。

こうした分布の現象は、中心的（吸収的）消費地か、交易の中心である「市」を抜きには考えられない。9世紀後半の国府を除くと、地方の中心的消費地は、例えば勅旨田や王臣家庄園・寺社庄園など経済的に保証された遺跡である。これら特権的な経営体が、様々な物資を吸収し、ここを起点に文物を周辺の集落へ分配されたと考えられる。周辺の集落は、労働力の主体的供給源であったからである。

また「市」は、国内物流の結節点として、幹線道路の交差点や渡河点、港や津、あるいは国府などに成立し、とくに国府市・国府津は、調庸や年貢などが集積され、周辺国の手工業製品・穀物などが、交換された最大の市場で税品目の調整機能をもっていた。さらに市は、流通のトランス機能をもち、市から再び消費量が同心円状に減少していく。今回、埼玉県の事例を検討したが、本来、国府や国府市のある東京都府中市の調査成果が、武蔵国内最大の消費地であり、武蔵国府市を経由し、武蔵国北部へ発信された灰釉陶器も多かったであろう。

これに継ぐ消費量が、上里町中堀遺跡である。詳細は、報告書に記したので参照して頂きたいが、黒笹90号窯式期の製品が、これほど大量に消費された遺跡は、これまで例がなかった。中堀遺跡は、勅旨田経営にかかる大規模な集落で、内部に寺院や庄所・厨家・管理棟・館などの建物群と、鉄生産や馬匹にかかる手工業部門、そして従属的な竪穴住居群が、ブロック別に編成されていた。

そこで消費された灰釉陶器は、黒笹90号窯式617点という数値そのものも驚異的であるが、その生産地も二川窯や宮口窯と三河・西遠江の製品が、消費の大半を占める。武蔵国最北西端という地理的条件を考えた場合、灰釉陶器が、東濃産よりも三河・西遠江産で構成されていたという事実に納得のいく説明が必要となる。それは、武蔵国北部が、前述のように伝統的に上野国南部の流通圏（地域的交易圏）にあり、灰釉陶器も東山道経由の東濃産製品が、主体的に消費された地域であったためである。

答えは、その経営形態にあった。勅旨田の経営は、天長7年の勅が伝えるように、武蔵国の正税一万束が充てられ進められた。このことは勅旨田が、後院の私有財産的性格をもつとはいえ、正税の支出は、国司の管掌を受け、経営の一端を国司が担うこととなる。そのため南武蔵にあった国府の官人は、頻繁に勅旨田を往来したと考えられる。灰釉陶器をはじめとした必要物資は、国府官人が、国衙や国府市を通じて、あるいは必要数を生産者（窯元）へ発注して購入し、直接、中堀遺跡へ搬入していたのであろう。

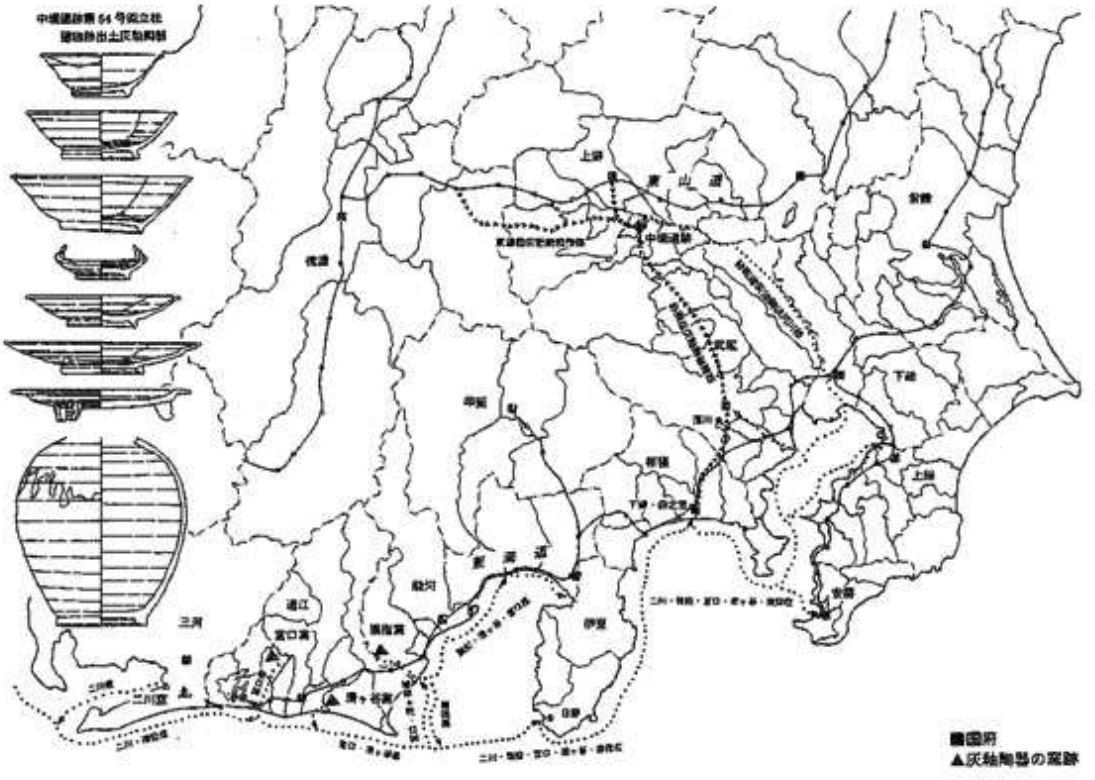
さらに中堀遺跡周辺の長幡部神社遺跡などで、やはり宮口・二川産の灰釉陶器がみられた事実は、中堀遺跡が、発信地となり、労働力の供給源となった周辺遺跡へ分配した可能性も考えておきたい。

ところで中堀遺跡（勅旨田）の経営は、空閑地あるいは荒廃田の開発という点で、在地の積極的な協力を抜いては考えられない。とくに承和7（840）年、武蔵国加美郡の人で散位であった檜前

舎人直由加麿が、京貫を得たことは、由加麿の京宅が、加美郡地域からの調庸や年貢を京で調整する在京事務所としての機能を持っていたからではなかろうか。由加麿が京貫を得た背景には、勅旨田経営の労働力を準備した手腕が、買われたからではなかろうか。

彼のような「富豪の輩」は、灌漑にみる土木工事や多額の出挙によって経済的にも長けた農業経営を基盤として成長し、9世紀後半には、勅旨田や王臣家荘園などの労働力を国郡を越えて提供していた。また都鄙間を積極的に往反した「富豪浪人」も国司に匹敵する影響力をもって、勅旨田や王臣家庄園の経営にかかった。彼らが美濃・尾張・三河・遠江・信濃・駿河などの東山・東海道中間地域の文物を坂東・陸奥にもたらした原動力となった可能性は高い。摂政藤原良房の弟、右大臣良相の庄園は、彼の没後に貞観寺へ施入されるが、東国では美濃・信濃・武蔵・下野の東山道諸国にみられ（第13図　参照）、良相の家産経済に遺存した庄園間の交通が、あるいは東濃産施釉陶器を東方へ押し出した原動力となっていた可能性もある。

そして9世紀後半代、都鄙間や諸国の文物を輸送していた馬匹集団が、昌泰2（899）年、武装輸送集団となり、官物を掠めたことで国家の問題となった。いわゆる儀馬の党の乱である。『類聚三代格』昌泰2（899）年9月19日格によると、儀馬の党は、山道の馬を掠め海道へ売り、海道の絹を山道へ売る集団で、東山・東海を自由に往来し、その文物を売買した。儀馬の党の蜂起による被害は、とくに信濃・上野・甲斐・武蔵が甚だしかったという。



第14図　埼玉県児玉郡上里町中堀遺跡への灰釉陶器の流通経路

奇しくも信馬の党が、往来したこの上武甲信地域は、まさに東濃産灰釉陶器の主力商圏であった。上野国碓氷峠・相模国足柄峠を国家権力から逃れるため往来したと格が示すように、信馬の党を始めとする馬匹集団は、東濃産灰釉陶器の流通に大きく貢献したといえよう。

東国では、瀬戸内海にみられる舟運ネットワークは、9世紀代では確立していなかった。それは坂東で消費された灰釉陶器には、大形の壺甕類のないように、大形の重量物を無傷で輸送する外洋航路や大形船舶が、恒常的にみられないからである。その成立は、渥美焼や常滑焼が陸奥北辺まで流通した中世以降を待たなければならなかった。

このように9世紀後半の流通は、調庸や年貢の輸送にかかる綱領・綱丁などが、国郡や都鄙往反にあたって、復路で入手したことを基本とする。しかし一方で坂東に設置された勅旨田や王臣家庄園の成長と、この経営にかかった富豪浪人の都鄙往反、さらに信馬の党にみる武装輸送請負集団等が、東海・東山道中間地帯の灰釉陶器をはじめとする文物を、大量に坂東・陸奥へ運んだ原動力となったのである。

(4) 10・11世紀の坂東と灰釉陶器

公私共利の地であった空閑地や荒廃田を対象とした勅旨田の開発は、地域の農民の再生産を妨げたが、延喜2（902）年、いわゆる延喜の荘園整理令によって政策の大転換が図られた。これ以降、新立の勅旨田は停止され、勅旨田の経営も請作方式となったのである。荘園整理令の流通に及ぼした影響は、中堀遺跡の灰釉陶器に現れる。

すなわち消費量の激減である。それは二川・浜北産灰釉陶器の消費が、急速に冷え込んだことである。前述のように中堀遺跡が、武蔵国府の積極的な支援を受け、南武蔵から直接、灰釉陶器を運び込んだとすれば、経営形態の転換が、その流通経路を閉ざし、また在地の田堵への請作へ転換したならば、田堵のかかる地域的交易圏からの獲得に限定されたのであろう。

三河・遠江産製品の後退は、武蔵国全域に及び、替わって東濃製品が、上野南部から北武蔵へ浸透していった。東濃産製品は、上野→下野→下総・常陸→陸奥、あるいは上野→武蔵→相模・下総→上総へと供給量が減る。一方、三河・遠江産製品は、相模→武蔵・下総・上総→常陸→陸奥へと供給量が減少する。ここで民間の輸送業者と駅路・伝路以外の交通路について、平将門の軍事行動から考えておきたい。

平将門の下総国猿島郡を中心としたネットワークは、将門を巡る一族の内紛に凝縮される。将門が、貞盛を信濃国千曲川に追った事件までは、下総と常陸・下野の一族の各拠点が、舞台でありこれを大きく逸脱しなかった。この軍事行動の範囲は、常陸国の新治窯跡群や下野国の益子窯跡群などの流通圏と一致する地域交易圏内で起きた矛盾といえる。この内紛が、そもそも単に将門を巡る一族のみではなく、「因縁」や「伴類・与力」などを巻き込んだ在地社会の矛盾が、原因だったのだから在地の流通圏と軍事行動圏が、一致するのは当然のことであろう。

しかし将門は、異なる地域的交易圏である武蔵国の紛争に干渉したことを契機として、常陸国府襲撃、下野国府・上野国府へと進撃し、自ら新皇と称する。将門進撃のこのコースは、東濃産の灰釉陶器が、上野国から常陸国へ向かう流通経路を逆走する。

将門にみる民間のネットワークは、下総国にありながら、下総国（府）よりも常陸国（府）や下野国（府）に開かれていたこと、武蔵国への干渉が示すように下総と武蔵は、本来別の在地のネットワーク上にありながらも、緩衝地帯では、双方の情報交換があったことである。

そのほか10世紀後半から11世紀にかけて、東国の流通で重視しておきたいのは、上武甲信の四国に設置された勅旨牧（御牧）・諸国牧である。この四ヶ国は、9世紀末に傾馬の党の乱を生むように、馬の飼育と山間の交通に長けた地域で、平安時代後期に盛んに貢馬を行なった。。いわゆる駒牽であるが、上武甲信国からは、毎年牧司をはじめとする牧の関係者が、京へ貢馬を輸送した。彼らが重要な流通媒体となって、通過諸国の商品を輸送していたことは充分予測される。

ことに牧と推定される遺跡が、10世紀後半に急速に成長し、11世紀を迎え、比較的豊富に灰釉陶器とくに東濃製品を消費するようになる。これは牧を核とした開発が展開し、牧の荘園化が進んだ結果と考えられる。

この傾向は、山間部の牧ばかりではない。9世紀代の集落が、再び解体し、自然堤防上に新展開した小規模集落へも灰釉陶器が浸透するようになるからである。但し11世紀代の遺跡は、調査数も少なく、不安定であるため、流通にかかる状況は極めて不透明といえよう。

まとめ

平安時代の東国では、様々な窯業製品が消費された。なかでも食器は、在地で生産され主体的に消費された土師器・須恵器、畿内や東海地方で生産された灰釉陶器・緑釉陶器などの施釉陶器が若干みられ、ごく僅かだが中国大陸で生産された陶磁器が数片加わり構成されていた。

土師器・須恵器は、消費地からほど遠くないところで生産され、出土土器の9割以上を占めていた。そのため一般的に土師器・須恵器は、在地の流通を映し出したとされる。また奢侈性の高い緑釉陶器や在地の土器よりも品質の良い灰釉陶器の東国における出土は、生産地である東海地方や唯一の都市消費地である平安京と東国の各消費地との隔地間交流を反映し、さらに東国からの初期貿易陶磁器の出土は、平安京の特定消費者と出土遺跡の特殊な関連性、例えば官衙や庄園などを通じた交流を反映するとされる。

だが、たとえ在地の製品でも、単純に生産地から消費地へと、直接製品が移動した場合は少なく、何らかの媒体を通じて大地へ遺物として埋もれていく。その過程は複雑で、生産地から消費地への移動を“流通”と表現しても、国府や寺院、あるいは地方豪族などの社会的特権、津や泊あるいは市など交通路、そして隣接集落間のネットワークなど流通にかかる因子は多い。

本稿では、東国古代社会の特質を灰釉陶器の古代的流通を通じて明らかにすることを以下の展開で試みた。まず税物の運京と東海地方西部の広域流通品の獲得といった古代的流通について、都鄙間交通の特色から明らかにした。それは、灰釉陶器の東国への普及（流通）の歴史的意義を位置づけるためであった。

そこで東山道と東海道の交差する武蔵国北部について、各遺跡から出土した灰釉陶器を可能な限り実見し、器形の特色や施釉の手法、焼成の特長、生産地の推定を行った。そして半世紀ごとに各遺跡の出土傾向を抽出し、郡別の産地別構成を明らかにした。

この消費傾向の変遷を理解するために、これまでの研究成果に基づき、武蔵国の駅路と伝路の変遷を明らかにした。それは、相模・上野国双方から流通経路が、開かれていたことを情報の伝達経路からも確認したかったためである。

そこで武蔵国北部の流通の解明には、上野国で灰釉陶器が、どのような流通の実態がみられるか、とくに上野国府や国分寺を抱える国府所在郡である群馬郡の実態はどうなのか、これが必要不可欠の課題となったのである。そこで報告事例に基づき、半世紀ごとに上野・武蔵国北部の各遺跡からの出土量を分布図に示し検討を加えた。

以上の結果を踏まえ、最後に平安時代の東国開発史や交通施策の転換が、灰釉陶器の流通に及ぼした影響について、とくに埼玉県上里町の中堀遺跡の分析を通じて考察した。細かな内容は、本文を参照いただくとして、消費動向を結論のみ上げてまとめとしたい。

①、古代の広域流通品（遠距離交易品）の獲得には、税物の京進、国司や但使の都鄙往反などの遠距離移動者が、流通媒体となっていた可能性が高い。中世の山茶碗で想定されている振り売り（註21）のような生産者や中間流通業者（商人）による行商的流通は、確認できない。

②、9世紀前半、武蔵北部や上野でも灰釉陶器は、国府や国分寺、郡家や地方豪族の家・寺院などのごく限られた遺跡で消費され、集落への一般的な導入はみられない。

③、9世紀後半に入ると、国府市をかかえる郡が、最大の消費地として成長し、大規模な開発を担う遺跡や経済的に富裕な遺跡が、各地の拠点的な消費地となった。各集落遺跡にも灰釉陶器が、まま散見されるようになる。なかでも中堀遺跡は、武蔵国の最北西部に位置しながら、東海道系の灰釉陶器を消費し、特殊な消費傾向を示した。

④、灰釉陶器の消費のピークは、上野国で10世紀前半、武蔵国北部で9世紀後半であった。この傾向は、生産地側の動向と主要流通ルートの転換や、国家の交通施策、上武両国の経済的体力の増減に左右されていた。

⑤、古代末には、集落の大半で灰釉陶器がみられるようになるが、遺跡そのものが不鮮明になるにつれて、灰釉陶器も同じ運命をたどる。

武蔵国北部の遺跡から出土した灰釉陶器をもって、平安時代の流通史を考える材料とした。個別の遺跡や竪穴住居跡で、どのような消費が実質的に行われていたのか。具体的な検証が、本稿では行うことができなかった。また緑釉陶器の消費との関係についても、論証することはできなかった（註22）。さらに武蔵国南部や相模国の消費実態、あるいは消費量の減少する安房・上総・下総・常陸・下野・陸奥について、半世紀ごとにどのように変化するのか、残された課題は多い。

なお本稿は、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団、平成11年度研究助成の成果の一部である。

最後となりましたが、本稿にあたってお世話になった方々について、御芳名を記し、お礼に替えさせていただきます。とくに資料調査にあたっては、大変御迷惑をおかけしました。

浅野晴樹・浅野信英・天ヶ嶋岳・石岡憲雄・石川久明・石塚和則・磯野治司・今井正文・江原昌俊・大塚孝司・岡田賢治・岡本幸男・尾形則敏・小倉　均・加藤恭朗・金古正之・黒済和彦・肥沼正和・小島清一・小林　高・小渕良樹・加藤　晃・加藤秀之・栗岡眞理子・斎藤国夫・笹森紀己子・笹森健一・佐藤忠雄・寺社下博・鈴木一郎・鈴木徳雄・外尾常人・高橋好信・寺内正明・照林

敏郎・利根川章彦・鳥羽政之・長岡聡司・中沢良一・中島洋一・中野達也・中平　薫・並木　隆・根本　靖・野沢　均・早坂廣人・平岩俊哉・平田重之・宮　昌之・宮本直樹・村松　篤・保田義治・横川貴男・吉田健司・吉田義和・吉野　健・渡辺　一

註

註1　税の逃京の責任者である調丁は、郡司や在地の有力者があたったらしく、彼らはまた奢銭を貢納し、叙位を受ける経済的に裕福な者達であった。

註2　この記載順序は、延喜式民部省条の記載順序にほぼ等しく、令制下の情報伝達方向とほぼ等しくなることは、後に述べる都鄙往反をする人との関連で興味深い。なお北陸地方は、美濃からの製品が、近江・飛騨・信濃を経由し、第13図に見るような流通経路をたどったことが予測される。

註3　例えば東国出身の者が、調の逃京で平城京へ赴き、東西市で二彩小壺を購入し、郷里の我が家で大切に保管していたとしよう。市で商品を購入するまでは、経済的活動であるから流通といえようが、これを土産として保管するだけでは、商品価値が上昇したことにはならず、ただ物を移動させただけに過ぎない。経済的効果が増したわけではないからである。しかしこれが国家の珍宝で所有者が、社会的権威を補強する物品であったり、内外価格差から経済的効果が発生し、潜在的に転売（所有権の移転）の可能性が出たときには、流通と呼ぶことができる。

註4　埼玉県は、武蔵国の北半を占め『倭名類聚鈔』では、十五の郡がみられる。山間部の秩父郡、丘陵・台地の入り組む児玉・那珂・男衾・比企・入間・高麗・新羅・横見・足立郡、河川と自然堤防で構成される榛沢・幡羅・大里・埼玉郡が、明確な地形的変化のない関東平野の中に編成されていた。郡域（郡境）は明示できないが、便宜的に『国史大辞典』の「武蔵国」に掲載された郡域を参照し、施釉陶器を出土した遺跡を各郡に割り振り検討した。

なお「○○領域」は、7世紀の評編成以前から続く経済的に強い結びつきの数郡をまとめた地域である。8世紀以降、範囲や構成要素は変動するが、在地社会の基調となる単位として、門脇禎二氏の「地域的交易圏」と共通する概念を考えておきたい。

また上里町中堀遺跡のデータは、膨大な数値となるため第1・2図のグラフには、盛り込まれていない。また灰釉陶器の一覧表にも掲載しなかった。（田中・末木 1997）を参照していただきたい。

註5　『静岡県の窯業遺跡』他、近年めざましい研究成果が上げられている（松井 1989）。

註6　ただしここで浜北産とした製品は、尾北窯跡群他の製品である可能性もある。

註7　灰釉陶器の生産地に隣接した一般的な消費遺跡は、実は余り明確な調査例がない。例えば愛知県の大毛沖遺跡などでは、出土遺物の主体は、溝や旧河川からの資料である（愛知県埋蔵文化財センター 1996）。これは東海地方西部が、すでに竪穴住居から掘立柱建物跡へ居住形態が転換していたため、埋没土量が、関東地方と同次元で論じることに無理がある。しかし黒笹14号窯式段階から灰釉陶器、または灰釉陶器につながる須恵器は、一定量集落の一般消費財として、その地位を確保していたといえよう。

註8　灰釉陶器の型式存続期間は、斎藤孝正氏によると黒笹14号窯式は9世紀第I四半期、黒笹90号窯式は9世紀第II～IV四半期とされている。生産年代幅から生じる消費量の格差も考慮しておく必要があろう（斎藤 1994）。

註9　このデータには、調査面積の多少は勘案されていない。新屋敷遺跡や北島遺跡・揚羽木遺跡などは、大規模調査の数値であるため、少数出土の集落遺跡でも、なかには、調査面積の拡大によって、この程度の消費量を確保できる遺跡は、多数潜んでいよう。

註10　神谷　1998によると甘楽郡の下仁田町南蛇井遺跡群でも光ヶ丘段階から東濃産の灰釉陶器が、比較的積極的に消費されていたことが明らかにされている（神谷 1994）。

註11　北島遺跡は、これまでの調査区の北東部を現在でも調査中である。9～11世紀にかけての施釉陶器が出土しており、東濃産の灰釉陶器が圧倒的に多い。今後の整理によって産地別の構成比率は、大きく東濃産に傾く可能性が高い。

註12　この現象の背景には、10世紀前半に入って猿投・三川・浜北窯跡群などの生産が低迷し、主体的な生産は、瀬戸市や遠江の窯へ移動していたことが揚げられる。

註13　所沢市東の上遺跡では、7世紀から8世紀の幅12mの道路跡が確認されている。また同遺跡では、宝亀2年以降と考えられる方位や幅員の異なる別の道路跡も確認されている。

註14　片岡郡の若田郷は、関東山地の山間部から関東平野への出口にあたる。烏川によって群馬郡長野郷と隔てられ、東山道は烏川を横切る。若田郷内の高崎市八幡中原遺跡や引間遺跡では、多数の掘立柱建物跡群が確認されている。また片岡郡家の推定地も近く、碓氷郡秋間窯跡群や片岡郡乗附窯跡群の製品を集積・出荷したところも近いであろう。

註15　片岡郡の佐没（佐野）郷は、『万葉集』に「佐野の舟橋」と詠まれ、甘羅・多胡郡から群馬郡へ向かう交通路と、烏川が交叉する場であった。

註16　幡羅郡の荏原郷は、利根川の乱流地帯にあたり、三日月湖や自然堤防が複雑に入り組む地形であり、かつて東山道武蔵路の通った地域である。妻沼町の飯塚北遺跡では、豊富な灰釉陶器・緑釉陶器が出土している。旧流路の入り江に形成され、川津の機能を備えた遺跡であろう。

註17　大里郡市田郷は、「市」を郷名とするように、荒川と東山道武蔵路の交わる地点であることから、郷内に地方市のみられた可能性が推定される。荒川の対岸には、大里郡久下（郡家）郷がある。

註19　陸奥国府である宮城県山王遺跡多賀前地区の灰釉陶器を実見させていただいた結果、東遠江産や浜北産の製品がみられた。詳細は、後日記したい。

註20　参議の文室秋津は、弘仁2（811）年に征夷大将軍として陸奥・出羽にあった文室綿麻呂の子にあたり、武蔵守に任ぜられるなどその経歴は、東国との関連が深く、彼が議政官として成長したとき、その手腕が発揮された。

註21　藤澤良祐氏によれば、半径30～40kmが、瀬戸産山茶椀の商圏とされ、生産者が、振り売りしたとされる。（藤澤 1994）

註22　緑釉陶器については、別稿で明らかにした。（田中 2000）

参考文献

※埼玉県内の施釉陶器を出土した遺跡の報告文献であり、第1～12表、第3～7図表と対応する。なお『研究紀要』第11号掲載文献は割愛した。

上尾市教育委員会　1997『秩父山遺跡－第3次調査－』

朝霞市教育委員会　1996『向山遺跡・稲荷山遺跡・塚越遺跡』

浦和市遺跡調査会　1985『大間木内谷・和田北・和田南・吉場・西谷・宮前遺跡発掘調査報告書』

浦和市遺跡調査会　1993『宮山遺跡発掘調査報告書』

浦和市遺跡調査会　1993『大久保領家片町遺跡発掘調査報告書』

浦和市遺跡調査会　1997『下大久保新田遺跡発掘調査報告書』

大宮市遺跡調査会　1984『深作東部遺跡群』

小川町教育委員会　1995『六所（3次）・日丸・町場遺跡発掘調査報告書』

小川町史編さん委員会　1999『小川町の歴史』資料編1　考古

越生町教育委員会　1983『越生五領』

神川町教育委員会　1994『庚申塚遺跡・愛染遺跡・安保氏館跡・諏訪ノ木古墳』

神川町教育委員会　1995『真下境西・反り町・八荒神北・八荒神南遺跡』

神川町教育委員会　1995『安保氏館跡』

上里町教育委員会　1997『田通遺跡』

川口市教育委員会　1985『叺原遺跡』

川越市教育委員会　1996『川越市埋蔵文化財発掘調査報告書（XI）』

川本町教育委員会　1995『鹿島平方裏遺跡発掘調査報告書』
北本市教育委員会　1988『丸山遺跡・宮岡遺跡』
児玉町教育委員会　1996『東施沼・藤塚Ｂ１・児玉条里遺跡』
児玉町教育委員会　1998『向田Ａ・向山Ｂ・壱丁田遺跡』
埼玉県　1984『新修　埼玉県史』資料編３　古代１
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1985『原・丸山』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1986『中矢下・夕日ノ沢・上前原沢・芝口オネ・後山北谷・滝尾塚』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1994『稲荷前遺跡（Ｂ・Ｃ区）』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1995『森下・戸森松原・起会』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1996『菅原遺跡』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1996『八木上・八木・八木前・上広瀬北・森坂北・森坂』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1996『広木上宿遺跡』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1997『山王裏・上川入・西浦・野本氏館跡』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1997『今井川越田遺跡III』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1998『築道下遺跡II』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1998『樋の上・岳山』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1985『原・丸山』
狭山市教育委員会　1997『宮地遺跡－第５次調査－』
志木市教育委員会　1989『志木市の文化財』第13集
志木市教育委員会　1991『志木市の文化財』第16集
志木市教育委員会　1997『志木市の文化財』第25集
志木市教育委員会　1999『志木市の文化財』第26集
東部遺跡群発掘調査会　1990『宮ノ脇遺跡』
飯能市教育委員会　1994『飯能の遺跡（16）』
比企地区文化財担当者研究協議会　1994『比企郡市における埋蔵文化財の成果と概要』
深谷市教育委員会　1990『上敷免遺跡（第３次～第６次）・上敷免北遺跡（第３次）』
深谷市教育委員会　1994『深谷市内遺跡VI』
富士見市教育委員会　1994『富士見市内遺跡II』
富士見市教育委員会　1996『富士見市内遺跡IV』
美里町遺跡調査会　1996『木部原遺跡』
美里町教育委員会　1998『猪俣北古墳群・引地遺跡・滝ノ沢遺跡』
毛呂山町教育委員会　1995『まま上遺跡』（第２・３次調査）
和光市教育委員会　1998『花ノ木遺跡（第２次）・城山遺跡』
和光市教育委員会　1994『峯遺跡・峯前遺跡』
早稲田大学本庄校地文化財調査室編　1980『大久保山Ｉ』
早稲田大学本庄校地文化財調査室編　1993『大久保山II』
早稲田大学本庄校地文化財調査室編　1995『大久保山III』
早稲田大学本庄校地文化財調査室編　1996『大久保山IV』
愛知県埋蔵文化財センター　1996『大毛沖遺跡』
浅野晴樹　1980「埼玉県内出土の平安時代末期の施釉陶器」『研究紀要』埼玉県立歴史資料館
大江正行　1990『仁田遺跡・墓井遺跡』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
門脇禎二　1960『日本古代共同体の研究』東京大学出版会
神谷佳明　1994「南蛇井増光寺遺跡Ｂ区出土の灰釉陶器について」『南蛇井増光寺遺跡』㈶群馬県埋蔵文化財調査

事業団
斎藤孝正　1994『古代の土器研究』3　古代の土器研究会
斎藤忠志　1989『流通のはなし』
千田　稔　1974『埋れた港』学生社
田名網宏　1969『古代の交通』吉川弘文館　日本歴史叢書24
田中広明　1994「関東地方の施釉陶器の流通と古代の社会」『研究紀要』11号　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
田中広明　1997『中耻遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
田中広明　2000「緑釉陶器の流通と武蔵国北部の古代社会」『埼玉考古』第35号　埼玉考古学会
平野邦雄　1969「古代の商品流通」『流通史』I　体系日本史叢書13　山川出版社
藤沢良祐　1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号　三重県埋蔵文化財センター
松井一明　1989「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会

研 究 紀 要　第16号

2 0 0 1

平成13年3月25日　印　刷

平成13年3月31日　発　行

発　行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里村大字船木台 4-4-1

☎ 0493－39－3955

印　刷　望月印刷株式会社